川柳塔

昭和四十一年一月九日　第三種郵便物認可
平成二十年二月一日発行（毎月一日発行）
創刊大正十三年　通巻九六九号

日川協加盟

No. 969

二月号

自費出版 川柳・俳句・エッセイ・小説

新聞・チラシ・ポスター・伝票等

あらゆる印刷物の事なら、まずお電話を……。
あなたの思いをかたちにします。

美研アート

〒530-0022 大阪市北区浪花町９番４号
TEL（06）6372－1178
FAX（06）6372－1196
E-mail：bikenart@wonder.ocn.ne.jp

信頼され、社会に役立つ製品を作る

高級封筒専業メーカー

コーキ封筒株式会社

本　　社　富田林市若松町東３丁目７番８号　〒584-0023
TEL 0721-25-7210　FAX 0721-25-9484
東京営業所　東京都中央区日本橋本石町４丁目５番８号　〒103-0021
（日本橋川村ビル４F）
TEL 03-5255-5158　FAX 03-5255-5159
http://www.koki-envelope.com

人間陶冶の道

河内天笑

一月十三日より話題多き大相撲初場所がはじまった。やや下降気味のすもう人気だが初日以降連日満員御礼。ところで二場所つづけて二桁の星をあげた関脇の安馬関にマイクが向けられ大関への道が拓けたことに触れると「自分の相撲をとるだけです」だった。彼の言う自分の相撲とは素早い立合から強烈なのど輪攻めでのけぞらせ相手に十分な相撲をとらせずに勝つという取組だ。前号での「川柳塔の句とはどんな句」の問いに対して「借り物でない自分を詠む事がいのちある句を生む原点だ」とした。インタビューを聞いていてどの道も同じだなと思いを深めた。

底流に批判の心を忘れず、世の中を、そして暮らしのもろもろを平易な日常語で詠むことが最も大切で「川柳塔の句はこうあるべき」などと枠に嵌めて考える必要は全くない。また内に向かった自分を詠む時は勇気を出して自分の負の部分を吐露してゆくことをお勧めしたい。私は路郎作品が特に好きだが豆秋の作品も同じくらい好きだ。いい作品をたくさん知っているのは無形の財産に等しい。

他にも人柄や作風に感じ入る所があればすぐにでもその人の作品を鑑賞し、お気に入りの作品を全て書き留め最終五十句くらいに絞っては大きい字でA3の用紙に整理している。こうすれば鑑賞力のみならず、知らず知らずの内に作句レベルも向上して行く。未だに鑑賞していない本も句集も百冊以上あって生きている限り今まで通りを実行して財産を増やしたい。その途中でこてんと死ねたら最高だ。

初心から約五年（S42~46）くらいの作品で褒めていただいた句を参考にして下さい。

エレベーターよ私は粗品だけの客
火をつけた女特等席にいる
夜だけの家賃を払う共稼ぎ
せんど見たあと天ぷらになるもみじ
肚の虫治まる頃は酔いつぶれ

五年前、青森県東奥日報のお招きで講演させて頂いた折、参加者に差し上げる私の色紙を五枚程の内から選びたいので送れとの事で次の五句を書きました。ご参考までに

火だるまになろうとも橋渡るべし
恋甘しその百倍もくるしんで
杉木立いま満月をさし上げる
◎ふところにバラと銀河とエンピツと
この森ははじめてなのに懐かしい

◎印の色紙が印刷されて参加者に配られました。

◆

自選句

ニッポンとニホンを旨く使い分け　天笑
おなかすかしたスーパーで買い過ぎる　〃
罰当りそう銀シャリに鰹ぶし　〃
寸法出しくらいで済まぬ腹まわり　〃
プレッシャーの中でやり甲斐を見つけ　〃

座右の句
年明けただけでほのぼの天地人　（薫　風）
私の句
ありがとう母を看取った我が妻よ　藤井則彦

川柳塔　二月号目次

題字・中島生々庵／表紙きり絵・前田　尋「伊吹山」

■巻頭言　人間陶冶の道……河内天笑：（1）
台所俳句と選句……早川清生：（2）
川柳塔（同人吟）……河内天笑選：（4）
温故知新……木津川　計：（48）
川柳塔の川柳讃歌(38)……（49）
自選集……西出楓楽選：（53）
水煙抄……（77）
路郎句抄……新家完司選：（78）
愛染帖……（82）
誹風柳多留一一篇研究　31……（84）
檸檬抄「火」……鈴木公弘・西口いわる共選：

台所俳句と選句

早川清生

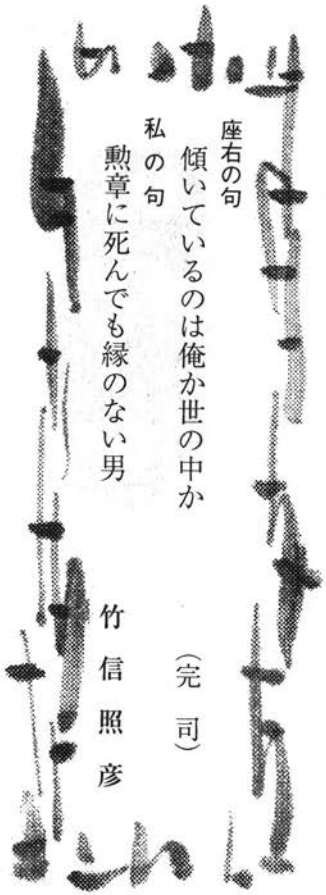
和歌が万葉以来女性の文学とされてきたのに対し、俳句はほぼ男性の世界でした。女性が進出したのは、虚子が女性の資質に着目し、経営対策もあってホトトギスに「台所雑詠」という欄を設け、女性の投稿を呼びかけてからです。爾来すぐれた才能が輩出し、もう台所俳句か、と軽侮の眼で見る人はいません。

西鶴の女みな死ぬ夜の秋　長谷川かな女
桃食べて計のこと再び口にせず　安部みどり女
足袋つぐやノラともならず教師妻　杉田久女
ふところに乳房ある憂さ梅雨ながき　桂　信子
白露や死んでゆく日も帯締めて　三橋鷹女

それぞれに鋭い感性です。さらに昭和四〇年代、カルチャーブームが到来し、高度経済成長のもと急速に主婦層に俳句が広がりました。今や俳句人口の八割が女性といわれ、俳句に質的な影響も与えています。

ここで突然私事になります。私が路郎門にいた頃、女性の川柳作家といえば路郎師のよき補佐役であった葭乃夫人と、楓楽さんのご母堂一栄さん、悲運の生涯だった武部夫人の

一路集
「餅」……青戸田鶴選…(86)
「セーター」……森　茜選…(86)
「こだわる」……高橋宏臣選…(87)
初歩教室「鬼」……三宅保州…(88)
秀句鑑賞┌同人吟……都倉求芽…(90)
　　└水煙抄……水野黒兎…(92)
■エッセー　俳句と川柳の仲……仁部四郎…(93)
■各地句会だより　川柳茶ばしら……早川遡行…(94)
神原　文さんを偲ぶ……浅野房子…(95)
一月本社句会……(96)
各地柳壇（佳句地十選／木村富美子）……(100)
柳界展望……(117)
二月各地句会案内……(118)
■編集後記（ひとこと／岩佐ダン吉）……希久子・恵子…(120)



座右の句
傾いているのは俺か世の中か　（完　司）
私の句
勲章に死んでも縁のない男
竹信照彦

若菜さんなど寥々たるものでした。私は川柳雑誌の終焉とともに作句をやめてしまったのですが、その後ご縁があって川柳塔への帰参がかない、初めて本社句会へ出て腰が抜けるほどびっくりしました。広い会場びっしりの参加者があり、しかもその大半は絢爛たる女性だったのです。俳句の場合と同じ状況が川柳でも起っていました。たまたま隣席におられた加島由一さんが「女の人は熱心だし、いい作品をつくります。句会で彼女たちに勝とうなんてとても無理です」と教えてくれ、事実そうだったのです。二人とも負けました。

こうした事情は支部レベルの句会でも同じでした。私なんか古風な自分なりの独善的川柳観に固執しているので、句会に出るたび全没につぐ全没、まったく終戦直前の日本軍でした。これは今も続いているので、腹いせをちょっと言わせて下さい。選は短詩型の宿命で、選者は提出作品に生殺与奪の全権をもちます。それだけに責任は無限大なのです。

久しぶりに出た句会の選者はさすがにみな練達、心理の襞の描写に卓越し、叙情の把握に習熟しておられると感じました。だが選者はマルチな才が求められます。たとえば心情句専門、身辺句専門というのでは困るのです。作品の鑑賞とか批評は自分のレベルでしかできません。選者には社会性とか批判詩としての川柳にもお気配りを得たいのです。

松山市　古手川　光

値上げは素早く値下げはゆっくりと
十二月誰かアクセル踏んでいる
サブプライムローンの迸りを食う
相撲協会の割には小さい肝っ玉
潮時を読んで抜け出す梯子酒
眠らない街で人間狂いだす

京都市　高島啓子

寝返りをうつたび冴えわたる月よ
月の裏二重帳簿が置いてある
如才ない方ていねいに御辞儀する
進化して靴の型になった足
買えばすぐ植え替えてやるシクラメン
万華鏡七度回すと古稀が来る

大阪市　森田明子

装いを解いて眠りにつく紅葉
マフラーを贈られてから冬が好き
満天とまではゆかぬが冬の星

河内天笑選

譲られて欲の深さを恥じている
計算をするから闇が深くなる
糾弾の裏で巨悪がよく眠る

松山市　髙橋宏臣

この指へ止まった人に傘を貸す
幸せな奴だ鎖が外れてる
ちぎり絵の構図に明日の夢がある
返り咲き垢丹念に落とし出る
水飲み場敵も味方も兜脱ぐ
鵜呑みした話今更吐き出せぬ

弘前市　高橋岳水

ロボットが指揮棒を振る近未来
少子化が寒い未来図ばかり描く
気まぐれなタッチと思うピカソの絵
男気が過ぎて背負い込む後始末
長考の果ての悪手と気付かない
授かったいのちは最後まで焼やす

砂川市　大橋政良

抜擢の椅子で男の旅終る
虫歯を削る頭の芯をしびれさす
つぶやいているのは千切れ雲でした
美しい反論でした影法師
十人十色絞り切れない僕の色
冗談が互いに言える距離にいる

鳥取市　倉益一瑤

知恵袋貧乏神が置いてゆき
思い出の着物に残る火の匂い
わたくしを漂白したい時がある
白旗をかかげてずるくなってゆく
ぽっくり寺小銭で願を掛けてくる
満月がわたしの影を濃ゆくする

和歌山市　福本英子

杖のいる足腰なのに減らず口
狭い視野へ緑内障が追ってくる
鰯まで鯛や鮃と時価で出る
賞味期限書いてあるから後回し
茶の友を信用したら火傷する
正論を吐くとどの子も寄りつかぬ

三田市　北野哲男

母は留守丹精の花見て安堵
わたしまだいぶし銀より金が好き
白い目で睨み返しておく返事
一応は声を掛けるが来んといて
酒好きが早目にあけた玉手箱
目を逸らす男に大事任されぬ

大阪市　古今堂蕉子

月ヶ瀬に梅一輪のあわて者
トイレに立つといつも妻入ってる
御利益は信じる人についてくる
柚子味噌を練り　大根を買いに出る
赤ちゃんを見るとニッコリしてしまう
気分良く飲んで歌って重い足

河内長野市　山岡冨美子

日々好日肩の凝らない服を着る
縦縞の似合うヒーロー待つキャンプ
誘われた鮨屋にちょっと身構える
主義主張なんでもありの回り寿司
裏技と言えば聞こえのよい手抜き
湯の宿で洗い流している奢り

鳥取市　春木圭一郎

失敗をしない人生つまらない
嫌なこと同じやるなら楽しんで
曖昧に生きると余裕笑顔でき
物事の明るい面を見て生きる
考えを変えて迷わずやってみる
何事もお金をかけず楽しもう

字は楷書心は草書身は隷書
もうなのかまだがいいのか七十歳
針金の通りにならぬ松の意地
もう春だ萌黄のシャツを着てやろう
この年を終い納める偽という字
神よりも友を信じて生きている

大阪市　川端一歩

張り切って早早飛んできた子年
赤い靴気合いで買って飛び歩き
硬い日も柔らかい日もある水加減
スパゲティーやっぱり箸が性に合い
静かすぎトイレ気遣う美術館
疑って身の卑しさに寒くなり

堺市　西村りつえ

違反ならしてるよ俺も警察も
天高く脂肪は増える毛は抜ける
煩悩が残り火つつく冬籠り
七人の敵と論じる縄のれん
煩悩を押えて生きるカスミ草
苦しんだお蔭幸せ身にしみる

鳥取市　中宇地秀四

月の影から始めて見たよこの地球
快い日射しと落葉踏んでいる
気持よい目覚め一日楽しそう

米子市　青戸田鶴

温かい目にさそわれて旅に出る
勿体ないがいつも心の隅にある
目を閉じるとうっすらうつる仏さま

枚方市　伊達郁夫

空っぽの郵便受けをまた覗く
新聞に包み人情渡される
弱気だな語尾が優しくなっている
人の来ぬ所に作る非常口
お隣の花はやっぱり美しい
どの角度からも菩薩に見える母

柏市　河野桃葉

ロボットの知恵はパートを軽くする
リハビリを脱出春の靴を買う
善人のカンパ臓器の児を救う
平等の愛へ素直な児に育ち
ご機嫌なスズメが洩らす内緒ごと
老母の知恵息子の知恵を良く借りる

和歌山市　松原寿子

歌を詠む母と呼吸の合う春よ
横糸へわたしの想い織り込もう
山ひとつ越える掟を道づれに
遅れがちな柱時計が拗ねている
森の樹々騒ぎ記憶が冴えてくる
母のぬくもりがまだある小物入れ

熊本市　永田俊子

知らぬことばっかり辞書の一頁
最敬礼復活お詫びのお歴々
ゆっくりと手紙の裏を読んでいる
母性愛赤ちゃんポストに捨ててある
上澄みの水しか見なかった私

熊本県　髙野宵草

真っ白な霜南国に冬が来た
お年玉だけの絆で孫育つ
今日満たす余生に明日を思わない
遺伝とはどうにも僕の偏屈さ
共白髪やっと阿吽が合いました

熊本県　岩切康子

返り咲きサツキ一輪美しい
免疫の増える話にトマト摂る
注射嫌いワクチンの力信じてる
美術館出ると彩り天然美
夜の道怖く投函また延ばす

シドニー　坂上のり子

坊さんとおしゃれ談義に沸くワイン
バカ正直これはある意味バカだろう
人殺しも普通の顔で隣組
人の家土足で走るアリの群れ
毛を落す猫は証拠を隠せない

弘前市　福士慕情

永平寺自分探しの足を組む
警策を打って頂く座禅堂
永平寺凡夫の欠片置いて来る
振鈴が七堂伽藍朝にする
参拝を済ませ俗世に戻る酒

弘前市　岡本花匠

鱈の産卵を急かせて雷鳴す
充電の至福の旅へフルムーン
欲しがらぬ戦時に似ますエコライフ
ウォームビズ病魔もさけるエコライフ
厚情に甘え五体の錆落す

弘前市　今愁女

老舗ものは買わずにおこう歳の暮れ
極月に木々の華飾も哀れなり
ボーナスのなきことも慣れ年の暮れ
年々に暦の数も減ってくる
レイ懸けて腰振るもよし年忘れ

弘前市　髙瀬霜石

青空を味方につけて朝を出る
リフォームをしたいものです胴回り
一石二鳥かならずシッペ返しくる
古傷に触れないままでいる絆
男の視野の美人・人妻・未亡人

雪下でも雑草強く伸びている
三年間補欠で終った土根性
戸棚にもＡＢＣの指定席
整頓の戸棚亡母が語り出す
盗難の財布職場を闇にする

弘前市　須郷井蛙

二ヶ年の音信不通君知るや
帰省に仕事願ったり叶ったり
待ち人こないやむを得ず返送す
返送の荷物も宙に浮いたまま
月仰ぎ異境で果てる無念かな

弘前市　櫻庭順風

振り返る古希は記憶の通過駅
計算の中味に利息嘘のよう
主張する事を知らない貝の日々
隠したい傷は湯ぶねで覗かれる
予習した事から運をさぐり出す

弘前市　相馬銀波

世渡りの極意だ笑顔絶やさない
絶倫のあかし頭の毛が薄い
北風が吹くと胸張る鍋奉行
無礼講平が自慢のへそ踊り
渋抜きをすれば淑女ができ上がる

黒石市　相馬一花

湯豆腐が饒舌になる霏々と雪
雪を掘る春の手応え掴むまで
雪しんしんつららが太く長くなる
雪国に生まれたきめの細やかさ
日当りを求めて鉢の福寿草

黒石市　佐藤古拙

行って見る座敷わらしの居るおやど
古里に今もあります何でも屋
給食のパン思い出すあの頃の
繁昌した店も時代の波に消え
若かりし頃思い出すいい夫婦

十和田市　阿部進

どことなく似てくる不思議孫の顔
ケータイに焼きもちやいている受話器
還暦を迎えた雪の吹き溜まり
待ち合い場所蟻の動きの無人駅
やる気ならまだあるリンゴ丸齧り

平川市　小寺花峯

おみくじはいつも良縁ありと出る
人混みでつい姿追う冬帽子
結婚しないのと問えば何故するの
眉ひそめ偽装偽善のニュース見る
月からの地球の青は美しい

さいたま市　星野育子

さいたま市　八田　敏

頭痛するすぐ梗塞を疑われ
菊始末まだきれいだと外野席
領収書貰って安心品忘れ
もみじマークつけてダンプも怖くない
同病の友入院で元気づき

日高市　根岸方子

落葉との会話楽しむ散歩道
一人旅小径の花に小半日
両親の面影探す明治村
魚捌く俎板にする紙パック
顔相が誤解の元と決めつける

柏市　永峰宣子

寺で聞く民話に心暖まる
民話から里の暮しが垣間見え
美女の舞お面をぬげば男の子
忘年会温泉付きが受けている
新鮮な驚き貰う子供の詩

東京都　清原悦子

検索の行方を辿る指の先
まだ母がいるから里の切符買う
遅咲きの花も立派に実をつける
寝る前に絵本を読んでいる絆
飼っている訳ではないが虫が飛ぶ

東京都　岸野あやめ

還暦の娘へ母親の感無量
一円領収書取って巨悪に蓋をする
割り切って生きねばならぬ傷もある
傷跡もショックも日にち薬とか
膝と腰昨日あたため今日冷やす

東京都　小川賀世子

中くらいの幸せで良し屠蘇を酌む
取りあえず笑って過ごす三ヶ日
もう師走窓の汚れが目立ち出す
川柳にストレス食べてもらってる
下手でよい絵手紙さえも奥深い

東京都　長谷川康子

マニキュアはしない胃袋預かる身
感動を強要はせぬドキュメント
不要品買う雨の日の二割引き
猫に鈴つける役割引き受ける
どうしてもゴムにはしたくないウエスト

武蔵野市　亀井円女

逝く日までサムライだった亡夫が好き
ああ言えばこう言う孫に期待感
女の夜は長く楽しい姦しい
トータルはやっぱり間抜けのお人好し
目醒めはキムチ頭すっきりオハヨウさん

横浜市　小野句多留

日程をこなす喜びある師走
謝罪する以下同文という輩
年明けも待てぬネットの福袋
雪溶かす道路雪国らしくない
秋を呑む香嵐渓の美に浸る

横浜市　菊地政勝

妄想がふくらんでくる聞きかじり
松の内貧乏神は寄るでない
着こなしの和服おんなを意識させ
能力を越えた期待につぶされる
気に入った服が外出そそのかす

富山市　島ひかる

癌末期たたかう実兄の十二月
父親と同じカルテを持つ兄よ
モルヒネも効いて安らかなる寝息
兄さんのお陰いじめっ子に会わず
ひたすらに走り続けて来た兄よ

静岡県　薗田獏沓

ディズニーのねずみが猫と踊ってる
走る雲見て屋上で詩が浮かぶ
お楽にと言われる度に固くなり
妹が産まれ覚えた半分こ
訓練の時は消火器うまく消え

犬山市　金子美千代

逢いたさがまた募りだす風だより
久し振り家族揃った旅に酔い
餌取りの名人がいる浮きの揺れ
別荘の一夜セレブの夢を見る
干し柿を吊るしわくわくする景色

犬山市　吉田幸子

椅子が好き加齢はにかむ膝小僧
突然の変異結石暴れだす
自動化へ交わす言葉を置き忘れ
ガソリンの値上げ自転車大奮闘
炊き立てをふっくらと盛る今朝の霜

犬山市　関本かつ子

紅葉の先へ先へと山登り
値上りの明日を見越した灯油缶
焦げ過ぎもある満席のモーニング
いつからか判子出番のない師走
品格を装う人に金が要り

尾張旭市　三浦きぬ

病室で省エネという風邪を引き
北国の珍味送ってくれる子ら
教え子の車で治療院通い
何もかも放り出せたら楽だろう
足二本杖二本たし歩むなり

寒いのはいやでも冬は冬らしく
小型犬連れているのは大男
二極下の下は見えない高級車
一言がまだ尾を引いて開かぬ口
故郷の雑煮の話ではじける輪

可児市　板山まみ子

難コース登ったあとの爽快さ
宴会を好きではないがハシゴの日
寒空をものともせずに遊ぶ鳥
アイゼンを買って樹氷を観るつもり
夢だけは見せてもらった宝くじ

可児市　鶴留百合

ゴムまりになって弾んだ塔まつり
足を棒にして奈良公園の秋
東大寺人人人の盧舎那仏
雨が降ったり止んだりの二月堂
一と時をシャイに優雅に奈良ホテル

愛知県　早川遡行

天気まで味方につける幹事さん
お金では買えぬ笑顔の贈り物
見栄張ったばかりに高い肉を買う
屁理屈を通し夕食まずくする
デパ地下に見慣れぬ野菜鎮座する

京都市　西村益子

懲りもせず欲でむらがるネズミ講
ありのまま映す鏡がにくらしい
神が裁くまでコツコツと石を積む
万歩計止めて寄り道立ち飲み屋
白黒をつけずグレーではぐらかす

京都市　三宅満子

もひとりの私が遊べ遊ぼ言う
自転車を休ませ駅へ向かう足
結婚しおとこ世帯にシクラメン
嫁のポカ私もやった事がある
傷心の子に見ぬふりの親心

京都市　桝本宏子

三男が心得ている親のツボ
振り向けば雪崩がそこに迫ってる
あのサイン見過ごしてから深い霧
行って来ます鏡にもらうVサイン
カラオケでまだ青春のまん中に

長岡京市　山田葉子

シニア路はじっくり好きに面白く
ネクタイを止め道草に精が出る
自分に合った歯車ならば軋まない
優しいにピッタリの英語は無いそうな
危惧数多老いの水かぶり健康法

亀岡市　井上森生

大阪市　神夏磯　典子

喜寿はそこへルパーさんは聞き上手
人生にまさかがあって面白し
心臓の強い順から花が咲く
表面はどうあれ月の美しさ
無駄のない人生なんておませんな

大阪市　谷口　義

正正堂堂と奥の手を使う
友だちに思考回路を読まれてる
おばあさんから回数券を貰う
妹が決めた香典持って行く
騙し絵の中にふる里隠れてる

大阪市　津村　志華子

柊もいわしも老母は信じてる
北風に気持よさそう奴凧
えんま様少々ですが袖の下
ダミ声でカラスは人の訃を嘆く
路地裏の雀ペチャクチャ唄いすぎ

大阪市　津守　なぎさ

お点前の仕草和服が匂い立つ
活力を貰うシャチホコ天守閣
値切るのもジョーク錦市場の大阪弁
久し振り笑顔溢れるクリスマス
ブレーキが頼りで坂を乗りこなす

大阪市　松尾　柳右子

じいっとする時がきらいな元気者
秋日和雀夫婦の語り合い
スイッチを良く忘れてる炊飯器
到来のカステラ賞味期限日だ
定年後昼のキズシにコップ酒

大阪市　小泉　ひさ乃

年の功四角い話丸くする
天性の明るさ切り札は持たぬ
老いて子に従ってばかりはおれぬ
どしゃぶりが青テントにも容赦ない
濁る眼に虫めがねでも無理な文字

大阪市　渡部　さと美

大夕日今日一日を締めくくり
人心地ついて見る雪あたたかい
子や孫の来る日朝からこまねずみ
胃の中をへびがのたうつカメラ飲む
頭数という役に立つ靴をはく

大阪市　平嶋　美智子

灯明がゆれる母さんしかってる
惚け具合年より先を走ってる
雪纏いさざんかの赤ほこらしげ
本を読む姿勢でいびきかいてはる
青空に時どき元気もらいます

大阪市　小谷集一

角とれて来たと弱気を宥められ
ぎりぎりになると閃くものがある
浴びるほど薬を飲んで不養生
毎日をバリアフリーにして余生
ジャンプする力溜めとく足の裏

大阪市　板東倫子

紅葉賞でた帰路中空の月賞でる
車椅子二列縦隊紅葉寺
友達のまた友達にウツが居る
淋しいと言わぬが顔に書いてある
役人天国ゴルフのあとは天下り

大阪市　川久保睦子

少し幸せ赤いポストが街角に
枯れそうな私に水をやるわたし
二人居の在りし日思うお正月
クスッとも笑わぬトマトあやしてる
ふつふつと行間にある温かさ

大阪市　小糸昭子

スマートな野良猫家のメタボ猫
上ばかり見てけつまずく車止め
吉兆よお前さんまで贋者か
ハワイ旅右も左も日本人
政敵を追い出した人追い出され

大阪市　榎本日の出

私にもあった失敗うなずける
家計簿に毎日書けば怖くなり
アルバムにもどってみたいあの笑顔
お隣と天気ほめ合い布団干す
気にせんでええと言うから気に掛り

大阪市　升成好

待たされて余計にうまい手打そば
音合わせあれは楽器のご挨拶
反骨の血が邪魔をする多数決
触れるなと書いてあるから触りたい
社の整理去るも残るも負の連鎖

大阪市　西川更紗

秋深く良書枕に寝てしまい
勉強もせずラブレター書いた日よ
吉兆の板前ひまを持て余し
へまばかりした一日も縄のれん
シナリオは自分で変える今日のうつ

大阪市　中村れんげ

充ちたりて老いたし今日も読書する
おだてられピエロになって踊ってる
コーラスで歳を聞かれてさばを読む
酒二合昔ばなしが好きな夫
進化した歴史が歩くなにわの灯

大阪市　榎本舞夢

他人故協力出来るボランティア
おしやれして送る時間に間に合わず
先に逝く後になるのも勝手です
夫より金が味方となって来た
色事の相談受けて恋に落ち

大阪市　熊代菜月

乾杯の理由をさがす幹事役
遺言状何度も出して読み返し
並んでも売場を選ぶ宝くじ
口ばかり元気な母の車イス
日替りの小春日和へ旅衣

大阪市　大川桃花

傷心の旅へ他人の温いお茶
辺鄙でも老母にやさしい住み心地
早道はないと額に玉の汗
色々とあったふたりも元のさや
知ることが怖く検診先送り

大阪市　岩崎公誠

下手な絵と謙遜しつつ見せたがり
ちらし見て目玉比べて妻走る
墨入れたダルマの目玉から涙
ヨシモトの大阪弁が乱れてる
あれこれと内部告発偽を暴く

大阪市　池上清治

電話機はロハ通話料ガッポリと
伝わるよう喋ってほしい駅放送
政治家の返事記憶にありません
事務的ミスでしたで詫びる記載洩れ
おばちゃんもマスカラやっている車内

大阪市　中村叡子

国技だと誇る相撲道泥まみれ
贅沢に作り過ぎては罰を受け
たしなみを母妻女さりげなく
鍋焼の出前ばかりを頼む夫
老いました夫唱婦随も疲れ果て

大阪市　福岡末吉

夕餉の灯母が好んだ木の芽和え
道一本拓けた朝の茶が美味い
大空に小さな秘密打ち明ける
声高に諂う我が身小さかり
振り返り自業自得と天仰ぐ

大阪市　井丸昌紀

視力検査両目で先に確かめる
立食いのうどんのだしにある美学
一方通行逆行したら偉くなる
矢印をたどって行けば元の場所
分数で解決できぬ悩み事

青春を爆発させた満洲よ
指呼の間に国境線が横たわる
満洲出てペリリュウ島で散った戦友
狼の遠吠え闇できく歩哨
戦病死を戦死に変える思いやり

大阪市　岡本久峰

師の書にはどこか力が抜けている
スタートは好きなページと決めている
すっぴんで師の書の中を泳いでる
やわらかな呼吸ができる書の力
師の書から生きるヒントを拾てくる

大阪市　岩崎玲子

組紐の駒カタコトと伊賀の郷
マイカーが泊る気で飲む無料の酒
観覧車別れ話がまだ続く
親芋を引けば子芋がついてくる
うっかりと土産忘れた終電車

大阪市　川原章久

迷惑な話も一度聞いてやる
百日紅植樹も済んだ彬の碑
孫八人迎えるための畳替え
軍事費を狢ハゲタカ食い荒らす
静寂のあとわき起こるアンコール

大阪市　近藤正

子が巣立ち妻が門限守らない
少しある遺産に威張る紙オムツ
こんな世に試薬さえない惚れ薬
雑草でどんな苦労も堪えられる
なんでやねんホテルロビーに妻がいる

大阪市　奥村五月

青春の昔戦の影を追い
日々好日太陽西へ潔い
野の草に老いの顛末語り掛け
孫が来る楽しみ背なに祖母元気
前進の一歩地球と自転する

和泉市　西岡洛酔

お隣のグチも聞こえる安普請
家計簿の赤字に絞る知恵が出ず
ちぐはぐな会話に慣れた老夫婦
妻が留守少し息抜き出来ました
ため息をついたあなたが負けですね

和泉市　横山捷也

偉そうに髭生やしてる方が部下
長過ぎる小言あきれる膝小僧
送金は少し余分に親心
自分への褒美と高いお買い物
旅帽子被る家内が他人めく

茨木市　藤井正雄

大阪狭山市　矢野　梓

ライトアップされて紅葉が眠れない
紅葉に映えてやさしい羅漢さま
前置きを言うから本音伝わらず
呑めないで困り呑みすぎても困り
十二月会釈だけして通り過ぎ

交野市　森本弘風

金婚のディナーまではと二人の目
あの頃の旅行九州ハネムーン
年を経て互いに耳も遠くなり
五十年妻が車掌の縄電車
老眼鏡苦労のシワは見たくない

交野市　山川日出子

ローソクの数が増えたよ誕生日
脳みそがゆるんでいるぞ箍はめる
いつの日か故郷の山へ只今と
二歳児を泣き止ましたよ指狐
一年余覆面調査三星店

河内長野市　坂上淳司

休みなく脈打つハートありがとう
自転車操業月月火水木金金
悶々とただ悶々と不登校
雑巾を絞る機会のない子ども
食の秋絞り切れないメタボ腹

河内長野市　水谷正子

病院でめったに逢わぬ人に遇う
腰痛が腰痛聞いて癒やされる
炎から赤子受けたは神の手か
品格のブームが去って偽の舞台
寿司食いねェ今ではビザを食べ給え

河内長野市　植村喜代

ちょっと出ないとびっくりする変りよう
いつまでも歩ける幸せあればいい
死ぬ死ぬといってる人がまめに食べ
人が寄る所に塵も寄って来る
昼ぐらいうどんラーメンいいじゃない

河内長野市　村上直樹

大食いがスターになれる世の歪
繁昌亭なにわに燦と文化の灯
リニューアルの恋を拾いに戎橋
みどり児の笑顔ここにも神おわす
雑草でいい雑草のまま朽ちる

河内長野市　井上喜酔

年金で生きる喜び長寿国
頑固でも病に勝てず救急車
リニューアル胸を張ってる戎橋
品格が落ちた老舗の店じまい
好きな趣味ぎっしり妻のカレンダー

岸和田市　森　元　ふみよ

爺婆にプレゼントする可愛い手
名子役大人を煙に巻く達者
ヘソクリがばれて夫婦の仲怪し
貯えをはたいた息子ニート族
律義者父の両手はしみだらけ

岸和田市　雪　本　珠　子

嘘つけずここは一先ず貝になる
お洒落にも自分自身の哲学を
黙りも言葉の一つかもしれぬ
少々の刺激じゃ脳の錆落ちず
見方変え自分の殻を脱ぎ捨てる

岸和田市　原　　さよ子

石仏の肩あたたかい野の真昼
用意した薬飲まずに旅終る
ジンクスをかつぐ弱さも歳のせい
まごころのこもるお粥の口ざわり
こころねに触れてやさしさ身に沁みる

岸和田市　岩　佐　ダン吉

正論のたったひとりにある波紋
人が溢れやっぱりひとりだなと思う
貰いもんですがと母の癖らしい
ゆとりなどないが笑顔は絶やさない
不屈のペン異才放っている彬

岸和田市　井　伊　東　吉

温い雨止めば真冬の来ると言う
風邪予防接種ワクチン切れぬ間に
初めてのベトナム料理口に合い
口変わるセロリが好きになった古希
北京行き見事果した星野流

岸和田市　土　橋　房　枝

六十路から知識欲だけ治まらず
母にある涙袋という慈愛
古日記わたしより先灰にする
神様に願いごとする低い声
つい吐いた言葉ライバル逃がさない

岸和田市　小　島　笑　司

笑い茸食べて来たよな友がいる
残酷鍋見つめてやはり進む箸
当りくじ私を避けてばかりいる
靴下を吊るして孫はニヤリ寝る
夜を待つ我が家に灯るルミナリエ

岸和田市　堤　　楢　代

私にも微笑みくれる人が居る
この歳になってハニカミありますよ
幸せを数えて生きることにする
メタボリを忘れる秋のうまいもの
人間を相手にしようネット族

クリスマス正月母は楽じゃない
出勤をするのがおしい日本晴れ
結局は値段で決めた泊り先
地球にも賞味期限をつけてみる
年金でできる限りの恋もする

堺市　加島由一

不器用を自覚してから楽になり
健康なうちは他人を気遣わず
入社式今日から君は社の奴隷
着心地は問わぬ会社のユニフォーム
定年後自腹で慎ましい遊び

堺市　和田つづや

一人鍋利尻昆布と絹とうふ
一日の終りではずすコンタクト
主役など望みませぬとかすみ草
むなしさは梯子の酒で癒えはせず
難題を避ける本能もっている

堺市　齋藤さくら

健康で終えた一年ありがとう
コンビニを当てにしている妻の留守
青信号急なバイクに悲鳴上げ
しっかりと意見言う友あとがない
省エネにイルミネーション競い過ぎ

堺市　柿花和夫

惨劇のニュース夕餉の箸とめる
万歩計に詫びを入れつつ飲むビール
首かけた男ぬけぬけ欠伸した
スパイスとしゃれても所詮トンガラシ
お互いが主役わが家の無言劇

堺市　源田八千代

迎春にミッキーマウス燥いでる
長生きの屠蘇酌み交わす尉と姥
若夫婦来て活気付く隣組
筋トレも脳トレもありストレッチ
七十になったやなんて思うてぬ

堺市　矢倉五月

日に三度入れ歯洗うも大仕事
少年になり切っているオムライス
嫁誘いデート気分のモーニング
顔を見た途端笑顔になれる友
ケータイはいつも持っててねと言われ

堺市　宮本かりん

血圧を計って朝をダッシュする
父の齢越えてきましたどっこいしょ
脇道がだんだん増えてきた余生
あれもこれも父に聞きたいこと多し
真っすぐに生きて余生を自己主張

共白髪もとはといえば知らぬ人
丁寧な方でお辞儀にきりがない
偶然に会うのは嫌な人ばかり
新調のズボンはゆとり持たせとく
爪楊枝ごっそり持って出ていった

堺市　奥　時雄

風邪マスク着けじろじろと見つめられ
金色の凜と銀杏の散り支度
白菜一個買い青虫とこんにちは
天主より見る大阪の街師走
生かされて一つの事に一つの悔い

堺市　石堂潤子

オリオン座に時々吠える受験生
迷うてる空に鳶が舞っている
逢えばまた病気自慢になっている
救急車まだ遺言が書いてない
義理チョコもホワイトデーを待っている

堺市　志田千代

前進はしたいがのろいかたつむり
ふところで出番を待っているマグマ
エアコンにフィルター掃除迫られる
生きている証あちこち痛み出す
一列に頭を下げて済むミスか

高石市　浅野房子

熱燗が通る五体がみなゆるむ
上役が詰ってるからチャンスない
また違う人と水掛け様参る
少し間をおいた重味のある意見
平和という不思議な国に住んでいる

四條畷市　吉岡　修

この世には寝がえりうって住んでいる
聞きわけのない孤独さに住みつかれ
観覧車遠くに我が家かすんでる
妻の鍋家族まあるく煮込んでる
孫娘長湯の湯音安堵する

吹田市　大谷篤子

地球泣かせる文明という罪科
元気もらいに白寿の母のもとへ行く
ほんとうの味を知ってる幸不幸
気侭です新老人もお子さまも
呪文のように風邪をひかない転ばない

吹田市　山本希久子

十二月八日開戦レノンの死
駅裏の開発消えた店探す
ガラクタを勿体ないが増やします
手に取ればまたも値上げのバーコード
偽流行り疑心暗鬼でみる老舗

吹田市　瀬戸まさよ

箱庭の夢を誰にも摘ませない
サインより三文判が信じられ
天地無用貼って男が吊るされる
くだらないが短い話だから聞く
偽装したテルテル坊主破門する

吹田市　太田　昭

悩むだけ悩んだあげく安い方
万歳で冤罪避ける混みぐあい
心からお詫びしてない顔並ぶ
おはようで昨夜の喧嘩ジエンド
千本のバラを贈ろう妻の古希

吹田市　穴吹尚士

十二月忘れたことを思い出す
片付いて誘い誘われ行く酒場
来る人は毎年来てるクラス会
唐突の便りをもらい眠られず
思い出を語るとみんな若くなり

吹田市　早泉早人

かぐやから地球の出入り見せてくれ
無造作に挿した野菊が凛として
心とは厄介なものよく揺れる
墓を買う話我が身に迫ってる
よく食べて五臓六腑に感謝する

吹田市　須磨活恵

歳なんか忘れて走る好奇心
お好みを食べる仲間とよう笑い
白菜を漬けて一応主婦の顔
肩の荷をおろしゆっくり歳をとる
優しさに触れて長生きしています

吹田市　木下敏子

チュー公も穴から願う良いお年
マスコミの機嫌伺う事件種
ギブミーが口癖になるお国柄
神罰を忘れていないお伊勢さん
白旗を掲げて妻の顔をみる

吹田市　野下之男

薬効のCMうまく買わされる
再会のタイムスリップ夢のよう
老人会わたしも仲間歌うたう
老舗の名汚しお客に起立　礼
全幅の信頼今は敵となり

高槻市　井上照子

安すぎて警戒心を呼ぶ特価
不思議がらずに私だって泣くんです
出来過ぎは偶然だからのぼせるな
最後かもしれぬしれぬと旅重ね
楽しい悪友　家族に嫌われる

高槻市　傍島克治

高槻市　西谷治三郎

おにぎりを買いお袋の味を食う
五十年ボケとつっ込み夫婦道
数かずの薬を飲んでどれか効く
犯罪も景気上昇億単位
青春を去年のように語る友

高槻市　生田義一

孫と居るこの幸続け後十年
なつかしい古賀メロディーを聞く夜長
摂津峡紅葉見事はいチーズ
トップの座夫婦で汚し塀の中
星野さん満面くしゃくしゃ宙に舞う

高槻市　左右田泰雄

気を持たせするりとかわす罪な人
決めかねて玉虫色の先送り
今の子はテレビアニメで知恵をつけ
階段の手摺りよいしょとしがみつき
立ち話と往きも帰りもすれ違う

高槻市　執行稲子

義理欠いてその後の行方雲隠れ
軽い口叩いたつけにうろたえる
虫供養豊作祈る十三夜
優しさの裏に潜んだ捨てゼリフ
うっかりと口に出らした減らず口

高槻市　佐甲昭二

勢いを残して職を去る未練
付合いは浅いが本音読める仲
ガムを噛むだけで終った日の代打
ライバルがしつこく攻める棒グラフ
五時からの上司に習う処世術

高槻市　富田美義

四捨五入すれば元気な歳らしい
去る者は追わずと軽い他人の口
味方とは満開までの事だった
すんなりと決着つけて誤解され
ピンと糸はじいて思慕を確かめる

高槻市　指宿千枝子

現在地忘れぽっかり白い雲
うすうすと感じはじめる認知症
老人じゃない歳をとっているだけよ
ひと間だけ灯して省エネの夕餉
戸締まりを確かめている二十四時

高槻市　大崎侑子

医者行きを迷ってる間に頭痛止み
成り行きに任す　仕事も人生も
虐待犯同じ攻め手で懲らすべし
ぬくぬくと不正で建てた家に住み
幼な子の小さな拍手嘘はない

長生きをしそうで余白空けておく
散歩道人恋しさに声かける
寡黙だが苦労男のひとり酒
湯豆腐にしよう今夜は冷えるから
シンプルに生きたく白い月をみる

高槻市　杉本義昭

大層な見出し世相の裏を読む
前向きで歩む人生迷いなし
焦らずに俺は己の道を行く
愛芽生え娘は父親を避ける
湯たんぽを取り出し凌ぐオイル高

高槻市　峯村勲弘

偽一字猪突猛進荒れて幕
万能細胞不老長寿に夢萌える
灯油高湯タンポチャンチャンコの出番
社会悪怒って見ても始まらぬ
果てしなき夢生き甲斐にして生きる

高槻市　乙倉武史

一年の手抜き悔いてる煤払い
年の暮れ主婦の威力にみな苦言
勝ち負けを男は胸に刻んでる
言い訳の度に仮面が増えてくる
賞味期限過ぎないうちに紅葉狩

豊中市　吉田あずき

渡月橋雨には雨の風情あり
くたびれて落柿舎まではよう行かず
羅漢さま雨にこぶしをふり上げて
髪が減る起死回生の策もなし
婆さんが薬石効あり生き返る

豊中市　安藤寿美子

優しいと言われ優しくしてしまう
いい事があって布団が柔らかい
柔らかな日差しに長い立ち話
遠い人と夜空見ながら語ろうか
まさかには枯れ木も杖になるつもり

豊中市　江見見清

自慢した五体に巣食う百八ツ
母の歳三倍以上生き過ぎだ
献血もドナーも駄目で献体を
人道上病院だけを責められん
まねき上げ師走劇場はなやげり

豊中市　坂上高栄

会社よりわたしのことを気にしてよ
飲むだけで効く気にさせる痛み止め
唾を呑み込んで辞表を引っこめる
子離れをせぬから変な子が育つ
ムシャクシャを鎮めてくれたブラームス

豊中市　藤井則彦

豊中市　岸田知香子

値上がりに寒さは我慢出来かねる
紅葉に雪降りかかる北の国
歳の瀬に値上げのラッシュ悲鳴上げ
Xマスイルミネーション娘にひかれ
ガラス越し落葉の乱舞侘しすぎ

豊中市　山門タミ

一昔人力車から往診医
終焉は夕日の如く沈みたい
足冷えて入れたアンカが蹴飛ばされ
若い頃わたくしだってお嬢さん
眼が冴えて本の続きを読む夜中

豊中市　水野黒兎

ふる里の水が育てた父百寿
苦を楽を煮つめた顔の父百寿
祝われて酒に感謝の父百寿
除夜の鐘悔いることなし父百寿
年金を削られ長寿祝われる

富田林市　大橋鐘造

招待券貰い空席埋めにいく
少年の蒼き瞳は無限大
燃えつきぬ火種を抱いて未だ元気
善人で偉い人にはようならん
心中の鬼を宥めて生きている

富田林市　稲川恵勇

ご無沙汰を重ねたわねと拗ねられる
偶然の出合いよもやの赤い糸
ありがとう言い忘れてる棺の中
神童とばったり出合う青テント
いたずらに馬齢重ねているピエロ

富田林市　片岡智恵子

人の皮膚夢の粘土があらわれた
約束はいつか破れるシャボン玉
面倒な時世の仮面二つ三つ
筋とおす話をみんな煙たがり
騙された数だけ箔がつきました

富田林市　中井アキ

時々はパレットに紅足している
半額セールプライドが泣くルイヴィトン
さりげなく才女は値踏みされている
充電を続けてるのに物忘れ
つぎはぎの翼で余命泳いでる

寝屋川市　平松かすみ

兄上が映るぐるっと関西に
頼もしい傘寿の兄の力瘤
朗らかな義姉からもらっているパワー
ほどほどに笑えば若さ保つらし
週一回映画観賞しています（老人会）

寝屋川市　森　茜

身構えてみたがやっぱり群れのなか
賽銭箱よからぬことを聞き流す
ボリュームを下げてひとりの深夜便
低気圧のせいにしている八つ当たり
街路樹は電飾されてふるえてる

寝屋川市　江口　度

警察は解決すると限らない
年末はいろんな事故が多くなる
テレビ見ていると毎日死亡事故
晩飯はまだだが妻が帰らない
妻居ないそこいら中を開けて見る

寝屋川市　籠島恵子

うれしい日冬の花火をあげている
人力車に乗りたい人と秋の京
聞き返すたびにつっけんどんになる
ポストの口の大中小に今気付く
夜明けのコーヒー両肘ついてのんでいる

寝屋川市　冨山ルイ子

がむしゃらに働いてきた丸い背
弟妹と東照宮のいろは坂
中禅寺揃いの守り身につける
弟妹に助けられての小旅行
暖房機薄型テレビ娘のなさけ

寝屋川市　太田とし子

再会の握手に声が続かない
ゆったりと午後はひとりの童唄
弱虫が歳のせいだと逃げている
乾杯のカチンの音は捨てがたい
如月にバンザイしてるヒヤシンス

羽曳野市　吉川寿美

我を張って握った掌からもれる悔い
淋し気な演技のうまい芒の穂
心枯れぬよう匂い袋を忍ばせる
気ばたらき見せて女の箸休め
言いたくて言えぬ本音が胃にもたれ

羽曳野市　徳山みつこ

吉兆も吉兆ですが防衛費
残り野菜刻んで干してエコライフ
ニンテンドウにボケを心配されている
面会に笑い話も二つほど
冬の星座をまだ歎かせている戦火

羽曳野市　安芸田泰子

木枯しが秋のロマンを吹き飛ばす
満月が沈んで行った池の底
冷凍魚海の温度を恋しがる
適当な返事が重い枷となる
クラス会若さを競う同い年

羽曳野市　三好専平

期限切れキレイな和紙の上に載り
開けサイト　そこに地獄が口をあけ
アメリカの腰巾着も痛みかけ
不条理を笑いにかえる狂言師
シューベルト旅に出たまま帰らない

羽曳野市　酒井一壺

啖呵切り金にけじめを付けた人
みの虫も中でいらいらしています
部下として扱い切れぬ利口者
一言がさてとなったら出て来ない
うっとりと見ている顔のだらしなさ

羽曳野市　永田章司

追試験してやったりの一夜漬け
偶然を装う出会い恋の知恵
白衣着る女房別人婦長さん
便利さが人のなさけを薄めてる
嘘ひとつ辻褄合わせまた嘘を

羽曳野市　吉村久仁雄

人間の業の重さに椿落ち
首切った方もその夜は寝付かれず
譲られた席断れず六十路越え
影踏まぬ距離を保っていい夫婦
心地よい嘘なら少し騙される

阪南市　森村美花

シクラメン買って明るくなりました
手の皺に私の歴史浸みている
防衛省税の痛みを御存知か
重箱に新年の夢詰めておく
新しい日捲りちょっと弾んでる

東大阪市　佐々木満作

煩悩を弥陀に縋って除夜の鐘
遠来の友懐しく麗しく
只今とお帰りの声弾む日々
議員さんみんな初心を忘れてる
地の中で春の息吹を待つ命

東大阪市　笠井欣子

立話メタボの息子嘆く母
公園で鳩は苛めをぼやきあい
バスルーム誰も見てないハイポーズ
赤バスが欲しいと思う遠い駅
静かすぎ時々覗く夫の部屋

東大阪市　米田水昇

余生短し私毎日とんでいる
温暖化地球の荒い息遣い
無二の友天に召されて千の風
風邪の神人の体を出入りする
置き忘れ携帯電話に電話する

東大阪市　安永春

旅立ちを祝う紅白梅だより
母よりも父の優しい大きな手
冷ややかに下弦の月が笑ってる
無理をした父の介護に疲れ果て
息づまりそうにカルテを見る主治医

枚方市　海老池洋

シャンソンのムードで舞うている枯れ葉
足音にも大阪らしいエネルギー
複雑な笑みを浮かべる悪巧み
赤とんぼ消えて童謡だけ残り
冷蔵庫で退屈してた期限切れ

枚方市　丹後屋肇

思い出し笑いに妻の訝る目
笛太鼓ＤＮＡが踊り出す
石段の膝笑い出す遍路笠
メタボリの腹を絞ってくれる寄席
ヘルパーにあやされている二度わらし

枚方市　寺川弘一

いい人と思われてから疲れだす
心の中で発酵させている善意
天国で別居している神仏
露天風呂に浮いて天下は俺のもの
祭りの間誰もお祈りなどしない

枚方市　二宮山久

一年が転がるような老いの坂
ラッシュ時の勤めへ師走の風が吹く
寒風へ年金生活身にこたえ
落葉踏む散歩が好きなペアルック
電飾を今年も飾り春を待ち

藤井寺市　髙田美代子

偽という文字を書かねばならぬ歳
指に息吹きかけ点字拾う冬
アリバイの言えない訳のあるふたり
しんどいとつぶやくどっと歳をとる
松茸を三回食べて秋おわり

藤井寺市　鴨谷瑠美子

翔ぶような年ではないが自由な身
わたくしに気休めと言う胃の薬
中間色を好んで感性が弱い
とりあえずばかり並べて昼ひとり
痛まない手足があってありがたい

藤井寺市　太田扶美代

他人の怪我なのにわたくしが疼く
無器用なとこもだんだん好きになる
賑やかで反面淋しがりでした
紅白に植えて楽しむプランター
悦びはちょっと焦らせてから届く

篝火が元気をくれる初詣で
芋大根届いて故郷の母達者
若き日の視力が欲しい本の虫
歌舞伎座を出て餡蜜を食べに行く
一切れのケーキ二人で譲り合い

藤井寺市　若松雅枝

おもいきり泣いて不倫の恋終る
聞き役がだあれもいない姦しさ
三十五年ローンで古稀が墓地を買う
胃を切ったことは碁敵には内緒
じっとしていると目方が増えそうで

藤井寺市　鈴木いさお

鬼の面隠し迎える午前様
ばあばあもストレスたまりゃ角を出す
年の数豆食べたくて行く歯医者
温暖化うらめしかろう雪女
息子への笹に付けたい福娘

箕面市　広島巴子

亡父とよく行ったお店で痛む胸
有難み亡くなってから身に沁みる
孝行もできずごめんと七回忌
見守って居てねと今日も甘えてる
雑踏で亡父似の人の影を追う

箕面市　出口セツ子

会の名をきそい掲げる菊花展
風通る古本市は客まばら
冬木立見上げる空のすがすがし
地球より人類消える夢をみる
温暖化防止を急げ時間ない

守口市　井上桂作

介護の手借りぬ五体に感謝する
針葉樹威厳を保つ冬の青
装いを重ねかさねて散る落葉
地図広げ今日も小さな旅を組む
お隣の芝生を覗いたらあかん

八尾市　生嶋ますみ

まぶしい女香水もきつすぎる
コンビニで課長の素顔みてしまう
早い目に頼んでおこう施設入り
目に見えぬ効果をあてに呑む薬
夫が側に居るのに退屈をする女

八尾市　宮崎シマ子

あの時も今度も地球青かった
身の丈の欲と仲良くしています
人生の余白明るい色を塗る
そうじ済んだところへ丁度姑が来る
スーパーで見つけた消費期限切れ

八尾市　村上ミツ子

八尾市　吉村一風

朝露の芝心地よく踏んでいく
うまい茶をすすり言葉のサビ落す
妥協はしないつもりを齢がひるがえす
健康と言う残高で生きのびる
ひと呼吸おいてしゃべるとリズムいい

八尾市　髙杉千歩

子の春や初心に返る絵具皿
二ン月の鬼に好物聞いてみる
行間に吐息が洩れる寒の月
笑っても泣いてもひとり胡蝶蘭
医者通いウインドーには春の彩

大阪府　籾山隆盛

春一番確定申告やってくる
一枚のカルテに背負う重い枷
百歳の的へとろ火を絶やさない
ウォームビズ老妻至極元気です
納骨は陽の当たる高台に決め

大阪府　米澤俶子

可も不可もなく一年を小走りに
説明書何度読んでも解らない
パソコンの森が私を迷い子に
老人と呼ばれたくない空元気
欠け茶碗片割れカップ捨てる暮れ

大阪府　澤田和重

金貯めているかのように父メタボ
前向きに生きようがいい日きっとくる
女女しいと思う言い訳してしまう
これ以上サバを読んだら歳ばれる
息抜きをしたいが酒を注ぎにくる

大阪府　野田栄呼

朝型と夜型で響く灯油高
玄関の造花無精を物語る
漬物の重石が腰へ攻めて来る
疑わず明日を信じて二病連れ
世話されず七十代を生ける幸

大阪府　桑田ゆきの

流行語なんでやねんは姿消す
寒いので風も空気もよう読まん
ルミナリエテレビで観てる果報です
何時までもハニカミおれぬプロの道
合格の絵馬が込み合う寒の風

神戸市　両川無限

自分史のページに今日というしおり
ビル街の隅に三丁目の夕日
遺言に夢の続きを書いておく
勝ち組に雑魚の歯軋り聞こえまい
そして冬思い出二つほど捨てる

神戸市　伊勢田　毅

年金暮しボーナスもらう夢を見た
シグナルが黄色で次の策を練る
百均の靴下でよし古希の酒落
政治家の裏技黒を白にする
凡庸な日々で自分史種がない

神戸市　山口美穂

昼の月に見られています露天風呂
今年の字偽とはなさけない日本
歳一つ重ねる感謝除夜の鐘
長生きはするなと税が重うなり
アメリカより日本国民頼みます

神戸市　田中章子

居直れるパワーをくれるチョコレート
ここぞでは頼りにしますダンナさま
紅葉見るわたしの心グラデーション
生き上手プライド捨てるだけのこと
わが孫は歯医者泣かせのおちょぼ口

神戸市　山口光久

京都弁やさしく頬を撫でるよう
四捨五入されてガッツが湧いてくる
底辺は寒さのままの好景気
煩悩と響き合ってる酒の味
福の神知らんぷりして通り過ぎ

神戸市　山田婦美子

着膨れて短い影を見て歩く
悔い一つ残す去年のカレンダー
訃報聞きぽっかり空いた友の位置
古日記思わずにやりとしてしまう
一つ屋根住んでるだけと言う家族

相生市　中塚礎石

年賀状減っても増えること知らず
自慢した孫は大学出て無職
真夜中のベル一回に眠られず
二日酔い社へは風邪だとずる休み
休耕田政治を笑う草が伸び

芦屋市　黒田能子

年金と私一緒に老いていく
世界遺産村が突然光り出す
耳よりな話になるとよく聞え
楽しくて煩わしくもある絆
ご機嫌な父になるからビールつぐ

尼崎市　長浜美籠

世情などしばし忘れてルミナリエ
完璧でない人だから気を許す
バス降りて足早になる師走風
一年の早さを思う骨密度
フレームの中の紅葉が匂いたつ

何が不足で自販機の酒
お似合いですと魔法かけられ
親に似たのか世話をやく孫
三食昼寝点滴がつき
男やもめがゴミの分別

尼崎市　山田耕治

わがままを言える我が娘に叱られる
新米が今年も里の本家から
秋雨は少し濡れても風邪を引き
残業のメンバーそのままおでん屋に
日課のように歩きなさいと医師娘

尼崎市　林昭三

この脚で踏まぬは五県日本地図
満州に五年地獄の引き揚げ者
MRI組の鯉音に耐え
役目終え枯れ葉さらさら舞い降りる
月からは荒れた地球も真ん丸い

尼崎市　軸丸勝巳

温暖化ブーゲンビリア笑う窓
終電車土産待ってる窓明り
半月が今夜ものぞく終い風呂
カラオケの練習実るのど自慢
大根だき余生安楽祈りつつ

伊丹市　山崎君子

早食いの癖は死ぬまで直らない
金を食う古家にひとり住んでいる
善人の心に棲んでいる悪魔
騒がしい孫を笑っている遺影
挨拶に乾杯の泡消えている

川西市　西内朋月

寒さには強いと油断風邪を引き
余るほど作って丁度大家族
ケンチン汁中味に亡母の顔があり
人気講師前置き長く焦れてくる
断っても寒波は付いて来た旅行

川西市　米原雪子

今日も無事終えて明日への水を飲む
沈黙を守る姑には姑の愛
燻されて私も少し味が出る
海外へ出ると日の丸好きになる
これからも個々の時計で一つ屋根

三田市　久保田千代

バーゲンの無駄が並んでいるバザー
お裾分け隣の暮らし垣間見る
初仕事だと父ちゃんが燗つける
痛風も休み給えとお正月
オリオン座探して雪の露天風呂

三田市　堀正和

三田市　石原歳子

ホール建ち文化活動目白押し
鐘撞いて花見だけする花の寺
人間の体はストレスに弱い
二重丸貰って孫がやる気出す
ドレミファがきれいに響く橋の下

西宮市　西口いわゑ

吉報か蘭の花芽がのぞいてる
さよならの一言千のドラマ抱く
どんな時も花は黙って見てくれる
ぬかるみにはまったような恋だった
本当は頑固なとこにひかれてる

西宮市　山本義子

春が来たあなたの名前呼んでみる
春が来る生きているぞと叫びます
暦は春　少し闇夜をひきずって
春の夜は桜の息が張りつめる
春の海お伽噺が浮いてます

西宮市　亀岡哲子

御堂筋の銀杏を見ないまま冬に
散歩道犬のおしゃれを誉めて冬
母に会う日はまだ遠い西の果て
笑ったら笑い返してきた卦
家庭内賞味期限は母の鼻

西宮市　牧渕富喜子

友が逝く一途に生きた夕日落つ
身の丈に合わぬ事して自嘲する
大きさに押しつぶされるのも暖簾
十二月大売り出しの旗まばら
列島の穢れをはらう偽の一字

西宮市　秋元てる

いい人で居られる距離が難かしい
汽車の旅手を握り合う窓が欲し
母にとってありふれた死などはない
足掻いても可愛いばあさんには遠い
次々に老舗も落ちる欲の川

西宮市　井上松煙

拍手に福を商魂売りつける
大根の土にこだわり汗流す
煩悩を宥めてくれる庭の花
野仏に放ったらかしの柿たわわ
輪の中でちょいちょい吠える鬼が居り

西宮市　片山忠

クラス会おいでおいでと恋敵
スペシャルで愛してくれる孫と犬
飲む真似をしながらとどめ刺しに来る
妥協して稀な個性を消してゆく
エリートは慌てて椅子に座らない

無人駅名なし地蔵に風光る
穏やかな暮しが何よりの薬
再びの逢瀬はあるか寒椿
電波にて名所美食の旅ばかり
野仏の笑顔に会える道を行く

西宮市　菊池トミヱ

変化球受けて男は甦る
実篤のなすび素直でほっとする
カラオケのテンポが世代謳ってる
百円の賽銭安心買っている
小麦粉入り母のカレーを探してる

姫路市　古川奮水

泡盛で疲れを拭うてくれた里
太陽と風が奏でるきび畠
砂糖黍緑の風に深呼吸
地ビールをゆっくり注いで星を見る
豚足を注文したらティッシュ付き

奈良市　天正千梢

しなやかな女の芯にある気骨
カタカナ語使いすぎではなかろうか
神がみよご照覧あれ世のみだれ
皆の衆ここは本気で怒らんか
身の程を知らぬ男になりさがり

奈良市　米田恭昌

平均寿命延びて福祉が追いつかず
ブライダル日延べするなとお腹の子
プロポーズしたわり注文多すぎる
老いたかな目先も読めぬ風見鶏
街角で見送る老母の空元気

奈良県　渡辺富子

ほろ酔いの勢い借りて妻をほめ
ゆとりから詰め込みになるランドセル
ロボットに任せ退屈する戦士
つまずいた石から学ぶ処世術
ゴミになる本をせっせと積んでいる

大和郡山市　坊農柳弘

書き留めるほどのものなし小正月
白地図にロマン求めて旅ひとり
ありがとうの心が弾む初弘法
ふる里のそれとは違う雪だるま
アングルを変えて冬日に立ち向かう

橿原市　安土理恵

こだわりも掃き出す暮れの大掃除
胸底の鬼も近頃おとなしい
判を捺す時の女は迷わない
信じますきれいに生きていたいから
手酌して強い女の振りをする

橿原市　居谷真理子

悪者と分かってからが面白い
老臭の家に買われたリンゴ二個
寒いねえお茶にしましょと独り言
酔い泣きに友も阿房になってくれ
すぐ心配ずっと心配愛だろう

生駒市　飛永ふりこ

シクラメン新芽が明日へ挑んでる
子年ですウフフと照れる恋みくじ
未亡人なってほやほや叔母の意気
引摺らずバランスボールしゃかりきに
還暦に朱の幕開けのファンファーレ

香芝市　大内朝子

北風を抜けてわたしは白になる
感覚が麻痺する人間の怖さ
仲のいい夫婦見ているひとりぼち
ひらかなの気分になれば許せます
自販機に礼を言われている渇き

和歌山市　古久保和子

頬紅は赤くまあるく楽しげに
塾から塾以下同文の子供たち
本人も気づかず過ぎた誕生日
何にでもソースをかけるおとうちゃん
脳細胞プチプチ消える音がする

和歌山市　武本碧

コスモスのはんなり群れている気楽
かぐやから見れば地球はまだ青い
図書館でハラハラ落ちる目の鱗
花道のたもとに落ちていた吐息
身勝手なサイン神様あきれさせ

和歌山市　喜田准一

すぐカッカするから論旨乱れ出す
ガレージの枯葉で知った深い秋
成り行きに任せ端役を引き受ける
暇だからカラスの真似で鳴いてみる
変わり身の速さ可愛い気ある女

和歌山市　堀畑靖子

報道に急かされ予防接種する
お役所にもみけし謀る仕事あり
エコ製品買いたいけれど割高で
新基準弱者を切って捨てただけ
偽装品出回る街に冬しぐれ

和歌山市　田中みね

ハイタッチ確とバトンを継ぐネズミ
招かざる客と戦う偏頭痛
使途決まる当たりますようジャンボくじ
人生のゴール自分で決めている
すくすくと育つ孫らを見て老いる

和歌山市　玉置当代

小春日に誘われて出る重い腰
眠られず読書に耽る秋夜長
定年もなく一生を小商い
逆縁を堪えて明日の米を研ぐ
其処彼処地球が歪む温暖化

和歌山市　福井桂香

クリスマスイルミの元へ行きたいが
おおらかにくよくよせずにおおらかに
がんばってときめき失くさないように
落葉のあとに花芽を吹く桜
銀杏の落葉でゴールデンロード

和歌山市　宮本三喜夫

知恵のない元自衛官暴かれる
裏金は接待費にと化けてます
夢破れ捕らわれの身でそっと生き
偽装する意識希薄が罪犯す
跡たたぬ悪徳商人罷り出る

和歌山市　松尾和香

紅葉に抱かれる古道風の私語
遠い日の思い出辿るひとり旅
アンカーの言葉で光る年の暮れ
湯たんぽにちらちら視線原油高
脳の皺減って手足も弱くなり

海南市　三宅保州

分別をしたら私も不用品
値札など気にせぬ振りの品定め
変化球に頼りすぎても打たれます
気づいたら勝手に尻尾振っていた
無題という題が気にいらない名画

海南市　堂上泰女

カグヤから届く地球はまだ青い
太陽に負けぬ陽気な電話聞く
のびのびと生きて私を温める
シャンソンを奏でて舞った桐一葉
感動の沸点で見る里紅葉

鳥取市　植田一京

うどん食う時は無口になっている
ぬけぬけと女が凄いことを言う
たっぷりと暇はあるけど何もせず
メニューなど何でもいいよ腹へった
勿体ないが私一人に湯が溢れ

鳥取市　夏目一粋

にんげんよ奢るな雪が降りしきる
逃げ道があるのに意地が妨げる
柊の棘のようです手が出せぬ
汚れゆく人の世わびし食偽装
聞いたふり聞かぬふりして火花散る

鳥取市　岸本宏章

温暖化やがてスコール降るだろう
スカートの足が足湯の華になる
贅沢な暮らしに馴れるのは早い
ピカソの絵見ると頭が痛くなる
こころ無にすると柏手よく響く

鳥取市　岸本孝子

遺産分け済ませて仏さみしがる
誉め言葉鼻がだんだんとがり出す
寺の鐘その日その日のひびきあり
古くても着馴れた服に手を通す
プールほどある温泉に落ち着けぬ

鳥取市　西川和子

手帳からはみ出しているスケジュール
蹟きをいつも誰かに支えられ
馴らしすぎ隣の猫が住み着いた
蛇行する舵はかあちゃん立て直す
整形外科内科眼科と時間割

鳥取市　武田帆雀

喝采に踊り疲れた菊を解く
正解でした三次会には行かず
ネズミ算生めよふやせよ日本の子
和服着て少し女にわけがある
餅三つペロリと爺の目が黒い

鳥取市　近藤佳子

きのう観たドラマは若い日のわたし
侘び助が雪が近いと咲きました
このへんで酔い潰れたら救われる
お元気でしょうかあの人遠くなり
たのしみな明日をもらうこの薬

鳥取市　録沢風花

足許を見つめハードル越えていく
小春日の鹿野の味に舌鼓
魅力ある話術睡魔もとんで逃げ
大胆に九十歳を視野におく
低迷の日々は極力おとなしく

鳥取市　土橋はるお

定年までぺこぺこ良くも勤めたな
どぶネズミ陸にあがって暮らしたい
盃の底に溜っている本音
山家だな岩魚が棲んでいるのかい
大変だ蟻に骨折させちゃった

鳥取市　土橋睦子

毒舌もあなたの個性褒めておく
推敲のペンが時どき無茶を言う
寄り道をすれば電話がすぐかかる
丸つけただけで終った誕生日
寒ぼたん花回廊に逢いに行く

鳥取市　奥谷彩子

温かな話の好きな冬のばら
抱き止めてやるぬれた手の割烹着
いたわり合いあ・うんの夫婦めし茶碗
愛に泣き愛に笑って年暮れる
冬の海舵切る男ゆるがない

鳥取市　永原昌鼓

恋すると女度胸がついてくる
喉の奥しぶいビールが沁みわたる
こっそりと食べたケーキのつけが来る
若作りもう駄目らしい背が丸い
知らぬ事判らぬ事が増えている

鳥取市　吉田弘子

安心の余生夫の舵まかせ
まさかまさか夫の勘に見抜かれる
ボクは蔓だれかれ問わず木を探す
セーターにスカーフを巻きウォームビズ
七十五日ビッグニュースを消して行く

鳥取市　加藤茶人

何に腹立つのか謎の更年期
良い人と言われて美人には遠し
やたら歯を抜かれ歯科医の試験台
自画像はちょっと背伸びの手を加え
いつまでも尾を引くやもめ香絶えず

鳥取市　福島庸二

片棒をかついだおかげ荷が重い
陰口が津波のように押し寄せる
視野ひろげ豊かな心ついて来る
決断が人生ひらく第一歩
いま一度歩んだ道を振り返る

鳥取市　杉本孝男

この町が好きで自分の墓地を買う
自分史の泣いたページを糧に生き
寒月に母の命日よみがえる
勝ち組のおごりはきっと隙間風
極楽へ行けるサイコロ振る爺や

鳥取市　中村金祥

薪束を担いだことは忘れない
命日を忘れないのも孝行だ
子のしつけ母は裏技持っている
午前様老母がこっそりお出迎え
遺跡から匠の技がよみがえり

鳥取市　田村邦昭

勝ち組の大声ばかり陽が沈む
雑念を払えば少しいい顔に
雑学に応援された初対面
流れ星少しとまってくれたまえ
風邪をひき隠れた愛を知らされる

鳥取市　太田幸枝

てのひらを大きく広げ幸つかむ
妻に舵とらせゆっくり飲んでいる
出来すぎた姑で嫁さん影うすい
千鳥足小さな石にけつまずく
世の中も家も女が強くなる

鳥取市　福田登美

除夜の鐘一打に心清めたく
身の丈に合った暮らしに感謝する
愚かさも友の輪にいて磨かれる
もしかしてなどと夢見る宝くじ
帳尻は上手に合わす歳の暮れ

鳥取市　岩崎みさ江

霞みゆく脳へ手帳と言う味方
地獄極楽あの世のことでないと知る
老いて子に優しくされて狼狽える
母乳やる女つつましく一隅へ
一年の答をくれた蘭の花

鳥取市　山本益子

人類破滅核の力はボイコット
暗算の如く命日婆唱え
千秋楽力水受けハッケヨイ
すだれ干しスルメも縮む冬の風
バカ力火事騒動に出番あり

鳥取市　宮脇道子

宝くじ買ってままよと夢をみる
木枯しに人に擦り寄る鳩の群れ
温暖化私の気持冷蔵庫
井の中の蛙でいたい泳ぎたい
桜の葉恥じらいながら土になる

鳥取市　池原天馬

茶杓けずるつぶした家の煤竹で
賞味期限俺はまだまだ喜寿すぎだ
栄養の失調で子等死んでゆく
母の話聞かせてくれた人逝った
喜寿夫婦心新たに障子はる

鳥取市　冨山檳榔樹

権力で裏金集め首締める
きれい事並べて腹を探られる
当落を握る一票拝みます
女傑だと言われ守った縄のれん
力抜く頃合い知って楽に生き

鳥取市　山宮愛恵

香を添える一品冬があったかい
褒められて貰われていく柚子リンゴ
鈍行で少女にかえる国訛り
置場所を変えたかいつも探し物
人生の終着駅は裸です

美人よりガハハと笑う人が好き
一万歩あるき〇・二キロ捨て
昼食はしめて百円也で済む
カニ汁の吸えるイベント梯子する
八時間寝ても美肌にほど遠い

鳥取市　福西茶子

光るものないから多く本を読む
和を保つためなら知らぬ振りもする
若い日につかりたかった美人の湯
百均に虹のかけらを買いに行く
クラス会介護話につまされる

鳥取市　有沢せつ子

立て直す藁一本を束にする
勝ち組の足並そろうはだか紅
勝ち組へ一発ゲームまだ続き
石径に書くひらがなの一代記
私に姥捨て重ねそして冬

鳥取市　平尾菜美

故郷を大ぼら吹いて出たまんま
焦るなと漢方薬に含められ
境界の落ち葉がけんか売りに来る
取り敢えず頭を下げるだけのこと
おい鏡何で美人に映さんか

倉吉市　野口節子

椎の実が降る思い出が降ってくる
日めくりをはぐ嬉しい日寂しい日
あちこちに仕掛け花火を伏せておく
油気が失せて仏と近くなる
雪こんこ遠い話を持って来る

倉吉市　牧野芳光

代行の気遣い沁みる祝い酒
やさしさが欲しくて今日もありがとう
パンジーの甲斐がいしさと可憐さと
奥行きも間口もとんとずんべらぼー
まだまだともっともっとの側にいて

倉吉市　山中康子

ぺこぺこと頭を下げて損はせぬ
崖っ淵鼠は猫に飛びかかる
褒める事無くて天気を褒めている
スーパーとパチンコ店が夜を占める
いける口と知っているから酒持たす

倉吉市　最上和枝

携帯の舵がとれない老いのウツ
体力の衰えかくす赤い服
旅の恥かき捨て婆々の肝っ玉
流木に菩薩の姿重ねみる
日の入りは海に開ける滑走路

倉吉市　山本玲子

倉吉市　猪川由美子

ヤバイです若者言葉マズイです
食品偽装こうなりゃすべて手作りだ
遺憾とは謝罪の言葉ちゃいまっせ
値上げ予備群ズラリ軒先並び待つ
裏技を駆使し乗り切る原油高

米子市　政岡日枝子

まだまだいける舵だとはっぱかけられる
無意識に誰かの靴の音を待つ
捨てがたい赤が私の芯にある
馴れ合いにならぬ程度に靴をぬぐ
まだ少し傷が治らぬ除夜の鐘

米子市　白根ふみ

銀杏の絨毯もったいなくて見届ける
駐車場月と会話をして閉める
満月がどんより後に付いてくる
もう正座できぬ悲しい歳になり
団塊の主夫教室が響きだす

米子市　中井ゆき

快い音楽きいてさあ寝よう
大空の空気ゆすって神の旅
若者のコーラスひびく旧母校
七度めの子年生まれでまだ元気
舵取りを終えてゆらゆら舟だまり

米子市　門脇晶子

草萌えて春の息吹をうたがわず
胸の戸は他人信じてから開ける
だんだんと老いの太鼓がみだれだす
温かな人温かな会話する
おかえりと保温の部屋が待っている

米子市　光井玲子

幸せな友のうわさに安堵する
今にして亡父の教えが物を言う
改めて子ら三人よありがとう
いつの日も無口な老父の背に感謝
小切れあつめてわたくしだけの袋縫う

米子市　野坂なみ

柚子の香を心ゆくまで冬至風呂
息子の舵に任せのほほん暮してる
内部告発して反響をたしかめる
快く引き受け後で揉めだした
同姓同名うっかり弔花届けられ

鳥取県　石谷美恵子

昔ばなしが無性にしたい冬の夜
入院をするのに紅をさしている
てのひらに埋まる私の残り運
背伸びして繕いきれぬ傷が増え
貸し借りのけじめをつけてから疎遠

まだ脈がありそうボール投げ返す
大切な思い出ひとり温める
山茶花が咲き出しましたお亡父さん
若づくり年の差やはり見えかくれ
気真面目が時には辛い目にも遇う

鳥取県　松本　よしえ

女性の品格読んでほしいぞ山の神
食って寝て牛はやっぱりそのまんま
来客に猫蛇くわえ帰還する
飼猫に食事ですよと同世帯
集会に男いないが酒を出し

鳥取県　松川行男

胃カメラを飲んで酒飲む許可もらう
喉越しがやっぱり悪い内視鏡
バリューウムは安いが高い再検査
石油税値上り分は下げて欲し
米作り止める農夫がまた一人

鳥取県　竹信照彦

巡り合わせそんな家族の箸洗う
忘れたい事が眠りの邪魔をする
自分史は愛しい私物語り
自分史の光と影を知る両手
友情をたしかめたくて握手する

鳥取県　細田裕花

野獣のように叫ぶ女は野獣なり
裏技はなかなか見せぬ猫の爪
田畑売れ札束持って逃げた嫁
遺言書知らない子供一人いた
ゴミ分別老いの頭に重たすぎ

鳥取県　下田茂登子

せせらぎが似合う畦道おーいどこ
弁えて器に合った母の日々
味覚消し香りも無にす温暖化
ささくれた心和ます凪いだ海
お食事にピント合わせる腹の虫

鳥取県　谷口次男

もみ手して怒られ上手若いのに
人柄の偽装見ぬけぬ上司かも
のんびりと小春の窓辺便り読む
大山の機嫌伺い旅仕度
君のため祈る心を秘めている

鳥取県　深田倶久

蟹の指天空掴むごと動く
つまずいて人の痛みに気がついた
美しい嘘に勇気がわいてくる
物忘れ留守番役も失格だ
プロだって失敗します人だもの

鳥取県　山下節子

鳥取県　盛田夢路

自信作没句になって悄気返る
助け舟回してくれたお母さん
火の車妻が抜け道知っていた
心電図波はおだやか安堵する
武勇伝一つ語れぬ古希の坂

鳥取県　佐伯やえ

無人駅雪にわなわなふるえている
ぼたん雪脳にさびどめぬっておく
シクラメンの声に大脳目をさます
ことばの木植えてひ孫の帰り待つ
むすんでひらいて炎えて花子は嫁にいく

松江市　三島淞丘

妻と見る真冬の月は暖かい
リハビリの友から学ぶ根と意志
傷跡を撫でれば過去が疼きだす
立ち枯れのすすきに僕を重ね見る
ロボットに四捨五入され子はニート

松江市　津川紫晃

軽率な言葉を悔いる長い夜
いいこともあるさと今日の絵を閉じる
みそ汁の湯気今日一日の勇気湧く
荒ぶ世の色に染まらぬ柿の紅
気楽さと背中合わせにある孤独

松江市　安食友子

ハプニングウオーキングのはずでした
何となく癒やし戴く光背よ
来るべき試練に力む吊るし柿
湖面にもぽつんと羽が村八分
ほっとする今日の六曜確かめて

松江市　松本知恵子

カニ茹でた大鍋眠る手抜き主婦
お喋りでストレス発散急降下
子持ち鮎少し切ない酒の席
逃げ道はまだあるカニの横歩き
饒舌な喋り浮いてる二枚舌

松江市　小川注湖

ジャンボクジ買わぬ人より買った僕
松葉蟹ズワイガニだと里自慢
退職日新住所決め書くハガキ
村祭り主役は米寿喜寿の笛
先代の信用捨てた金儲け

松江市　川本畔

柚子の実をむしれば怒る柚子の棘
過ぎて行く灯はみんなよそよそし
下校の子挨拶橋で知らん顔
待ち合わせ赤いポストと待っている
塀向う病む人に声かけず過ぎ

松江市　佐野木　み　え

いそいそと干柿送る春日和
歳の市聖護院大根でんと据え（京都）
千鳥城巡る遊覧こたつ舟
忘年会忘れたい事二つ三つ
江の電に乗れば懐かし風に逢う

松江市　銭　山　昌　枝

松茸二本頂きメニュー決まらない
都会から同居しませんかとメール
年賀状頑固な筆が書けと言う
良いとこも悪いところも母に似る
干ものにはなりたくなくて恋をする

出雲市　園　山　多賀子

大仰に百まで生きる自信持つ
良心に私時どき試される
味噌汁の好きな私は隙だらけ
目障りになりそうだから隠れ蓑
手抜きしたつけが忘れた頃に来る

出雲市　佐　藤　治　代

あめ玉をガリガリ噛んで堪えている
心から笑う日少しずつ欠ける
お喋りをかばんに入れて友に逢う
現し世の金欠病がまだ続く
突風に堪える足腰弱くなり

出雲市　伊　藤　玲　子

木の実降る冬のつぶやき聞いている
あと少し梯子は天に架けてある
たしなめりゃ酒で消毒してるとか
楽しそうふにゃふにゃふにゃの夫の夢
湯けむりに心遊ばせ空になる

出雲市　森　茂　美

赤いセーターちょっとはしゃいで買っている
祖谷渓に肝を冷やしたバスの旅
八十五歳乾いた恋に風が吹く
私の体も電池切れかける
風鈴が静かに秋の風を聴く

出雲市　富　田　蘭　水

冬仕度遠赤外線シャツやる気
欲のせい寒風きってバーゲンへ
師走にも憩があった独り酒
嘘吐いた日から胃袋もたれだす
特攻の心ふあっと耐えさせる

出雲市　石　倉　芙佐子

するめ烏賊もてあましてる糸切り歯
雪国の夜はほろほろ更けていく
心の中に進軍ラッパ吹く傘寿
田の神もかまどの神もお正月
何してもスロースローで回ってる

出雲市　小白金　房子

鍬胼胝に御神酒いただく感謝祭
政界の名誉を恥じる金バッジ
バイパスが地形を変えて風を切る（十二月二日開通）
説法へ心の扉開けて聞く
参道の夜明け行き会う人無口

出雲市　岸　桂子

泥水が澄むまで口は閉じたまま
地球温暖徐徐に方程式変る
思想家のポケット今は穴だらけ
どの色も責任がある信号機
黒枠の母の目線がやわらかい

出雲市　多久和　敬子

子の帰郷心の窓を開けている
孤独の日温い言葉を待っている
にんにくの臭いに慣れて丸く住む
無農薬野菜に元気もらってる
電話口頭を下げる癖がある

出雲市　持田　多輝子

ささやかな善意は同じ赤い羽根
逆境がくれた心の一行詩
難病も歌で心をいやされる
同病が支えになったアドバイス
曽孫をワンクッションにして笑う

出雲市　吉岡　きみえ

ナースコール孫に似た娘の手を借りる
看護士の笑顔が癒す胸の内
あげ膳下げ膳病院くらし根がおりる
鳩尾に溜まったものが出てゆかぬ
また元のひとり暮らしに雪が降る

出雲市　小豆澤　歌子

蹟いて聞えてきます母の鈴
隠れても尻尾が見えるお父さん
辛くてもすぐありがとう言えたから
ぶらんこを弛めに揺らし生きている
不器用な亀の姿の万歩計

雲南市　毛利　幸

寒風が私の傷を晒け出す
ざわざわと人の流れが蛇行する
忘年会全て忘れて二日酔
茶柱が立って未来に夢つなぐ
そわそわと何故か隣が気にかかる

島根県　伊藤　寿美

張継の詩碑を眺めて鐘を撞く（寒山寺）
電飾の長江よどむ戦跡（上海）
上海で貰った風邪と帰国する（上海）
ときめきをページにはさむ花栞
ひらがなに変換をして丸く住む

倉敷市　撰　喜子

年頭所感忘れて生きる自分流
熱気球余生ふわりと浮いたまま
燃える恋抱いて八十路を謳歌する
念じても思い通じぬ片思い
生生流転私百まで米を研ぐ

真庭市　国米　きくゑ

好きですの一言響く秋の天
晩学の辞書も枕に早変り
貰ったり上げたり田舎にある温み
かけ抜けた風が噂を置いてゆく
歳重ね姉妹の温みしみてくる

真庭市　福嶋　智恵子

年の暮れもしやと思う宝くじ
今日の無事仏壇に告げ火を灯す
着膨れて寒さを凌ぐ老いの部屋
百周年校舎に響く童謡歌
豊饒が賞味期決めて廃棄させ

美作市　小林　妻子

狂気の世生まれ合わせが悪かった
肩張っていた恥ずかしさ今分かる
裏金もなし年金の乏しさと
笑い袋だけは大事にしておこう
好きで来た道に茨が横たわる

美作市　山本　玉恵

観念をしたのか座り直してる
かなしみをゆっくり溶かす命の朱
一杯の水のみほして独り言
笑わせて笑うて人生終りたや
目玉焼き上手にウインクしています

美作市　大石　あすなろ

やわらかい会話が欲しい老いの耳
語り部が冬の夜咄し冬百話
奥の手があったと気付く負けてから
鈍感も自分らしいと言い聞かす
アバウトに生きて人生おもしろい

美作市　福原　悦子

祖父の知恵きっとプロでも舌を巻く
定年だ地域の舵も握らねば
こっそりと誰にも告げぬ松茸山
人生も毒針刺され狂い出す
そして冬充実みせる寒稽古

竹原市　岩本　笑子

雨の日風の日僕は案山子か信号機
よもぎ摘む今年も餅をつく幸よ
夫唱婦随亥年の夫子の私
還暦へ欲はしっかり持っている
新米の白さ日本の自信です

落ち葉には風よ優しくしておあげ
人間の特権笑顔持っている
衣食住みんな背負って独り住む
ベッドの妻の口がだんだん重くなる
不器用は承知で生きた八十年

竹原市　時広一路

風和む母の面影里の初春
人恋し無心になれぬ墨をする
しがみつく紅葉をたたく冬の雨
鉢部屋に入れて狭まる冬籠り
真心を紡ぐ諍いもう止めた

竹原市　石原淑子

孫ほどの若者と吹く祭り笛
よれよれの地球を包む初日の出
うっかりと生きていつしか喜寿の杖
家の灯が蕩児の帰り待っている
一部屋にみんな集まる灯油高

東広島市　福島万年

錦飾らなくても温い里の風
追い風が続いて怖い自己過信
入試パス孫へ一足早い春
天下り先を見付けるのも仕事
忘れられぬ事は妻にも言えません

宇部市　平田実男

ビールの味軽い男が出来上がり
謎が謎呼べば気になる天の声
句読点打てば石橋渡れるか
身の程を知らず地獄へ落ちました
無人駅に笑い袋が落ちている

美祢市　安平次弘道

長生きを企んでいる影法師
松茸を贈りサンマで戻るなり
畠あらし仇は鍋の中で討つ
この味が恋しくなって途中下車
人間のおごりに無言で来る報い

東かがわ市　神保坊太郎

マンションの前も隣も薄い縁
明かせない秘密沈める胸の底
腕の良い老舗も不況押し寄せる
敵に塩おくる広さはまだ持てぬ
天井のねずみにくらしのぞかれる

東かがわ市　清川玲子

子で笑い子で泣きいつか黄昏る
カニ食べる人の背中は隙だらけ
祝い事重なり年金足が出る
祝杯だ異常なかったガン検査
近道に生きるヒントは落ちてない

東かがわ市　川崎ひかり

東かがわ市　原　賢

再発を看て優しさが増す主治医
陽よ水よ枯らしてならぬ過疎の里
出る杭は幾ら打ってもしたたかで
何もかもすべてを忘れ丸く住む
枯れかけた心に朝の水を打つ

東かがわ市　伊勢八重子

総代と呼ばれ体良く使われる
安心をすると疲れがどっと出る
伝統の老舗の味が泥を吐き
世は移り変る師走の風物詩
見ない振り知らぬ素振りのおもいやり

大洲市　中居善信

おっとっと罠に落ちそう泣き落とし
自信過剰へしっぺ返しのジャブを食う
辻褄の合ってる夢で恐ろしい
たっぷりのお湯に浮かせているメタボ
一歳の重さを思う古希過ぎて

松山市　宮尾みのり

ひとり居へメダカばかりが殖えてくれ
身辺整理するには未練まだ残り
性善説の旗で残りを生きている
何ほどの家名男は背負わされ
新装開店客が一巡して静か

西予市　黒田茂代

会席の膳の小皿の小宇宙
高山植物へと変わる登山道
積ん読のまま二ヶ月が過ぎてゆく
何はさておいても好きな着物展
あやとりの取り方指が覚えてる

高知市　小川てるみ

主婦業のノルマが呆けに効くらしい
いる時はいるのと妻の太っ腹
健康が一番親の子孝行
帰省客なくて手抜きの大掃除
清水寺ライトアップに酔う人出

高知県　小澤幸泉

キムチ鍋平和の味をかみしめる
肩こりが娘と妻の重荷かも
熟年のまだまだ利用価値みつけ
父いまだ孤独になれず子に甘え
哀しみを置き忘れてる老いの酒

唐津市　山口高明

絢爛と女の過去は火の絵巻
雪の夜は座敷童子が出る遠野
小父さんと呼ばれ慌てる我が齢
民草を搾る知恵ならすぐに出す
お隣りの昇進妻の気にいらず

先ず背広から変えられた妻好み
ほめられて今年も贈る棚田米
徳利は備前ぐい呑みなら唐津
切れそうな絆を補修する徳利
座らせて親父の酔いが醒めてくる

唐津市　坂本蜂朗

座標軸揺れてテレビの謝罪席
市になって病院通いのバスが消え
宝くじ当たった人と縁もない
平均寿命伸ばす施設のベッド数
老いの食直撃された原油高

唐津市　市丸晴翠

向き合って怒鳴ってみても二人きり
堂々と干し場に吊るすEカップ
形見分けすめば絆が細くなり
エンストの旦那睨んだ強いママ
婚の荷が派手に通って名古屋弁

唐津市　樋口輝夫

拝金に大和心は先細り
呆けてないが主張が少しズレている
素直さを捨てて上見て愚痴ばかり
連れ合いが出来て我が子も遠くなり
友情の押し売り肚にすえかねる

唐津市　井上勝視

温故知新

失業の眼にも花屋は美しい
ロマンスも金も残さず逝ったそな

ホノルル市　内藤草一郎
米子市　美鴨　美笑

ないくせに気軽な返事して帰り
ものごとに角をたてる十二月

東京都　藤本　満年

悲しきは政治のネジが緩みおり
果たせないことばっかりで年を越し

大阪市　富岡　淡舟

影じっと動かぬ夜の淋しけれ
妬きもせず妬かれもせずに四十過ぎ

熊本市　楠田　英子

叫びたいのに雲悠然と走り
淋しさにたえずお便りかきつづけ

『川柳雑誌』麻生路郎主宰
三三三号（昭和三十年二月）

川柳塔の川柳讃歌 ㊳

木津川　計

掘る時は手伝いが来る甘藷つくり

松　本　よしえ

苗を植えるときは知らん振りか、生憎その頃は忙しくてと言うてるくせに、掘るとなると手伝いに来る。たかが甘藷といい条、人間の計算ずくな魂胆をこの句はうがっています。同想句に今号「新米がとれる頃にはやってくる（牧野芳光）」があります。うがちというより、やってくる息子や娘を待ちわびる親の心情でしょう。おいしい新米を持って帰らそうという親心もあります。「掘る時」と「とれる頃」ではニュアンスがまるで違います。

ぶっちゃけた話俺は悪人だ

三　好　専　平

自らを「悪人」と告白する人は、ジョークは別にしてまずいません。だから専平さんの勇気に感嘆するのです。星新一に「盗んだ書類」があります。泥棒が博士の金庫から盗んだのは新薬の製造法でした。その製法通りに薬を作って服用した泥棒は、なんと博士の許へ窃盗を告白に行き、警察へ突き出して下さいとも懇願するのです。その薬は良心をめざめさせる作用を持っていたのです。被実験者が現われず困っていた博士は、新薬の効き目にいたく満足しました。その薬を飲まずして専平さんは良心をめざめさせたのです。

カツラだと言われ気づいたふりをする

奥　時　雄

一見して分かる出来の悪いカツラがあります。多く目につくのは色黒々として不自然なカツラです。しかも、かぶせている、のせている人の多さです。誰もがその不似合いを知っていながら知らないそぶりは、騙されてやる気づかいです。へ惚れていながら惚れないそぶり、は「妻恋道中」のやくざでしたが、並の男の惚れないそぶりは、相手への気づかいでなく、ふられたときのメンツからです。

謙遜へ相槌打っていた不覚

菊　地　政　勝

「一人語りの長谷川伸劇場」を旗揚げした僕です。なにしろ素人芸、聴いてもらえるほどではありませんよ、と言うと相手さんに「ああ、そうですか」と引き下がられたのには呆然でした。腹立つなあ。

厚顔ついでに、「木津川計の一人語り劇場〈新派篇〉」を三月十七日（月）二時から芦屋のルナ・ホールでまた旗揚げします。五百円。もとより素人芸、「あゝ、そうですか」と言われると、つらいなあ。

残いくら自動引き落しの命

井　上　勝　視

「晩飯を食うのもあと千回くらいなものだろうと思う」と山田風太郎は七十二歳のとき書いて、七十九歳まで生きました。志賀直哉は「ここがわるい、ここが痛むというのでなしに、衰えて――」と八十四で嘆いて八十八歳まで生きたのです。武者小路実篤は八十九のとき、同じことをくり返し書き、翌年死にました。

残り年数は分かりません。なるほど、私たちは知らない間に自動引き落しされる余命なのです。

七十五歳もういいでしょうという政治

森　村　美　花

ゴミのように細かく分別されてゆく〈後期高齢者〉〈情報難民〉（東近江市・寺下吉則）

右は過日の朝日歌壇に選ばれた歌です。確かに後期高齢者は一二七六万人、人口の一〇％です。もういいでしょうという訳は、一人当りの国民医療費（03年度）が七十四歳以下は五三万円、七十五歳以上は八一万円なのです。役立たずの、ごうつく張りの、金食い虫という見方でしょう。戦争に駆り出され、高度成長に奮戦した老人たちの無惨です。

（『上方芸能』誌代表）

自選集

斉藤　劦

スーパーで柿は柿色主張する
手探りで来た道だから面白い
分け合った痛みが絆深くする
一瞬も乱れぬ人形劇の舞い
りんごふじ美味しくなって冬籠り

塩満　敏

今年こそパソコン上手くなりたいな
今年こそ鶴彬句碑建ちますよ
杖なしでスタスタ歩いてみたいもの
夏の棚胡瓜苦瓜吊るしたい
今年こそ句会皆勤したいもの

新家完司

雲を見てふと立ち止まる十二月
睨んでいるだけでも仕事おまわりさん
ちっぽけな家だがぬくい布団あり
酒の量減らしなさいと言われ冬
自分史のこれから先が面白い

玉置重人

ゴミの日はおんなじ顔のカラス来る
精いっぱい咲いてる花の自己主張
友の訃に我が身を置いてみる八十路
外食をしても薬を欠かさない
鈍感力です無遅刻無欠勤

恒松叮紅

小走りで嬉しい話持って来る
老い二人つくづく多い料理皿
うっかりが多くなったと日記書く
悪い癖つい喋ってる自画自賛
鍋の湯気同じ話を繰り返す

津守柳伸

セール品揃えて弾む初旅行
針と糸心やさしいプロフィール
ちりとてちん風は自然の吹き流し
真夜中のシヤワーも明日は判らない
過保護にはしないつもりでいる過保護

この腕にたかれ他人の飯を食い
老妻のそれが仕事でうるさくて
街の老いあわれ草引くとこもなし
鉢巻の一と声暮れの蟹が売れ
向寒へ自愛を祈る大根炊き

遠山可住

駈け抜けた今年の秋は貴重品
饒舌をとめたあつあつの大根
感慨もうすれるコンピューター灯台
被告人を沈黙させる弁護団
厠にも井戸にも神はもう居ない

都倉求芽

そして冬報恩講の餅をつく
蟹鍋と鼈鍋(すっぽん)の仲違い
生かされて生きる男の黒い影
友だちをひとり増やしたのも文化
しあわせの足音がするうしろから

土橋螢

仰ぎつつ未完ドラマの鬼ごっこ
いま少し余命を預け人の背な
おだやかな陽射しの下に筆供養
ほのぼのと語れ仏間も花の景
遠ざけてみても筆塚やってくる

中原諷人

結論を先に言うから疎まれる
そっとして下さいわたし羽化途中
引き算がだんだん怖くなってくる
偽装とは言われぬほどの化粧する
小春日は睡魔と仲がよいらしい

西出楓楽

原則としては故里美しい
観光の枠で噴煙美しい
美しい田舎経費がかかってる
美しい嘘は芝居の台詞用
名を知ってまた美しい野辺の花

仁部四郎

格差是正花の咲く日を待っている
融ける融けない雪の女が泣きながら
牡牛座の譜面で踊る雪の鬼
戦友も雪には雪の日の軍歌
反骨の骨もいつしか粗鬆症

波多野五楽庵

巨樹撫でて愛の昭和史語らせる
神の使いかマウスが春の陽を拝む
葡萄ワイン老いの青春歌に酔う
寸劇の汗に気楽に濡れてきた
銀行で拾い読みするトップ記事

林瑞枝

司馬遼にこの国昨日までの貧
一神教どうし妥協のないいくさ
英語なら読めて世界のこと読めず
石油資本の隙見てちょっとだけ儲け
スーパーの味でこの町中夕餉

早川清生

今年こそ素敵な漢字描きたい
ふる里を守る友から年賀状
無理せずに持病と肩を組んでいる
三億止めバラの二億を買いました
川柳塔の定年誰も知らん顔

前たもつ

阿呆になり馬鹿にもなっていく流れ
間違ったボタン押してから迷路
ときめきをすこし下さい冬の底
貧しさを笑いで生きてきた自尊心
むき合えばときめき春に手が届く

宮西弥生

鮎一匹皿で主役の顔でいる
ほろ酔いで小雪を受けてひとり行く
ねぎらいの言葉貰って飲み屋出る
老い姿まざまざと知る今日の靴
生き下手で鬼も黙して見てくれる

森下愛論

少し猫背座職の父の手が動く
燃えつきた男花道などいらぬ
胃袋へ不満をつめている屋台
顔ぶれを見てから意見引っ込める
止まり木で女ひとりだちす決意

八十田洞庵

解凍をするとこの愛目を覚ます
過労死の友よくやしくないのかい
この僕の嘘を十字架もう見抜く
四季の花咲かせ切らせてから逝こう
無防備なハートへ土足とはひどい

両川洋々

中途半端なまま過ぎ去った僕の過去
ある時は自分を叱る夜の冷え
歳かしら無難な方へ席譲る
年金の枠ピッタリな妻の知恵
遺言でも書こうか今年卒寿です

阿萬萬的

蒟蒻に針さす指の残酷さ（針供養）
この頃は豆を撒いても逃げぬ鬼（節分）
なあ妻よ買って下さいチョコレート（バレンタイン）
梅香る天神様に古本屋（梅花祭）
梅匂う昭和八十三年目

板尾岳人

溢れるもの胸に女はただ無言
どうなるか流されてみるのも楽し
キャンセルの出来ぬこの世に味がある
なァカラスお前は誰を呼んでいる
成るようになると静かに陽は昇る

奥田みつ子

玄関の明かり案ずる遅い父
悪い予感よく当たるので怖くなる
氷枕楽になったか子の寝息
発想を換え練り直す打開策
何よりの敵は油断と自省する

河井庸佑

絶滅の恐れ私の永久歯
どこまでも転がって行く言葉尻
冷や汗をときどきかいている絆
別居中妻は句集を出てこない
追いかけて追いかけられて年明ける

川上大輪

寒風に耐えて凛々しく 梅の花
壁越しの話は聞かぬ楽隠居
童顔の石の地蔵に花を棹す
北風を背中に受けて麦を踏む
里帰り老母との会話夜が更ける

木村あきら

飲んだのでまだ駅前にあるバイク
二女が出て行くといよいよ昼ひとり
宇宙語で会話が出来る孫といる
得意料理の一つになった筑前煮
雨は上がった洗濯物を外に出す

小島蘭幸

如月へ耳朶は忘れぬ兵に告ぐ
平凡な暮し冬将軍のぞく
灯油高嗤って牡丹雪積る
賞味期限切れても稼ぐ靴を履く
生きぬいた昔を語り燗冷える

小西雄々

五湮抄

（つづき）

藤沢市 加藤スズコ

お土産と言えば愛犬両手上げ
札束を数える人の無表情
支えられ落葉拾いの車椅子
歩きたい再起夢見て踏む大地

西出楓楽選

ウソ食品ばかりで一人握り飯
錦秋と味はテレビで目が食べる
西暦のカレンダーにも干支があり
パソコンで門松を刷り春準備
天守だけ残り城下の町は消え
年寄りを拒絶するのか山の寺

北名古屋市　片岡文男

忘れるという技があり生き延びる
芋づくし料理を笑う平和な日
流れ行く今日を笑顔で送り出す
患者様嬉しくもない丁寧語
信じてはいるが聞きたいありがとう
夏に来た金魚を運ぶ温い部屋

米子市　吉田陽子

サインあるばかりに高く買わされる
贅肉が垂れて気が付く不養生
省で士気上げて汚職で士気下げる
倦怠期二階と下で遣り過ごし
検査値は見るが患者へそっけない
しわしわの顔にもおさな名残みえ

堺市　荻野像山

旅は道連れ一期一会の和を結ぶ
回れ右一人左を向いている
父さんの決意香水買っている
山頭火歩いた道も冬の彩
時は流れて餓鬼大将も老いている
黒豆が程よく煮えてほっとする

紀の川市　北山絹子

老化する脳の余白を埋める辞書
引き出しが浅くてすぐに底をつく
筋通す親の本気が子を変える
ご先祖と心通わすお灯明
プロの水本気を試す汗の量
子供より親を本気で躾する

八尾市　松葉君江

置きざりの部屋の仮面が日向ぼこ
一枚の絵にわたしが戻る赤い下駄
霜柱踏めば思い出里の庭
来年の実り信じて枝を切る
子の地図へ塗れなくなった親の彩
やわらかい吐息残して散る銀杏

府中市　馬場利子

菜の花の咲く如月の伊勢の旅
朝市に男まさりの頬かむり
立春に赤からつかむ五色豆
おおかたは無欲になってカニ食べる
鍵を置く場所を見ている雀達
立春の紅茶に浮かすレモンの香

大阪市　吉田富美

六度九分葛根湯で恙無い
古稀を過ぎ五臓六腑がサボタージュ
遺伝子に酒に弱いと書き込まれ
肝臓が乾杯だけと釘を刺す
本当は雑種なんです飼主も
子が巣立ちやっと書斎の主となる

昭島市　野口忠

雪五尺抱いて眠る雪地蔵
少年の連凧天を独り占め
その人がいるだけでいい句座和み
中流という線引が難しい
吹雪く夜は母に手紙を書いてます
路地裏の二月のれんの灯が細る

日立市　加藤権悟

おはようを美人に告げに行く散歩
隠すから疑いの泡ふくれだす
子の喧嘩親が本気で背なを押す
急くからか信号が未だ変らない
直球で真剣勝負する度胸
折角の余白女房に埋められる

八尾市　寺川はじむ

亡母の唾つけて治った傷の痕
花手桶忘れないでよワンカップ
これからの人生回れ右したい
無記名の投書に一句添えておく
老舗もと裸電球からでした
達筆のあまりに誤字を見逃した

大阪市　尾崎黄紅

満足をすれば星付きレストラン
総理の絵描けば地元の土産品
地のものを選るのが難しい土産
開店時最敬礼で迎えられ
目標値下げて及第点とする
先生と肩組み歌う同期会

横浜市　長島亜希子

家計とは別の財布を妻も持つ
ポイントカードより診察券がいばってる
ブランドを持つから顔が見劣りし
どう処分する心配になる蔵書
共通の話題は膝のサポーター

佐渡市　髙野不二

欲捨てて牛後の歩みマイペース
寝そびれた枕に浮かぶ罪と罰
多機能のケイタイ孫と喋るだけ
堪忍袋繕う母の木綿針
割勘の暗算出来るまだ呆けぬ

岐阜市　平野あずま

七十で習うパソコン手に余る
寒い朝目覚し時計凍てる音
横にいるだけで日向のような人
同病を笑い飛ばして通じ合う
掃き寄せた枯れ葉の山の深い寥

京都市　清水英旺

さよならだけ理解できてる老いた母
冗談が的中しすぎ語を失くす
心地好いブレーキ友と半世紀
相談事けむい男の出番です
落し穴落ちて気づいた口車

京都市　藤井文代

里の秋詰めた隙間に母の愛
気忙しく寒い年の瀬なぜか好き
初春は澄んだ空気で迎えたい
父の背が丸く小さくなっていく
恐かった叱ってくれた師に感謝

大阪市　坂裕之

高所恐怖ゴンドラ着いて吐息つく
袴つけ帰路スニーカー七五三
ご近所にスーパー出来て増すカード
イルミネーション街の汚点見えなくす
うなぎ登りガソリン価格誰が笑む

大阪市　澤田定子

濡れてみたい利休鼠の雨ならば
里の家ねずみの音でほっとする
パソコンのマウス可愛いペットです
願い事ちっちゃ過ぎると盧舎那仏
落ち葉踏み足から上がる暖かさ

大阪市　田浦實

御堂筋また折り返し歩いた夜
もうすこし夢見つづけていいですか
優しさが分母の式を解いている
本当の味方の味の苦いこと
蟹はいう甲羅の入る穴でいい

大阪市　田中滋郎

初春に夢繋ぎつつ書く賀状
煙突を探してサンタ迷ってる
素敵です煽てに乗った試着室
宝くじ若しや若しやと買い漁る
クリスマス近く素直な子に戻る

大阪市　寺井弘子

人間がカラスの知恵を持て余す
エレベーター気の毒そうにブザー鳴り
重い腰バイキングにはすっと立ち
ふと見ると敵もあくびをかみ殺し
苦労したあかし老父の重い口

大阪市　伏見雅明

夢を見て抑えきれずに買うジャンボ
ニコニコと笑い皺など気にしない
迷い猫名前もつけて居つかれる
空想の世界へ誘う美術館
花活けて素直な顔に戻ります

大阪市　山本加お里

こだわりを解かしてくれた繁昌亭
お喋りの扇子タオルが笑いまく
夫婦して話芸の渦に巻き込まれ
旨い酒話が弾む夫婦膳
千両と万両赤く実る庭

大阪市　吉内福世

御破算に出来ないままに来た師走
ぎこちなく作り笑いをする師走
走りたくないのに走る十二月
手を抜いたツケが身に沁む十二月
捗らぬおせちへ妻の八つ当たり

池田市　上嶋幸雀

寒いなあ長生きしすぎかもしれぬ
浮かれてる場合か沈下してる国
中国産NO出し市場うろうろと
曲り角市場帰りがまたしゃべり
ぶつぶつと言ってるけれど味方だよ

池田市　多田契子

フラッシュへ嘘重ねてる病んだ国
飼い猫と欠伸重ねて日向ぼこ
後悔を重ねて男味が出る
とっくりにおだてられ猪口にじりよる
大掃除そっとへそくり避難させ

茨木市　島田誠一

温暖化論議熱くてまとまらず
温暖化かかえて地球三角に
温暖化叫ぶ空気で汚染する
澄みきった宇宙へ早く疎開しよ
未来にも地球の形守りたい

門真市　矢阪英雄

シルバーで働けるだけ幸せね
米作やめた肥料や油高くなり
祝日になぜ旗を出すと孫尋ね
遊園地付添いの親多いこと
自分の世は終ったと言い子に遠慮

河内長野市　内海綾乃

八十二歳誇らしくありまたさみし
大正はいつの間にやら古くなり
散歩道喫茶店にて小休止
こつ覚え今日も秋刀魚を焼いている
新聞のレシピ早速試作する

河内長野市　木太久正一

頭剃り心は空に座禅する
稲刈りも終り癒しの旅にたつ
白無垢で嫁ぎ十年家の色
寿司のねたもう売り切れとうまい店
この暮も繁華街でのルミナリエ

河内長野市　黒岩靖博

うたた寝へはっと目覚めて夕支度
こっそりと仮面外して着く家路
夕日ストン師走を急ぐ人の群れ
亡母の声聞きたくなって里の駅
お茶漬けに漬物ほっとしてる舌

河内長野市　針生和代

酒タバコ止めても残らないお金
駆け引きと知らずその気にさせられる
京の秋着物姿が良く似合う
寝る前に今日食べたもの思い出す
一ランク下げると楽に通るかも

岸和田市　坂口英雄

うちのママ角は2本でおさまらず
ケータイで上手に遊ぶ一人っ子
苦しみの中に希望の光あり
ロボットが安定させる棒グラフ
苛立ちが子供を越えて俺にむく

岸和田市　中岡香代

剪定と思えば枝を潔く
小春日を確かめてから冬の旅
賑やかが好きで今夜も鍋にする
時折は時効の恋で若返る
私を改革したいこともある

岸和田市　米富淳風

人の前笑顔で叱り目で叱る
姑に長生きしてと言ってます
わだかまりいっきに溶けたい言葉
心からお詫びしますが多すぎる
脳外科の手術脳みそ増やせぬか

堺市　大久保伸子

堺市　羽田野　洋介

思いっきり気分を変える若作り
鍋の日は関白様も奉行職
ちょい悪のささやきぐらい聞いてみる
すげ替える首があるだけまだいいか
クラス会絞られた師を懐かしむ

吹田市　藏田光子

同窓会女の見栄もひからせる
好き嫌い言うて淋しいバラの刺
嫁姑次第送りで仲が良い
あれは嘘わかっているが聞き上手
如才なく喋る言葉に嘘がある

吹田市　二宮栄子

三億の夢見る列に引き込まれ
秋なすに義母の笑顔を重ね見る
公園のぶらんこゆれて夕焼ける
もったいないの心を孫にそれとなく
下り坂すべて仮面は捨てました

高槻市　笠原乃りこ

偽装用ブラとガードル買ってます
意味のある日ばかり続きくたびれる
今日も鍋愛と手抜きが湯気立てる
澄んだ空日本ゴシゴシ洗いたい
見え聞こえ食べられ歩け何望む

高槻市　片山かずお

何かある妻の笑顔にご用心
顔よりも光る心にする化粧
禁煙を考えながら吸う煙草
いい話すぎて相づち打ちかねる
迫り来るエンマを杖で追い返す

高槻市　安田忠子

吉と出る家族三人ねずみ年
五巡目のねずみこまめな旅続く
露天風呂捻った腰を忘れてる
ふと止まり何処へ行くのか考える
好き放題元気にやって子孝行

豊中市　荒巻夢

われもまた真っ赤に紅葉して落ちる
老いたとて今日には今日の目覚めあり
自転車で譲り合ったらぶつかった
二時間を潰し後悔するテレビ
国益の前に信義は蹴とばされ

豊中市　源田啓生

故郷のやせ大根が温かい
恋ひとつ抓んで見たい聖夜の灯
のどの奥小骨のような語句ひとつ
紅葉散り値上がり灯油燃えている
ここがもう終着駅か咳三つ

豊中市　谷川勇治

雑草の威張らぬとこが好きなんです
雑草は消える季節を知っている
雑草の可愛い笑顔知ってます
合格の子大きい丸を画いている
幻の王子待ってる娘いる

豊中市　松尾美智代

ベランダの柿の簾があたたかい
遊ぶ事重ならぬようメモを見る
賀状書き一服せよとミルクティー
秋深くなっておいしくなる林檎
無駄絞りすっきりさせてゆく暮し

富田林市　古田千華

老醜を見せずさらさず初暦
ひと文字の丸み肩書とれたから
紅白の紐を結んで出す荷物
せりせりと氷踏めない温暖化
しなやかな少女の羽化のまぶしくて

寝屋川市　岡本勲

うそ少し混ぜて自分史書いている
こつこつともしもの時にと貯めてます
葉書より便利メールで礼を言う
一枚の葉書が運ぶ人の愛
自分だけはもしもはないと思ってる

寝屋川市　北田ただよし

イマジンにあおい思いが湧いてくる
エラーコードがまだ読み切れぬ温暖化
権力の側からこちら向くカメラ
わが毒に当らぬようにフグも生き
自信なさげに撫で肩になるオジギソウ

寝屋川市　小嶋みさと

良心が麻痺をしたのか偽装の世
ペン持って脳の劣化を歯止めする
一瞬の油断大きな事故招く
争いがいつまで続くテロ犠牲
誕生日嬉しくもあり淋しい日

寝屋川市　森田麗

二兎三兎追いかけたまま恙なし
化けの皮剥げない内にコンパクト
生憎と言い鰻重でもてなされ
屠蘇祝亡母の雑煮が語り種
突っ支い棒が欲しい家にも心にも

羽曳野市　宇都宮ちづる

少子化で子のポチ袋肥満気味
孫寝かすさびれた声の子守歌
賀状減り喪中ハガキが増えました
子育てを楽しんでいる三人目
何もせず日向ぼこして日が落ちる

羽曳野市　仲谷真一

次々と老舗の暖簾ドロだらけ
防衛費やっぱり高くつくわけだ
天国に私の椅子はありますか
年末だ楽しい事がたんとある
麻雀で脳のリハビリやっている

羽曳野市　松本静子

鉢植の山茶花はらり散っている
ポックリと逝けるようにと詣る寺
ずっしりと私を包む綿蒲団
雪虫が飛ぶ古里は雪かなあ
古里は紅葉散りはて雪が降る

羽曳野市　森下一知

散らかっているから温いマイホーム
底抜けに笑って生きる空財布
ダイエットするから旨いつまみ食い
ふる里の水にうすらぐ鬱の影
才能に稽古嫌いが惜しまれる

枚方市　小林わこ

三者三様あって楽しい子の会話
自分からなかなかノーと言えなくて
逃げ道が見えたとたんに動けない
上りきればきっと見えそう花の道
女房が機嫌良い日の缶ビール

枚方市　二宮紫鳳

ジングルベル聞くと財布がゆるみ出す
幸せな子らの寝顔にサンタ来る
ジングルベル流れて街は眠らない
還暦のハードル越えて得た自信
来る年に夢をたくして賀状書く

藤井寺市　増井ヨシ枝

毛を刈って外套着せて犬散歩
母逝って帰りの荷物軽いこと
トンチのように月から地球昇ってる
春ですねあなたにピント絞ります
素敵ねへ安物なのと言うオホホ

藤井寺市　俣野登志子

目と耳はおぼろ代りに口達者
老いふたり愛の残高複利法
友のため吐いた嘘です閻魔さま
シミとしわ増えて鏡を睨んでる
熟女の旅喋っているか寝ているか

藤井寺市　吉田喜代子

団体の客が途絶えた寺の鐘
いちいちと詮無い事を言い暮らす
古里の墓はしんしん雪の中
若い娘大食い売りの人気とは
夫そわそわ高二が作るチョコレート

すわ地震救命バッグ置いて逃げ
満員電車揺れに任せて身を預け
かぐやから地球の出入り魅せられる
笹藪に姿をさがす声の主
三ッ星に江戸前の粋にぎり鮨

箕面市　寺井柳童

無病息災祈る順序を決め兼ねる
臆病な影が六十路でまだ迷う
四十路過ぎいまだマンガの愛読者
老いぼれを更に惑わす世の早さ
我が庭もチッチャな秋が色づいた

八尾市　笹倉ひろし

腕白が敬語を使う電話口
詰めこんだ知識が迷う変化球
神によく見えるところへ絵馬を吊り
年明けて捜す去年の忘れ物
喜んでもらえばそれで良い疲れ

八尾市　田中トシエ

つい本気になってしまった痴話喧嘩
松茸が里から届く休肝日
昼酒が飲める間が花でした
団塊が社会の色を変えてゆく
愛情か手抜きか今日の鍋料理

八尾市　田邊浩三

点滅の信号母の手を引いて
亡き友が遊びに来たか掌に蛍
楽天家ついぞ知らない肩の凝り
幸せだ今年もソバを差し向い
来る年も平穏願い松飾り

八尾市　西川義明

食べ歩き妻の料理の腕を上げ
足早に素通りします諭吉さん
同じ事習っていても差が開く
ダイヤより心のこもるバラ一輪
散りもみじ古都の晩秋ひとりじめ

八尾市　前田紀雄

幸せを合わせ鏡で招き入れ
手さぐりで吉と出る日を模索する
温暖化地球の芯がヒス起こす
ストレスが胃の中家宅捜査する
どうしても刺が取れずに石をける

八尾市　脇俊子

おかえりと自分で言って灯をともす
タイ焼きを立ち食い歩く庶民権
街中を落葉だらけに風小僧
買い物に来たけどメモがあらへんねん
やきいもも忘れおしゃべりたきびの輪

大阪府　安藤なつこ

着もしないセーター編んでひまつぶす
長話今日の予定は明日にする
霜枯れの花に老母を見るような
痛くても好きなことなら辛抱でき
まだ恥があって来客前掃除

大阪府　小栢こずえ

現実とバーチャル住み分けできぬ子等
ささやいたはずの言葉に笛太鼓
携帯を持つとマナーが狂いだす
駆け足も早足も今他人事
恋人の中に見知らぬ人をみる

大阪府　神野千恵子

彦根城息切れぎれに下見する
寒くなり鍋の出番がやってきた
階段の怖さへ歳を振り返る
残り火の哀れのままに幕おろす
鍋敷きにされた去年の年賀状

大阪府　若月裕作

明るくを数回言って起床する
寒い日は金を多めに持って出る
雲も人も落ち葉も走る十二月
あのかたのご親切よく思い出す
詫び状を書いたあとには酒が要る

神戸市　木村忠義

生前葬してから長く生きている
悪いこと出来ぬ神様見てるから
少しなら薬にもなる毒を持つ
ここからは秘伝の味と明かさない
足跡を残す努力は惜しまない

尼崎市　加川靖鬼

嫁ぐ娘と最後の家族旅行する
住む人が変わりかわいい声がする
マンションで犬猫飼えず金魚飼う
心逸る一字ちがいの宝くじ
一個分おまけのように黄身二つ

尼崎市　藤岡りこ

団塊がいよいよ老いの仲間入り
玄関に私一人の菊花展
よくやったこんなに細い腕なのに
金婚と傘寿祝って大晦日
寝ころんで見る青空の広いこと

加東市　安達厚

娘の車そつなくガイド津山泊
紅葉に石垣染めるコントラスト
小春日和胸一ぱいの日高原
古毛布老犬小舎に掛けてやる
片付けをせねばなるまい師走月

加東市　岩本美緒子

篠山市　永井かほる

かぶら採り千枚漬けが出来る幸
子芋掘り後の子芋は冬ごもり
頂いた栃木りんごにほれました
大阪も一人で行けぬ案じられ
あれ以来一番列車さけて乗る

三田市　臼井二英

才能がない分たぶん長生きだ
ペン持って最初の一字から迷い
経年の疲労来ぬよう注ぐ酒
メールの効車内静かになりました
腰痛が教えてくれた腰くだけ

三田市　阪本藤朗

無残やな食べ放題のカニの殻
葬儀場うちの家紋を思い出し
早口な割には遅い友の足
手術前生命線を確かめる
謀反した臓器は医師に切り取られ

三田市　辻開子

待ち合わせ心も顔もドキドキで
親と娘がひとつになれた夫の介護
しゃもじもつ視力検査は久しぶり
一枚のカレンダー気をはやらせる
ワンテンポずれた返事で歳を知り

宝塚市　丸山孔一

胃癌です医者の言葉が歯切れ良い（胃癌手術　五句）
俎板の鯉です先生頼みます
胃の手術赤穂浪士は痛かろう
要らぬもの摘出済んで清清し
食欲はあるが胃の無いもどかしさ

西宮市　石野照代

梅の村香りそっくりラッピング
冬晴れの背中お日様おんぶする
妻ばなれ出来ぬ夫とお買い物
自分色少しひかえて輪に入る
耳病んで季節はずれのせみ時雨

西宮市　藤本直

善悪で仕切りきれない人の情
足腰は年相応に動いてる
昨年の私の一字謝になった
千の風以来淋しき墓参り
妄想がふくれて闇に目を凝らす

西脇市　七反田順子

気兼ねせず平均寿命まで生きる
渡り鳥ご苦労さまと会いに行く
趣味悠悠夫も私もそれぞれに
本の虫ロクロの虫がいる家族
抹茶には甘いお菓子と友が来る

つかの間の幸せだった遠い日々
ハリネズミに似てバリアーを巡らせる
バブル弾け人の心も崩れ落ち
気短かでおっちょこちょいで怪我をする
少子化も神の御心かも知れぬ

奈良市　阿部茶々

おままごとしたくなるよなポリ容器
借りている方がブランド身に付けて
古写真あの日の秘密抱いたまま
英語には強いが敬語まるでダメ
なるようになると悟った運不運

奈良市　尾畑なを江

我が家宝鑑定されぬうちが華
喪中ハガキ本人でなくホッとする
年末に掃除逃れのゴルフする
大相撲病んでいるのは協会だ
不合格足どり重く帰れない

奈良市　辻内げんえい

はらはらどきどき星野ジャパンの二日間
目的を遂げて闘将恵美須顔
今至福紅葉川音露天風呂
特急より各停が良い秋の旅
わあわあとしか言いようのない秋景色

奈良市　矢野良一

御無沙汰を重ねて詫びの年賀状
いつわりを重ねる老舗元祖泣く
重箱の中味今年はデパ地下で
偶然と逃げる答弁ゆるせない
年の瀬の日付け偽装の年賀状

生駒市　小西稔

堪能の膳は偽装に彩られ
難題へすぐに逃げ出す癖があり
口だけは達者ですねと言われてる
澄み渡るような頭が欲しくなり
千の風墓は軒並み留守ばかり

橿原市　藤永実千代

濁らないように心の襞洗う
蹲いて少し大人になるこころ
宝ものはこころの奥の抽斗に
平凡に慣れたこころが翔びたがる
遺産には写真一枚あれば良い

和歌山市　柏原夕胡

物忘れ予防注射もしたくなる
締め切りの過ぎたチラシを悔しがる
携帯で起床合図を頼まれる
ガムばかりかんでストレス噛み潰す
前年の誤字を見付ける日記帳

和歌山市　坂部かずみ

和歌山市　田中すず

忘却の果てなるものと冬銀河
散骨は海へと釣りの好きな父
砂漠まで行って掴んできた答
内緒ごと内緒が飛び火しています
見てみぬ振りをした日のわたし許さない

和歌山市　土屋起世子

言いよどむ先をおふくろ読んでいる
言い訳が下手で正直売ってます
生きていると深呼吸までおいしいね
主婦業に染まって趣味は後回し
ひと言の余韻で夜も眠れない

和歌山市　根田よしこ

高血圧妻はこの頃怒らない
良妻で安物買いの化け上手
淋しさを持て余してる老母の顔
老母よりもちょっと明るい口紅を
青い空歩け歩けと背中押す

和歌山市　福井菜摘

アンダーライン今も生きてる父の辞書
机上論明日の風を読みきれず
漫然と生きて台詞が絵にならぬ
個性派が集い喜劇の幕が開く
待っている時が幸せ砂時計

和歌山市　堀　冨美子

幸せな日をあっけなく呑む夕陽
芽を出した鉢日溜まりへ持ち歩く
百均の籠気前よく放り込む
電池替え亡夫とつないだチャイム聞く
お調子者誰より孤独かも知れぬ

紀の川市　宇野幹子

辛苦越え塩の甘さに辿りつく
ひび割れの茶碗それでも響き合う
未だ五欲あって閻魔を遠ざける
カチカチの頭をほぐす電子辞書
不発弾抱いた俎板歯切れよい

紀の川市　木村徑子

メルヘンにいいえを告げてきたかぐや
お喋りのすぎた夜には自己嫌悪
仮面ぬいでいのちいとしむ四畳半
スローライフいのち光らすペンを持つ
心ならずも独りの舟を漕ぐわたし

紀の川市　辻内次根

晩秋の菊を嗅いだら陽の匂い
菜園のみどりを虫と分けている
お茶漬けを食べる幸せだと思う
千円で釣りがうれしい新刊書
快方に向いて振り子の音がする

公約も光明見えぬままに初春
天命はまたも白旗左折させ
筋痛症風と枯葉と我が影と
非常口消化不良が来て溜り
ここに冬遠い景色もみな身内

田辺市　大峠可動

絶好調続いて鼻がピンと伸び
隠し事妻の王手が続いてる
先を見ずその日を生きた方が楽
営業でその場限りの笑み覚え
おなか見て席を譲った早とちり

橋本市　石田隆彦

雑益を生む知恵絞りエコライフ
回り道近道覚え迷い道
汗の銭一つ一つが愛おしい
大掃除忘れた私顔を出す
大掃除心のゴミを袋詰め

鳥取市　大前安子

厨房は女の城と決めつける
一粒の米も拾った戦前派
くよくよするな新しくなるカレンダー
初孫の知らせ九年の春を待つ
やっぱりね偽装工作するトップ

鳥取市　津村律子

原石を磨けぬままにいる自分
日めくりの一期一会をはいでいる
ことわりもせず溜ってる体脂肪
メール来て眼鏡の上に眼鏡かけ
風の天使落葉舞い上げ散歩中

鳥取市　松岡照美

人に酔い車に酔って古都の旅
院展へ人ひと人のすごい列
やっかいな嫁姑に日が暮れる
忘れたい人の名前を書いている
忘れ物いっぱい残し暮れてゆく

鳥取市　山岡紀子

胃が美人医者に褒められ老い陽気
温暖化落葉も焚けぬ虚しさよ
七回忌噂の種も風化する
にこやかな会釈ステップ踏んでみる
三度目の聞き返しにはどなり声

鳥取市　横田春名

スポーツのうっすら汗が快い
こんにちは返事はしたが誰だっけ
家の中馴れた階段腰を打つ
石地蔵両手合わせて微笑んで
かさかさと落葉をけって散歩する

倉吉市　藤井美津恵

米子市　猪森スミヱ

うっかりと出た一言の大波紋
こんな時あんな工夫をしてた母
ありがとう八十路の坂も二人連れ
美衣美食金庫の鍵がきしみだす
蔦かずら境界線もなんのその

米子市　小塩智加恵

夏やせが元に返らず冬となる
声だけは若いと電話ほめられる
誘い合いインフルエンザ注射する
中国で青森りんご千円也
見せどころ手書き年賀の筆をとる

米子市　見山温子

にわか雨軒下借りて虹を見る
芋煮会笑顔が集う秋日和
ウォーキング出会いのチャンス会釈から
年金が孫の数だけ細くなる
壁の耳内緒話を聞いている

鳥取県　飯野菖子

初物の親蟹やはり大根汁
美しく見せたいバラに刺がある
美人より笑顔やさしい嫁といる
親バカであれもこれもと願う日々
真っ白な雲は流れて故郷へ

鳥取県　大田勝誉

この世の事は力と金でほぼ決まり
渦中からは何の手立ても策も出ず
リフォームがバリアフリーの老い迎え
ああ夫婦辛抱我慢抱き合せ
歳重ね粘ってやれる趣味三つ

鳥取県　北村稔

サイコロはやめるパチンコやめれない
稲束も稲わらもない米農家
命日のあなたは黄泉でどうしてる
自分史に戦時書きたくないけれど
負けました裏技だせばよかったに

鳥取県　斉尾くにこ

自分史にいきいき跳ねた五七五
朝の陽をシャカシャカと混ぜ卵焼き
喜怒哀楽のどれにも留まる胡蝶蘭
何度でも信じてしまう淋しがり
丸い頬恋のキャンデー遊ばせる

鳥取県　田口清帆

大根がおいしくなって足が冷え
少子化の何とも寒い冬が来る
三世代負けるが勝ちに波立たず
健康でお金があれば快適だ
喜寿すぎて賞味期限もなく元気

老い忘れ人に役立つ事したい
健康は自分で管理すると決め
孫ひ孫かこまれ今夜旨い飯
今出来る一日一つ善の道
目覚めから一日動くプログラム

鳥取県　橋谷静江

福引きの当たりを狙い余計買う
骨密度スリムなギャルよ食べなはれ
還暦に神社仏閣ツアー組む
国債か定期か悩む夢を見た
自分より息子のメタボ気にかかり

松江市　松浦登志子

孫と見るマンガに心遊ばせる
この自由携帯なんかいりません
ふるさとはみんな皆が和らかい
落葉道踏んでふるさと巡り来る
胸張って歩けば風の心地良さ

松江市　山根邦代

張りつめた心も緩み風邪を引く
くよくよも一夜明けるとあきらめる
川柳もライバルあって頑張れる
よく喋るはらはらさせる孫の口
物あふれ不況と見えぬ暮し振り

出雲市　川島和歌子

ちっぽけな家も一人の背に重い
凛として雪を被った寒椿
行く行くの事は気にせぬ白い雲
子に見せる背はきれいに拭いておく
寒さよりきつく応える物価高

雲南市　武島ちよえ

山の彩足とめられてとめられて
山の彩に負けられません七五三
ＯＢ会みな憂国の志士となり
心だけ逸れど手足そっぽむく
卒寿までハンドル持つと友は言う

雲南市　福間博利

石垣がいろいろな顔してみせる
立ち退きを迫られピンチ六地蔵
楚々と立つ鴉も迷う枯尾花
カードでは買えない物が一つある
何事も苦手作らぬ丸い月

雲南市　渡部好栄

人間は馬鹿か戦争繰り返す
爪で火を点しへそくりしてる爺
畠のためだ雨よ降れ降れもっと降れ
孫のため孫のためとて独り言
念珠持つ孫に仏心芽生えけり

安来市　原煩悩児

初発心吾れの心ゆり起こす
一転語感謝のひと言持つゆとり
三帰戒仏法僧に帰依心
静慮行悟りを開く行歩む
勿体無い感謝反省ありがとう

尾道市　木曽一徳

ブーメラン矢張り我が家に帰る気か
年の瀬に不況の風が身に沁みる
都合では呆けた芝居も場所のがれ
訪問着無理に着せられ売りつける
残り火を消さずに生きる趣味の道

府中市　岩本雅代

８０２０元気な人の歯のはなし
努力する人に結果はついて来る
今日の顔一番いいと言い聞かせ
定位置で漂っている昨日今日
足腰は退化口先だけ元気

府中市　藤岡ヒデコ

疎遠の友賀状で安否確かめる
日なただけ歩く男の影わびし
賛成の中も十色に分かれてる
はてしない海の青さと人の欲
着ぶくれてストーブにらむ灯油高

宇部市　高山清子

見る夢も歩調も揃う老いふたり
夢のまま終るもよしと笑い合い
遠い日の恋のぬけがら捨てられず
一冊の良書心の皺のばす
新春の白いページへ描く夢

阿波市　三浦千津子

ただいまと今日も大声跳ねる孫
道の駅おまけの葱が温かい
掛け声に膝が泣き泣きついて来る
誕生日誰も気付かず過ぎており
段落も句点も無しで今日は過ぎ

東かがわ市　赤澤貞月

経験の皺を刻んである傘寿
少しだけ背伸び傘寿の骨が鳴る
米寿まで更なる願をかけておく
本当の平和が住んでいる笑顔
相槌が見事に打てた聞き上手

今治市　渡邊伊津志

三食昼寝そんなに甘い職でない
牛ロースいつから食べてない家計
地区割りの募金を軽い財布から
自我捨てるなんて私を捨てること
ヨーグルトうふふお通じ良くなった

大洲市　花岡順子

香南市　桑名孝雄

無為無策また一年を棒に振る
日めくりに今日の私が裁かれる
たわいない酒で天下は無事を知る
門松も歌も国旗もなく明ける
正月の感動はなし飲んで寝る

香南市　近森功

宿酔助けてくれた今日の雨
3Lをやっと見付けて試着室
クラス会やはりどんぐりばかりです
火種まだあれば芽も出る花も咲く
十二月八日の傷がまだ痛い

北九州市　岡田幸生

一葉か英世に迷う駛斗袋
あつ熱の鍋に溶け込むわだかまり
どんぐりと見られているが自負は持つ
この国の明日が並ぶ育児室
補聴器も義歯も知らぬと言うて喜寿

福岡県　林さだき

友が逝く今日から彼の分も生き
小さくなる身に出来ることまだ多い
合併に不満たらたら過疎のバス
善人も車に乗れば利己主義に
親介護持ち回り案宙に浮く

唐津市　岩崎實

究めゆくそのはたらきに花が咲き
したためておけば脳裏をはなれても
ほっかぶり猫と犬とに話しかけ
六地蔵過ぎれば見ゆる我が藁屋
手仕事の仕上がり上々庭手入れ

山鹿市　阿部ミツ子

水　酸素未来は何を売るのやら
古池にかわず飛びこむ池も消ゆ
いかにせん漢字の国が英語づけ
手を合わせあハハおホホと笑い合う
庭の木もいつしか秋の風情なり

シドニー　三谷たん吉

政治屋と官僚主義で民主なし
国会は警察ごっこ猿芝居
政界は民主主義さえ偽装めく
正直な人が見たくて山鹿行き
虫の音もトンボも無縁都会人

札幌市　三浦強一

妻何か言ってる微笑んでおこう
三丁目の夕日昭和のよき時代
ふる里のしきたりがある雑煮の具
焼酎のお湯割りが待つ猛吹雪
ケータイでお詫び安直過ぎないか

日本の夜明けか政治いそがしい
伝言板消えてケータイ世を制す
黒くても白と言い張る偉い人
兄となる二歳児礼儀正しかり
パスポートタンスの中で昼寝中

栃木県　岡野　すみれ

ウイルスも銀河も神の手が創り
カルチャーの男性どこも少数派
鬘鑁と少うし呆けて人気者
人気者人には見せぬ顔を持ち
背が伸びるわが子と背丈縮むボク

東京都　井上　つよし

消臭剤が第六感も消していく
五分と五分お互いさまの長続き
からっ風心に欲しい保湿剤
平均値安心値とは限らない
デパートに優しいことば売っている

立川市　柏野　遊花

宝くじ当たりハワイへ行く予定
嫁が来て息子がまめになりました
期限切れ社長に食べてもらったら
腰痛も孫の笑顔で治してる
花婿の母はににこにこ控え目に

横浜市　巌田　かず枝

怪しいと顔で判断するでない
いつまでも今年こそとは言えません
ネオン街夜にならぬと歩けない
本望か酒好きだった友が逝く

大阪市　江島谷　勝弘

コマーシャルテレビの音がでかくなる
誠意とはぎょうさんお金だすことか
軽うても飲酒運転あきまへん
炎の中で母は仏のなかま入り

大阪市　太田　としお

誘いの手裏があっても乗ってみる
いつ出すか秘策を胸に懐手
世渡りは賭ける度胸と下りる勘
ありがとう五文字でもどる夫婦仲

大阪市　萩原　大朔

すかたんに掛け違えてるボタン穴
川柳にストレス掃き出しまた溜める
不思議だなゴミほど溜まるものはない
支払いに追われ師走は忙しい

大阪市　橋村　容子

がんばり屋の姉を越せぬとまた思う
美しい言葉使いに背を伸ばす
一言も交わさないまま日は暮れて
まだともう使い分けして暮らしてる

大阪市　原田　すみ子

ガン細胞笑い飛ばしてぶっ飛ばせ
月からの地球もやっぱり青かった
洞爺湖を見ないで首相やめられん
お母ちゃんの料理最高三つ星や

大阪市　平井露芳

年の差に悔いなどは無し恋の道
パソコンの礼状なんて愛が無い
一献で洗い流した過去の傷
ただいまも言わず炬燵でコップ酒

大阪市　吉川弘泰

灯油高着ぶくれの妻猫を抱く
俺ほか弁我が家の格差妻ランチ
吉兆も見破られたか隠し味
紅葉が夫婦和ます車椅子

泉大津市　助川和美

着膨れて当分口も避寒型
七軒のわが郷寒に凍りつき
お水取近畿育ちの季節感
母の菜心までをも満たしくれ

泉佐野市　稲葉洋

箸袋孫の名前を書いて待つ
年玉用新券替えに銀行へ
年毎に手を抜いているお重詰め
準備済み紅白を観る年の暮れ

豊中市　神野宇乃子

ネオン街さまよう気力何処へやら
漁火を眺めて宿の夫婦膳
感涙のシネマ終って灯り点く
ストレスの種が一杯朝刊紙

枚方市　小川良吉

八十路の夢百歳ゴール険しいぞ
眼帯取れ灯り眩しく笑顔出る
トンネルを抜け乗り継いで秘境の湯
嫁姑にこやかに見えあら探し

枚方市　坂本ミヨノ

苦労とは思わず生きて五十年
ほそぼそと生きた証しのマイホーム
五十年迎え二人で海の宿
ふるさとを頬張っている冷蔵庫

藤井寺市　伊藤アヤ子

花の香に酔いしれているワンルーム
バーベキューポチがそこから離れない
デパ地下でお腹の虫がやかましい
お日様がストーンと落ちてこぜわしい

藤井寺市　津田シルク

川柳に神も仏も人も住む
亡き人の心と会話する写経
矢が尽きて真の太っ腹が見え
たばこ屋に看板娘いなくなり

八尾市　赤木妙子

マネキンの衣装豪華に十二月
八尾市　中島春江

ちぐはぐな献立となり年の暮れ
六畳のここが安堵の置炬燵
落葉散る如くに叔母の永眠す
大阪府　大屋敷婦美子

あとうんの空気を知って五十年
ただ一途愛の灯火あったから
にがてなのゴマをすることされること
強運は鈍感力よ七十路坂
大阪府　高木道子

世の異常酒がすすめば直ぐ捌く
日の流れ加速度つける六十路坂
物欲を捨てて動じぬ木守柿
人の世は紆余曲折の絡み合い
大阪府　西川冷子

祈祷所の巫女はしずしず笙の笛
小鳥群れさえずる所作の忙しさ
主婦業も定年ほしい老いの坂
大杉へ弾く玉砂利五十鈴川
大阪府　畑中節子

木枯しに落葉と箒ダンスする
ささやかな抵抗をするバラの棘
紅葉も味覚に負けず旅誘う
句は日記老いの気力を覗く窓
神戸市　武田恵美子

電車の中気持イライラ足走る
おかわりをなん杯もする大広間
その話熱燗つけて誘導す
二人づれ負けじとばかり高声で
尼崎市　小池幸子

年一度筆の出番の賀状書く
売り出しの広告競う年の暮れ
母越えて気丈に生きる娘達
好奇心笑顔で越える老いの坂
加東市　黒崎美紗子

カラオケをして遠ざける認知症
よい便りやって来そうな大安日
年忘れ酒が出るから歩く会
おしゃべりが何よりみやげ長居する
篠山市　谷田多美子

請求のお金支払い出来る幸
大根を抜いてどうぞともらう幸
寝て起きて食べて幸せかみしめる
故里に老いの夢追う川がある
三田市　上垣キヨミ

息災を願い火の粉を浴びる護摩
吐き捨てたガムが差し歯を連れてゆき
クリスマスサンタの財布風邪を引く
宝くじ当った夢にうなされる

若返るお化粧品の高いこと
男尊女卑化石となった日本語
日曜に刈る里山の小百姓
美味しいと言われいそいそ無漬ける

三木市　広瀬房江

付き添いはどちらだろうか老い二人
都市砂漠ふる里捨てた人の群れ
消印の向こう大事な人がいる
発車ベル熱いまなざし忘れない

奈良市　乾　春雄

まだ俺は化石じゃないぞと五七五
持たせても無駄着メロが聞こえない
孫産まれ出番増えたと威張る妻
うたた寝の美女に肩貸し乗り過ごす

奈良市　岩本浩二

日本晴れ星野野球のアジア戦
飲むほどに肩書きが出る老人会
期限切れ老舗つれもて枯れ落葉
世も錆びて公約までもぼろぼろに

奈良市　田中賢治

よその子を叱る教育モデル地区
太陽が見たくて鼻毛伸びてくる
脳味噌の質で決まっている手相
通天閣世界遺産にならへんか

和歌山市　山田侃太

空似とは知らず他人に声をかけ
客のない店には足が躊躇する
言葉では語られそうにない本音
北風に甘さをもらう吊るし柿

岩出市　村中悦男

未知数の刺激求めて駅に行く
諦めたときに命は錆びてくる
細胞肥大食べ放題のツケが来た
倒れてもコスモスの花小さく咲く

海南市　小谷小雪

一晩で庭一面の柿落葉
一輪の花で華やぐ朝の卓
くぎ付けテレビフィギュアスケート終わるまで
その場しのぎの嘘だと顔に書いてある

和歌山県　森下よりこ

あの事件以来お餅は危険物
お雑煮は団子の粉をこねた物
ホームでは本当の餅は食えません
調理師の作る調理は愛がない

鳥取市　近藤秋星

澄み渡る夜空にさがす星ひとつ
登校児笑顔で送ることに決め
デパートにお歳暮の品選ぶ目　目
イルミネーションサンタ待つ子に加勢する

鳥取市　坂本智子

新聞は憂き事のみで見る気せず
傘寿すぎ顔のしみまだ気になるね
一生を守ると言って冥途行き
太陽が名残惜しみつ顔かくす

鳥取市　谷岡清子

枯すすき爺の頭に似て哀れ
認知症になってたまるか脳鍛え
何を書いても消せる鉛筆はなせない
年金日楽しみにして指を折る

鳥取市　山口千代子

妻の舵上手にとれて恙なし
赤々と沈む夕陽に手を合わせ
残り火をちろちろ燃やし白寿まで
屑かごにぽとりと捨てた過去の恋

倉吉市　酒井芙美子

おめでとう言われて気付く誕生日
世の悪を睨み悲しむ仁王さま
前を見て飛ぼう八十路はまだ若い
公約は選挙までとは滅相な

倉吉市　前田喜美子

お隣に灯りが点りほっとする
降るほどの家事の合間にする昼寝
大根を煮ればかならず亡母の味
ゴミ出し日カラスといつも鉢合わせ

境港市　遠藤那珂子

閻魔様国会を見てどう思う
舞台での策を考え出番待つ
こっそりを月は見ている照らしてる
クラス会タイムスリップ皆若い

境港市　中井虎尾

国策のままに我慢の戦中派
老いの身をそろりそろりと自覚する
疲れるが休み乍らの家事続け
笑点を見るときだけは笑い合う

鳥取県　岩崎和子

ど忘れをさかなに友とお茶を飲む
ど忘れが度重なれば惚けにされ
生け垣の枝が隣のうわさ聴く
横文字に電化が老いを攻め立てる

鳥取県　大塚美代子

女より女っぽさのニューハーフ
ゆっくりと視野を広げる遠回り
人それぞれ余る基準が計れない
効能を半ば信じて湯治客

鳥取県　岡本幸枝

弱い人だます悪人湧いて出る
人目にはすいすい暮らし火の車
住職の法話聞くたび身にしみる
痛む膝安かれ妻の足さする

鳥取県　岡村孝明

喋ることなくなってから深い仲
リクエストハガキに松田聖子さん
世の中の恋の多くを実らせて
金槌を強い女に譬えます
松江市　相見柳歩

切り張りの障子平凡生かされて
シクラメン悲しいいろも秘めて咲き
ひとりぼちこの世にあろうはずがない
悠久のロマン映画が若くする
出雲市　荒木英子

駈足の寒さ戸惑い秋さびし
猛暑にも悩まされたが今は冬
水茄子も終ってしまい残念だ
今日生きて良い夢願い床につく
雲南市　菅田かつ子

お多福が座っただけで和む部屋
ぽんこつをそこそこ洗車して出かけ
手みやげを提げて頼みを言いそびれ
悪気ない人でちょっぴりおしゃべりで
高知県　いの静草

肯くがここから広げない噂
お互いに逃げ場になっている仕事
山の会一病二病みな抱いて
ホイッスル鳴るまで傍に本とペン
唐津市　北村松風

カギ預け隣が頼り老い一人
退院を夏の掛軸待つ師走
日除けしてゴーヤ豊作夏終る
若者の仕事ないから村消える
鹿児島市　五反田柾子

逢うてきてやはり逢いたい人である
気がぬけたようにねころぶわが枕
わたくしのために作っている料理
家にいる刻の速さはゆるゆると
札幌市　小沢淳

悔しさがこみ上げて来た母の胸
小事だがおなかの虫が治まらぬ
幸せな心も貰うボランティア
朝刊をめくって今日が動き出し
草加市　飯土井健翁

疲れ目を庭の緑に癒やされる
読書好き朝の二時まで読む明治
顔の艶七十代という明治
定年の子より元気と医師の言う
横浜市　金森徳三

ああ日本嘘ごまかしで年が明け
遅れたり進み過ぎたりする時計
言いたいこと言ってしまった日の孤独
朝と夕今もやってる指回し
（加藤スズコさんの句は52頁に掲載）

麻生路郎句抄

（句集『旅人とその後の作品』から）

人生の雑音

奥様一人天井が鳴る
鯛焼けば鯛の臭ひが残るなり
くびきりへ今日は秋立つ日なりけり
お互ひの世にせうとしてかどがたち
もう叱るばかりの宅と思って居
寝転べば畳一帖ふさぐのみ
まけて呉れる頃の茄子の小さくて
歯が痛いさうかと亭主出てしまい
お前達は畳の上の資本論
食ふべくもないのに被てる紹の羽織
滅私奉公だなんて云っていたボス
あの女この女みな十九なり
嘘をまろめて書斎けうとし
その日ぐらしも軒に雀がこぼるるよ
日あたりのいいうちだが物足りなきにかわりない
戯れについても淋し鐘の巾
冬は尖って金のことといふ
ＰＴＡここでも労資こぜりあひ
証文は要らぬしっかりやりたまへ
鯛一匹で人間の騒ぐこと
嫁入りをして大劇と縁が切れ
それが世の中ですとは　けちなこと
売る土地があって老人折れて出ず
金は無くとも金は無くとも君と僕

愛染帖

新家 完司 選

この道を来たから会えた人ばかり

豊中市　吉田あずき

（評）悠久の流れに漂う、ほんの一瞬の人生。同じ時を生き、同じ道を歩んだからこそ知り合えた人たち。思えば奇跡のような縁。

窓くらい拭いてと妻の尖り声

池田市　上嶋　幸雀

（評）炊事に洗濯、雑巾掛けに衣類の整理、など等、きりきり舞いしているのに、亭主はぼんやりテレビ桟敷。声が尖がるのも当然。

直線を曲線にする猜疑心

黒石市　相馬　一花

（評）人間関係の基本は、先ず信頼。信じ合っていれば真っ直ぐ行くことも、猜疑心が生じると、曲がりくねって縺れてしまう。

金持った人の集まる場所がある

和歌山市　喜田　准一

（評）フツーの人は入りたくても入れない場所。競走馬や船舶、ビルや会社のオーナーたちだけのクラブ。が、どこかにあるらしい。

しみじみと野菜の固さ知る入れ歯

横浜市　金森　徳三

（評）歯が揃っていた頃には分からなかった野菜類の骨っぽさ。この世の中、身をもって経験しないと分からないことがいっぱい。

探し物する度捨てる物が出る

八尾市　生嶋ますみ

（評）探し物は出てこず、「こんなものは要らんなー」というようなものが出てくる。探すだけなら時間の無駄。ついでに整理整頓だ。

一人寝の明かりを消せば小冥府

泉佐野市　稲葉　洋

（評）あの世がどのようなところか知ることは出来ないが、暗闇の中で横になっていると、このようなものではないかと思う。

苦しまず死ぬため長寿目指してる

西宮市　藤本　直

（評）「苦しまず死ぬために長生きする」という「生きる目標」は見習いたい。さて、何歳ぐらいになれば苦しまずに死ねるのだろう？

神さんが僕のスイッチ握ってる

豊中市　谷川　勇治

（評）いくら長寿を目指していても、神さまがスイッチを切ると動けなくなってしまう。何が原因でいつ切られるのか、誰にも不明。

肩がこるきっと外面作り過ぎ

米子市　小塩智加恵

国産もトンガもかぼちゃ同じ味

弘前市　高瀬　霜石

大雪になるとばたばた人が死ぬ

東京都　岸野あやめ

働いてきた手の甲の皺つまむ

高槻市　片山かずお

ヘルパーに同じ話を今日もする

出たものの今日一日をどう過ごす

和歌山市　根田よしこ

菊の花うちはどの子も素直賞

老母元気わたし明るく元気ぶる

札幌市　三浦　強一

ONとOFFオール電化が心地よい

妻が居なけりゃわが屋はきっとゴミ屋敷

橿原市　安土　理恵

たくわんを噛めるしあわせ二重唱

筆ペンのアルファベットがぎこちない

海南市　三宅　保州

編集の都合でもっと書けと言う

初対面何と心地のよい刺激

鳥取市　徳田ひろこ

平凡な暮らしに響くビッポッパ

当然のように正座の膝に馴れ

西予市　黒田　茂代

花だって咲かねば褒めて貰えない

すぐ解けるリボン結びの恋だった

吹田市　穴吹　尚士

中国のゴミをどっさり運ぶ波

無愛想に何度も回る寿司の皿

京都市　高島　啓子
強そうで弱いカレンダーの紙

鳥取市　岸本　宏章
いい空気星が証明してくれる

大阪市　森田　明子
褒め言葉たまに言うから生きてくる

奈良県　渡辺　富子
自画像を描くがごとく化粧する

三田市　北野　哲男
どうせまた偽装と思う癖がつき

筑面市　広島　巴子
田舎からどげんかせいと喝が飛ぶ

豊中市　水野　黒兎
男とや夢と無駄とを綯い交ぜに

鳥取市　有沢せつ子
閑居して不善為すにもない元手

大阪市　大川　桃花
三ッ星の店より旨い母の味

高槻市　乙倉　武史
雨戸引く音で挨拶寒い朝

達人は歩幅を変えぬ山歩き
似たような日が続いてる日記帳
糖質はゼロ飲め飲めと発泡酒
目に毒な雑誌写真は袋とじ

百舌の贄ひからびやがて古希の冬
以下余白とも居直れずやがて古希
飲む会の脱線談がおもしろい
日曜日カーテン開けて朝寝する

堺　市　加島　由一
胃袋は賞味期限にこだわらぬ

羽曳野市　吉村久仁雄
連絡はしないが集う飲み仲間

和歌山市　木本　朱夏
輪ゴムほどの役に立つなら　忠告よ

寝屋川市　北田ただよし
ストレスと酒がシーソーして困る

交野市　山川日出子
診察待ち背中だんだん丸くなる

寝屋川市　籠島　恵子
風鈴をしまってくれぬお隣さん
フライパン返しつづけている暮らし

和歌山市　田中　みね
拾ったら届ける財布落ちてない
言い訳の電話ふんふん鼻できく

鳥取県　石谷美恵子
馴れ初めを聞いてあげたら止まらない
ケセラセラ銭のないのは馴れている

弘前市　相馬　銀波
後悔の日記みじかい私小説
とぼとぼと帰ると重い靴になる

和歌山市　古久保和子
焼きそばをおかずにご飯食べている
そもそもは私に道を問うなんて

大阪市　柴本ばっは
これも歳どんなものにも鈴を付け
定年後の寒は殊更こたえます

大阪市　古今堂蕉子
ありがとう今わの際に言えるかな
女の涙浄化作用と鎮静剤

枚方市　海老池　洋
本当は空に浮きたくない機体
医者よりも妻が煩い血糖値

神戸市　田中　章子
西の月東の月も背なを押す
料理歴オムレツだけは上手くなり

堺　市　羽田野洋介
ぬるま湯に向上心も溶け始め
絞ったらまださらさらの知恵が出る

大阪市　谷口　義
おばあさんになると泣いてもおられない
年甲斐なんて考えたこともない

藤井寺市　太田扶美代
ただの夢になりかけている希望
見落しがいっぱいあってまだ死ねぬ

砂川市　大橋　政良
車椅子盲導犬が離れない
思い出し笑いカラスが鳴いている

鳥取市　倉益　一瑶
母の着物いろんなものに化けました
設計図たしかバラ色だったはず

唐津市　樋口　輝夫
税務署の門は広目に開けてある
蟹高値土産蟹味噌蟹煎餅

八尾市　中島　春江

八王子市　播本　充子
相性があり人形が売れ残る

大阪市　小谷　集一
平均寿命超えて一人前になる

紀の川市　木村　徑子
里の秋いのちいのちがみな実る

堺　市　村上　玄也
何もかもミニで済ませている老後

米子市　中井　ゆき
そばホッケ食べたいものはすぐ言える

堺　市　和田つづや
生き様に妥協の余地が見えて古希

シドニー　坂上のり子
日本に無い物がない不幸せ

鳥取市　福西　茶子
女三人あっという間の一万歩

大阪市　福岡　末吉
百円で孫を仲間に引き入れる

倉敷市　撰　喜子
大枚はないけど小銭すぐたまる

三田市　堀　正和
寅さんはいいなちっとも年とらぬ

篠山市　円増　純子
反省は毎日してる夜の床

大和郡山市　坊農　柳弘
ネズミにはねずみの主張十支頭

和歌山市　たむらあきこ
てのひらを溢れてしまう電化品

唐津市　仁部　四郎
気の毒とあの黙礼は思ってる

香芝市　大内　朝子
寒い日は石焼芋を買ってくる

鳥取県　竹信　照彦
叩き売りしても買い手の無い田んぼ

神戸市　山田婦美子
食べる子もない山盛りの柿を買う

八尾市　髙杉　千歩
本日のサービス独りに多すぎる

枚方市　丹後屋　肇
君が代のジャズアレンジにタップ踏む

藤井寺市　鴨谷瑠美子
虫めがね出して効用読んでいる

大阪市　坂　裕之
園児らの作品展で涙する

鳥取県　細田　裕花
満月がぽろぽろ欠けて冬景色

松江市　川本　畔
夫逝ってしっとり感をとり戻し

堺　市　矢倉　五月
読み易い字が一番の良い字です

松江市　三島　淞丘
窒息死しそうで酒と旅に出る

橋本市　石田　隆彦
助手席で手綱を絞る仮免車

松原市　玉置　重人
助手席は居眠りハンドルは無口

加東市　黒崎美紗子
忘年会カラオケビンゴ欲も出る

岸和田市　井伊　東吉
武士道を知らぬ大臣経営者

大阪市　太田としお
軽なった大統領も大臣も

相生市　村木　信子
雑音も多恨も溶かす里の風

高知市　小川てるみ
路地裏の風が暮らしを匂わせる

鳥取市　中宇地秀四
ご都合で良くも悪くもなる記憶

豊中市　安藤寿美子
お賽銭の効き目おみくじ吉と出る

弘前市　福士　慕情
検診の度に身長減っている

和歌山市　田中　すず
読み捨てごめん私に用のないチラシ

西宮市　緒方美津子
泣き寝入りした児を風が撫でてくれ

鳥取県　斉尾くにこ
化粧せず良くぞ男は生きてゆく

三田市　阪本　藤朗
御仏の臍に親しみ湧いてきて

大阪府　米澤　俶子
絞り出す知恵涸れました文珠さま

美作市　小林　妻子
ワンカップとお線香です一周忌

藤井寺市　高田美代子
ひたすらに生きてなんにも残らない

橿原市　居谷真理子
美しい下着をつけた日の背骨

大阪府　澤田　和重
正直な人で大きな波立てる

倉吉市　野口　節子
賞罰も無いが薬と縁もない

唐津市　坂本　蜂朗
宮仕え済んで所在のない尻尾

立川市　柏野　遊花
雑用に明け暮れ忙しい自由

鳥取市　夏目　一粋
帰る家あるから今日も生きている

柏　市　河野　桃葉
児を守る心臓鉄で出来ている

高槻市　富田　美義
願いごと現状保全と書いておく

美祢市　安平次弘道
まな裏にいつもあるのは無神論

唐津市　市丸　晴翠
人生の終え方を今修行中

羽曳野市　徳山みつこ
吊るされて渋柿株をあげました

京都市　都倉　求芽
どの種も土を信じて土の中

弘前市　今　愁女
偽装ない自家菜園の野菜食む

東かがわ市　川崎ひかり
いつからか身に付いてきた世辞笑い

西宮市　坪井　孝一
靴ぬいで妻のレールに乗り換える

鳥取市　岩崎みさ江
正直におなりなさいと言う鏡

茨木市　藤井　正雄
よっぽどの事か無口が叱えている

富田林市　片岡智恵子
リハーサルの無い人生の夫婦箸

四條畷市　吉岡　修
成人よバトンタッチを受けてくれ

豊中市　松尾美智代
好きな事コツコツと石を積む

大阪市　井丸　昌紀
アリを真似鳴けなくなったキリギリス

堺　市　志田　千代
クーリングオフ出来なくなった拾い猫

鳥取県　谷口　次男
ストライク投げるエースが消えた国

和歌山県　森下よりこ
泣いているのにそっぽ向いてる白い月

和泉市　西岡　洛酔
満たされる元気鰻の匂い嗅ぐ

大阪市　神夏磯典子
行き着いたとこは鍋焼きうどんなり

大阪市　萩原　大朔
冷笑を浴びても主義は揺るがない

富田林市　中井　アキ
ライバルと目線同じにして歩く

堺　市　奥　時雄
重厚に見えた口下手だけの人

武蔵野市　亀井　円女
友はみな相談もなくあの世ゆき

羽曳野市　森下　一知
肩書きの消えた名刺に潮が引く

鳥取市　土橋　睦子
寄せ鍋にそっと入れてる残りもの

大阪市　田中　滋郎
風よりも星になりたい私です

和歌山市　福本　英子
携帯ラジオ非常袋で電池切れ

大洲市　中居　善信
茶飲み友これはおまけの恋だろう

尼崎市　山田　耕治
わが服を買うにも妻のあとにつき

大阪市　吉内　福世
数々のドラマを癒すルミナリエ

吹田市　太田　昭
沈思黙考紫煙見詰めている詩人

鳥取市　山宮　愛恵
公民館の湯のみ漂白しておこう

奈良市　岩本　浩二
妻の顔チラと見上げて干すお猪口

東大阪市　笠井　欣子
闊歩した自慢の足にサロンパス

誹風柳多留一一篇研究 30

伊吹和男・山田昭夫
増田忠彦・山口由昭
小栗清吾
清　博美

204　**御めかけのおのれをみるハ作るうち**

伊吹　お妾が自分のことを見ているのは鏡に向って化粧をしている時だけで、あとは他人のあら捜しに、その持っている時間のすべてを費やしている。

　御妾が何をつげたかしくじらせ　四30

小栗　賛。「己れを見る鏡」など仏教の教えにでも出て来そうな言葉ではある。

清　賛。

205　**柳ばし出て十分にろをつかい**

伊吹　柳橋の船宿から猪牙に乗っての吉原行き。狭い神田川から柳橋の下を潜り、川幅の広い隅田川に出ると、艪を十分に使って漕ぐことが出来るようになる。例句のぐれりぐれりは、物が次々に変わってゆくさまを表す語である。

　柳はしくれり〳〵とこいて出る　明五梅3

山口　賛。それまで竿を使っているのだろうか。

小栗　賛。何がおもしろいかよくわからぬ。「十分に」で、流れに逆らって上流へ（北へ）ととれると、少し「からくり」になるのだが……。

清　遊客のはずんだ気持ちが裏にある。

206　**文覚があるきをすると伊藤いひ**

山田　文覚は元北面の武者・遠藤盛遠。彼は十八歳の時、渡辺渡の妻・袈裟御前に横恋慕して、誤って殺害して出家。その後、後白河法皇に荘園寄進を強請して伊豆に流されたが、そこで、やはり伊豆に流されていた源頼朝の知遇を得た。伊藤は伊豆の豪族・伊東入道祐親のことで、頼朝は彼の屋形で、祐親の監視下に置かれていた。

　ある時、文覚が後白河院の院宣を持って、頼朝に平家追討の挙兵を促し来たことがあり、それを察知した祐親は「文覚が歩きをする」と云っただろうという穿ち。歩きは「①代官所・名主（庄屋）や町役人の命を受けて使い走りをする者」（「江」）。

　薄墨を持て文覚伊豆へ来る　三九17

清　賛。

207　**女房ハ上るり本をほんにする**

山田　女房は浄瑠璃の話を本当の話だと思っている。他愛もないと云ってしまえばそれまでだが、今だって、ドラマや小説を現実と混同している受け手が結構いるし、昔だって、『更級日記』の作者・菅原孝標の女は、『源氏物語』を「后のくらひも何かはせん」と読みふけったというから、女性はもともと夢想家が多いのかも知れない。

あいそうにいつたを下女ハ本にする　一一8

増田　賛。また事件種も多かった。

清　賛。

208　**雪隠の道で吉原めしをたき**

山田　吉原では、客用の小便所は二階にあったが、大便は階下にあった雪隠を、遊女や他の者たちと共用だった。雪隠に隣接して湯殿が設けてあり、遊女たちはそこで事後の清掃をした。

主題句は、その雪隠へ行く道筋で飯を炊くというのだが、吉原での直接的な資料は未見だが、『大坂新町細見之図・澪標』（宝暦七年刊）に新町の廓の俯瞰図が数枚掲載されているが、それを見ると、何れも台所の奥に湯殿と雪隠が配置されている。新町の場合、一階に座敷などもあり、吉原とは違う構造になっているが、少なくとも主題句の傍証にはなるだろう。

廊下にて逢ふ右大弁左小弁　六三15

清　賛。

209　**深川ハ蚊やをまくるとすぐに舩**

山田　深川は「水路が、ほぼ碁盤縞のごとく縦横に通じていた」（『江戸深川遊里志』）。そのため、深川では舟を利用する遊客が多く、またそれが通とされた。

深川もかごて行てハやぼな道子　明四義4

だから、主題句のように、廓の目の前が舟ということになる。

玄関から舩をよんでと門ンへいひ　七18

小栗　賛。湿地帯で蚊もさぞかし多かったでしょうな。

清　同。

210　**ねい〳〵と四五人帰る正洞寺**

山田　「ねい」は「返事のことば。（略）武家の中間、奴のことば」（「角川古語」）。「ねいねい」はこの「ねい」が重なった語。

紅葉の名所・正灯寺で、草履取り共が「ねいねい」と云って帰った。主人たちは近くの吉原へ行くので、先に帰されたのである。

皆供をかへすに評義一ッけつし　明三梅3

清　賛。

211　**堺町ずかゝ通る角力好**

山田　日本橋堺町には江戸三座の筆頭・中村座があり、隣の葺屋町の市村座とともに歌舞伎ファンにとってはメッカの如きものだった。

あのやうにのめって行ク かさかい丁　明三松3

ところが、芝居などにとんと興味のない角力好きにとっては、通りに出ている絵看板などは見向きもしないで、「ずかずか通る」だけ。

山口　賛。スポーツ派と演劇派は今でも二分されているかもしれません。男性派と女性派とも。

清　賛。人それぞれの趣味。

212　**年明が一人あはゝが五六人**

山田　吉原の年季奉公は「苦界十年、二十七あけ」といわれるように、およそ二十七、八歳で年明けとなる。遊女たちは、年が明けたら一緒になろうなどと持ちかけ、それを真に受けてせっせと通う遊客数多。しかし、所詮は一人しか一緒になれないのだから、残りの四五人は「あわわの三太郎」つまり馬鹿な目に合うのだ。

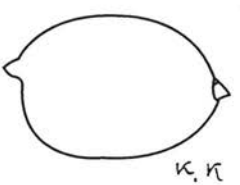
四五人をべらほうにして請出され　八16

清　賛。

共選欄

檸檬抄

（薫風書、カットとも）



「火」　鈴木公弘選

ほんのりと残り火ゆれるクラス会　大阪狭山市　矢野　梓
線香花火の今どの辺り我が命　寝屋川市　岡本　勲
むっつりと火種抱えている怖さ　雲南市　菅田かつ子
火も水も覚悟の切符握りしめ　松原市　玉置　重人
チャックした胸に火種をほうり込む　鳥取市　山宮　愛恵
来るものはみなあたためる火の祭り　松江市　柏井日出子
火傷にも懲りずモーションかけている　神戸市　山口　光久
思慕抱いて火の橋渡るとき女　奈良県　渡辺　富子
何もかも忘れて燃える火と踊る　三田市　石原　歳子
早咲きの女が抱いた火のドラマ　池田市　北出　北朗
プロポーズろうそくの火に騙された　神戸市　田中　章子
ぶり返すこともわきまえてる下火　倉吉市　山中　康子
火と燃えた日もあったのに若かった　尼崎市　長浜　美籠
火の点かぬマッチになって冬籠り　河内長野市　山岡冨美子
胸の火をもやす恋などもう一度　八尾市　村上ミツ子
便利さの裏に隠れた火の恐さ　神戸市　山田婦美子

「火」　西口いわを選

火の色になってごらんと声がする　紀の川市　辻内　次根
火を焚くと知らない人も寄ってくる　愛知県　早川　遡行
何もかも忘れて燃える火と踊る　三田市　石原　歳子
羽化近い少女火傷に憧れる　八尾市　宮西　弥生
人肌の燗で火傷をしてしまい　尼崎市　山田　耕治
細い火でじっくりおでん母の味　吹田市　大谷　篤子
蛍火のようなはかない恋だった　豊中市　安藤寿美子
評論家火の粉被らぬ位置で吠え　札幌市　三浦　強一
おっさんと呼ばれていても活火山　神戸市　山口　光久
ほとぼりが冷めて備長炭の音　枚方市　丹後屋　肇
火柱のラッシュアワーの中に居る　鳥取市　武田　帆雀
火になって行こう土俵も後わずか　東かがわ市　木村あさら
火の国の妻をもらって敷かれてる　唐津市　山口　高明
わたくしの笑顔火種にして欲しい　堺　市　矢倉　五月
燃えるもの燃えないことが身にたまる　西宮市　牧渕富喜子
ここで火を吐かねば朽ちる秋の草　大阪市　川久保睦子

灼熱の恋が伏せ字をあぶり出す　和歌山市　武本　碧
消費税値上げ口火を誰が切る　横浜市　金森　徳三
ノーはノー妥協許さぬ火の気性　大洲市　中居　善信
点火までたった五秒が辛い朝　大阪府　西川　冷子
衆参のねずみ花火はどちら向く　大阪市　福岡　末吉
評論家火の粉被らぬ位置で吠え　札幌市　三浦　強一
復元の住居に欠けている火の気　海南市　三宅　保州
窯に火を入れると父の目が変わる　和歌山市　福本　英子
火のついた暖簾老舗にある驕り　羽曳野市　安芸田泰子
金という魔物火種をまき散らす　河内長野市　針生　和代
火の記憶消えぬ昭和の深い傷　東かがわ市　川崎ひかり
議定書に野焼きのけむが詫びている　香南市　桑名　孝雄
跡取り居なくなり火を消してしまう　寝屋川市　冨山ルイ子
鎮火して野次馬の背が寒くなる　弘前市　高橋　岳水
火の消えたかまどに残る母の影　広島府中市　馬場　利子
火の鳥も今は和食がいいと言う　羽曳野市　吉村久仁雄
火を点けてくれればわたしまだ燃える　香芝市　大内　朝子
すぐカッカするので火の気お断り　河内長野市　坂上　淳司
目から火が出た父さんの平手打ち　池田市　上嶋　幸雀

秀　句

焚火する冬のニュースが寄ってくる　美作市　小林　妻子
火事場から持ち出したのは枕だけ　東京都　長谷川康子
解禁の漁火待っている地酒　三田市　堀　正和

軸　吟

順調にもえだした火の風当たり

火を渡る顔パソコンのピエロ達　米子市　林　瑞枝
地球儀を回せばここも火の匂い　松原市　玉置　重人
胸に抱く火は清姫に負けませぬ　和歌山市　松原　寿子
火の記憶消えぬ昭和の深い傷　東かがわ市　川崎ひかり
息子等よ人間の火を焚きなさい　福岡県　林　さだき
女から火中の栗をねだられる　海南市　堂上　泰女
どうせなら火の粉よ僕に降ってこい　弘前市　髙瀬　霜石
五十年前の火種に炭を足す　唐津市　坂本　蜂朗
火気厳禁ただいま燃えている私　海南市　三宅　保州
生きている限り絶やさない種火　尼崎市　長浜　美籠
過ちは繰り返すまい火を拝む　八王子市　播本　充子
わたくしをずっと温めているトロ火　寝屋川市　籠島　恵子
燎原の端でくすぶる火となろう　大阪市　川端　一歩
カラカラの亡父の柩が火を招く　神戸市　伊勢田　毅
女の火今日は家族に豆を煮る　橿原市　居谷真理子
残り火を写経の中に埋め込む　三田市　北野　哲男
カンテキで焼いた秋刀魚はエリートだ　東大阪市　笠井　欣子
火柱の中にわたしのペンがある　紀の川市　木村　徑子
合掌の手に包みこむいのちの火　橋本市　石田　隆彦

秀　句

一隅を照らし続けて来た弱火　弘前市　斉藤　劦
一幅の枯山水が火種消す　大阪市　神夏磯典子
褒め言葉同学心を点火する　柏　市　河野　桃葉

軸　吟

火のように走ったことも懐かしい

餅

青戸　田鶴選

女房も餅も時にはふくれ出す　政勝
丸四角餅の形もにしひがし　章司
新品の杵が弱いと古い臼　照彦
賞味期限切れた餅にもある粘り　圭一郎
臼で搗く餅はにっこりVサイン　一花
真空のお供えがあり焦らない　ふみ
ふる里の餅に繋がる核家族　一知
神事に行事に餅が主役と言う歴史　俊子
ペッタンコ餅つく音が消えた路地　のり子
餅つきを行事に決めた幼稚園　奮水
体形をわすれて食べた餅の数　那珂子
家中でした餅つきのなつかしい　照子
餅を焼き顔寄せ合った家族たち　(岩)和子
餅好きの父の活力労働歌　すず
母恋えばほんのり香るよもぎ餅　富子
ふる里の餅がふくれる夜勤の灯　可住
脱サラの屋台を飾る餅の花　恭昌
パックから出された餅の深呼吸　(安)泰子
寒稽古最後に食べる鏡餅　淳
餅つきの音がだんだん遠くなる　ミツ子
古里の雑煮へ帰心矢の如し　岳水
雑煮餅競って食べた若かった　英子
山の味食べさせたくて栃拾う　茶子
だんごよりプライド高い餅である　(志)千代
初孫の安産願う亥の子餅　愁女
政事　餅は餅屋でいいのかな　滋郎
餅を焼く火鉢の横にいつも猫　裕之
パソコンの上にも飾る鏡餅　(久)千代
餅搗きの選手になった学園祭　帆雀
食べ盛り餅がふくれるまで待てぬ　和郎
介護疲れをお餅で癒すティータイム　(北)絹子
餅搗きが自慢夫の腕が鳴る　さだき
餅を搗くウサギの齢は幾つかな　美義
餅を搗く腰に年季が入ってる　章久
栃餅が総理大臣賞になる　螢
餅代の多い派閥へ乗り換える　北朗
信濃路で食べたらうまい五平餅　藤朗
餅を焼くご先祖さまも降りてくる　霜石
餅をつく仕事納めの町工場　佳
ほし餅に津軽の味が詰めてある　久仁雄
餅膚の名横綱を君知るや　銀波
かびた餅老母は捨てようとはしない　順風
戦争はもうしたくない鏡餅　日枝子
人　重人
迷わずに餅は餅屋に任せよう　妻子
地　正雄
寝たきりに一口ごとにちぎる餅　福士慕情
天
餅を搗く倅男に見えてくる
軸
変わらない母の雑煮がある平和

セーター

森　茜選

着古しのセーター温み忘れない　(岩)和子
次の子に譲るセーター編みかえる　勝視
赤いセーター還暦の妹に　ミツ子
還暦間近赤いセーター買いました　霜石
セーターの重ね着をする原油高　玄也
我流でも子は喜んで着てくれた　髙栄
終戦にセーターひとつ姉とぼく　としお
つぎはぎのセーターだった鬼ごっこ　強一
セーターを編む手が夢をふくらます　(川)洋子
セーターを何度変身させた亡母　(岩)玲子
極寒へ地蔵に着せる古セーター　鐘造
妻の手のセーター温い航海士　日出子
出稼ぎの夫へセーター編み急ぐ　岳水
湯たんぽが着てくれている古セーター　みつこ
セーターを被って孫の獅子神楽　(稲)洋
胸で着たセーター今は腹で着る　大朔
セーターにGパン年始の若い客　倫子
セーターふんわり母はばんなり喜寿祝い　とし子
セーターをほどき湯のしをしてベスト　喜子
大慌てしてセーターの後ろ前　北朗
豹柄のセーター目立つおばあちゃん　公誠
あのセーター着るとスコアがいいんだよ　修

デュエットのセーター照れる年となる　東吉
お揃いのセーターあれが絆かな　四郎
セーター編み終る頃春が来る　政勝
子がくれたセーター三年目の元気　可住
少女から羽化セーターの胸の線　寿美
目立つセーター着せて子供と遊園地　庸佑
母いつもセーターの袖まくってる　シマ子
かぎ針のセーターらしくなる不思議　順風
編んでいるセーター男物らしい　准一
自分へのご褒美赤いセーター編む　雅枝
贈られたセーターに顔埋めてみる　時雄
縄編みのセーターがもう重すぎる　(志)千代
メンズセーター編み上げ妻になりました　扶美代
知らぬ間にペアセーターの車間距離　碧
真っ白のセーター体しゃんとする　一風

佳

セーターに母の余生が編んである　和郎
セーターが包んでくれた恋だった　日枝子
セーターを買いますイチローの謙虚　充子
セーターを着たら羊が寄ってくる　明子
肘当てに母の魔法がふせてある　朝子

人

お揃いのセーターで来た良い知らせ　典子

地

セーターへ女を添える花ビーズ　泰女

天

編みかけたままセーターも歳をとる　福本英子

軸

遠い日の匂うセーターほどいてく

こだわる

高橋　宏臣選

九を避けて十日に記す差出日　賢治
塩味にこだわる旬の焼魚　四郎
ひとつまみというこだわりを継いで主婦　可住
おやじから字画に凝った名を貰う　修
なんとなく研がずにおれぬ無洗米
洗濯物干す順番が母にある　愁女
職人がこだわるミクロの町工場　茂代
左から踏み出し決めて朝の靴　愛論
春の手紙花の切手を貼って出す　彩子
匠の目まだ納得をしていない　強一
国境にこだわりがある世界地図　重人
六か国拉致にこだわり蚊帳の外　徳三
お雑煮は丸か角かで揉めている　遡行
どうしても買う気になれぬ握り飯　キミヨ
風水を信じ身動きままならぬ　みつこ
別れ際あのひと言が気にかかる　百合
こだわりを捨てても尻尾付いている　章司
銘柄にこだわりビールからの宴　かずみ
何もせぬ父がこだわる鍋奉行　銀波
八月六日へこだわりましょう広島よ　(奥)五月
笑顔だが拳がノーと言っている　善信
マウスにもこだわりがあり主義主張　正和

房枝

古い傷忘れた頃につつく妻　蜂朗
勝ったのか負けてしもたか口入れる　奮水
小さい小さいこだわるなよと日本海　くにこ
九条にこだわっている自衛権　螢
ひきつった顔で握手をされている　忠
記念日はネクタイきっとストライプ　裕之
こだわりのネクタイ誰も気が付かず　大朔
約款を天眼鏡で読んでいる　藤朗
法要の席次を伯父が譲らない　慕情
指定席とられ一日鬱になる　隆彦
前例を盾に役所の石頭　北朗
本籍にこだわる祖母の侘住い　正雄
酒は灘鯛は明石と小うるさい　公誠
こだわりの夢は下絵のままに錆び　美義
口の怪我髭にこだわりこそばゆい　順風

佳

勝ち方にこだわりがあるエンブレム　充子
論戦の骨にこだわる老いの意地　帆雀
ボブカットこだわり続け半世紀　徑子
口紅の濃さにこだわる立鏡　伊津志
卵焼きまだまだとフライパン　古拙

人

遠回りしてもパンならあのパン屋　のり子

地

表札が歪むただですまされぬ　日枝子

天

哲学といってもいいほどの歩幅　高瀬霜石

軸

わたくしのこだわりのあるゆでたまご

初歩教室

題 ― 鬼

三宅保州

句とはあげくの果てのもの

川柳六大家の一人川上三太郎は「句とは所詮あげくの果てのものである」という名言を遺されています。

この意味は二つあって、一つはさまざまな経験を積んだ上でなくては川柳はできないという修行論だと言われています。もう一つは「ある事象をそのまま羅列しても川柳にはならない。それは単なる材料であって、句とはそれから先を作者がどう展開させるかにある」と喝破されています。このことは当欄でも度々述べてきた、事実等の説明や報告に終わっては駄句であり、そこに作者の思いや訴えを詠み込むことにより、佳句が生まれるものであるということと相通じるものです。

「あげくの果て」の佳句を常に目指したいものです。

【説明調の句】

次の四句は前述の「あげくの果て」までの事象の羅列のみの嫌いがあります。それを作者はどう思われたか詠みたいものです。

例えば次のように作者の思いを詠みたい。

原 ひいらぎの葉とげいやや と鬼はにげ　俊子

添 柊が苦手な鬼を憎めない

原 福は内鬼に豆投げ魔手祓う　ミヨノ

添 節分の父鬼になりはしゃいでる

原 鬼瓦大きな屋敷見張り番　福世

原 小さいが威厳を保つ鬼瓦　智加恵

【子育てを詠んだ句】

原 子育ては仕事の鬼の顔で生き　(河)洋子

添 躾には鬼にもなっている育児

原 末の子に鬼にはなれず甘い顔　弥生

添 末っ子にだけはとっても甘い鬼

原 子の躾時には鬼になる育児　義章

原 心にも鬼がちらつく子育て期　実千代

次の句は佳句です。

原 授かり物だから鬼にもなる躾　幸

【老いを詠んだ句】

原 鬼さんも八十五歳杖をもつ　勇治

添 金棒を杖に持ち替え鬼も老い

原 心の鬼老いてやさしくなりました　實

添 老いたのか心の鬼もおとなしい

原 身の内の鬼もまあるくなる齢　千代子

【添削・批評句】

次の三句は字余りまたは字足らずです。

原 鬼たちは年賀よりも身繕い　正二

添 身繕いしつつ節分待つ鬼よ

原 鬼ごっこあの子に追われた日の記憶　大朔

過去形にすると「日の記憶」は不要。

添 好きな子と追って追われた鬼ごっこ

原 鬼は内思わず本音で豆をまき　直

添 鬼は内思わず本音言うて撒き

原 人間の心が鬼になるこわさ　健柳

「こわさ」とストレートに詠まず。

添 人間の心に鬼が棲んでいる

原 邪気が有る防衛省の接待に　紀雄

新聞の見だし的な時事吟より息の長い句に。

添 邪気棲んでいるのだろうか永田町

原 鬼でさえ涙あるのに頑固爺　(吉)節子

頑固爺を悪者に詠まないように直すと。

添 頑固爺だけど鬼の目にも涙

原 おしゃべりな雀をにらむ鬼瓦　(畑)節子

優しい発想に変えてみると。

添 雀とも遊んでみたい鬼瓦

原 鬼ごっこ子供の声は塾に消え　こずえ

鬼ごっこと塾で「子供」とわかります。

添 鬼ごっこの声も途絶えた塾通い

原 今の世は鬼より怖い食偽装　文代

添 鬼よりも怖い偽装がばっこする

原 無理を言う断る妻は鬼の顔　弘泰

添 無理聞いてくれない妻は鬼に見え

原 出稼ぎの父ちゃん守る鬼瓦　(髙)洋子
添 出稼ぎの留守守ってる鬼瓦
原 鬼のつら内には見えぬ心あり　稔
添 外見で鬼を判断してしまう
原 鬼カワラで金持の家見分けられ　綾乃
添 金満家らしいとわかる鬼瓦
原 愛されて母は呼ばれる鬼ババア　としお
添 鬼ばばあと言いつつ母に甘えてる
原 開拓を鬼でしっかり遣り遂げて　清
添 開拓の鬼と言われて遣り遂げた
原 仏顔した鬼がある世知辛さ　みち代
添 俗世には仏の顔の鬼がいる
原 食べた豆鬼もびっくり日本産　那珂子
添 外国産の豆にびっくりしてる鬼
原 おにはしょと可愛い声に鬼が寄る　律子
添 おにはしょとの幼児に鬼も目を細め
原 鬼と呼べ仕事一筋わが命　孔一
添 仕事の鬼と呼ばれて悔いのない命
原 鬼は外すぐ舞い戻る喜寿近し　貞月
添 鬼は外すぐ舞い戻るおじいちゃん
原 職就いて鬼とつき合う術を知る　さだき
添 職に就き鬼とつき合う術も知る
原 こわいのは鬼ではなくて唯の人　たん吉
添 こわいのは鬼の振りした小悪人
原 えびすの面まだまだ売れぬとことわられ　瑛子
添 恵美須の面欲しくてたまらない鬼よ

【少し工夫すると佳くなる句】

原 鬼の首取った男の胸算用　絹子
添 鬼の首取った男の胸の内
原 一人住み鬼と仲良く出来そうだ　きぬ子
添 独り住み出して鬼とも仲良しに
原 父の手の温みが今も節分会　夢
添 父の手の温みが遺る節分会
原 手の平で舞う鬼に飽きて来る　利子
添 掌で舞ってる鬼も飽いてくる
原 来年は鬼が笑うとすぐに来る　ちづる
添 鬼笑うその来年はすぐに来る
原 鬼の首取った話を酔うとする　靖鬼
添 また鬼の首を取ったと酔うた父
原 やさしさを鬼面で隠す天の邪鬼　宇乃子
添 やさしさも鬼面で隠す天の邪鬼
原 せめての追い出す鬼にちゃんちゃんこ　昇
添 せめても追い出す鬼へちゃんちゃんこ

【佳　句】

鬼やらい窓の一つは開けておく　映子
溜息をつく度鬼が目を覚ます　幹子
小遣いが切れると鬼も欠伸する　像山
定年後鬼もせっせとボランティア　乃りこ
女です仮面の下に鬼も飼う　雅代
年金の先行き鬼も笑えない　裕之
街中を紫色に変える鬼　柳歩
仲間同士殺し合ったりしない鬼　堅坊
神の目の死角で鬼と手を組もう　信子
鏡見て鬼は哀しい顔になる　次根
身を固め男は外で鬼になる　隆彦
大胆に生きる女の鬼はらい　美紗子
鬼ごっこ徘徊の母みーつけた　ヒロ
鬼の面入れた姑の小引出し　かずお
鬼は外拾った豆がおやつです　りこ
鬼さんも入れてあげよう焚火の輪　美智代
福は内鬼にも少し道をあけ　光子
鬼の目の涙をそっと見てしまう　房江
鬼の目に涙か枕濡れている　起世子
鬼にも蛇にもなって独りの舟を漕ぐ　徑子
波瀾万丈鬼千匹を飼い慣らす　イセ

【今月の推せん句】

人間が好きで騙されやすい鬼　福井菜摘
悪い人間も善い鬼もいるという風刺。

かごめかごめいつも私は鬼のまま　小林わこ
大人の今もかごめの鬼役ばかりという比喩。

豆撒きに鬼もためらう落花生　森田麗
お菓子から果てはコインまで。鬼も面食らう。

【私の句】

人間の面を被ると鬼になる

（登載洩れの方は役員が添削して返送します。）

秀句鑑賞

同人吟　都倉求芽
―1月号から

年末の一番雑用が重なる時期にこの大役。正直、些か息がとまりそうになりましたが、気を取り直して取り組みました。

といった事情でゆっくり纏まった時間での作業でないので多少のずさんさはお許しのほど、はじめにお断りとお詫びを申しあげておきます。

さて川柳と申しますと人情の機微、家庭のスケッチ、自身の心情などもさることながらもう一つの本質として社会風刺、行政批判もまた大事な要素でもあります。今回はなるべくその方向で見せていただこうと思います。

よろしく。

わたくしのダンスに欠かせないあなた

太田　扶美代

平成の鹿鳴館でおねだり妻がダンスだのゴルフだのと、うつつを抜かした挙句お縄に。上を事務次官に、下をわたしに置き換えるとその構図がみえてきます。

大臣の友人の友人がアルカイダ

板東倫子

言うことにも事欠いて現職大臣がアルカイダが友達だと。国会を居酒屋だと思っているのでしょうか。そして、せっせと自衛隊や武器を送り出しているのです。

消防署ひとり暮らしを知っている

高島啓子

消防署に限らず役目上、所管区域の情報全貌を把握しておくことが必要な役職が、大事なことには違いありませんが、それを悪用して個人的邪悪な欲望を満たすために侵入する、そんなニュースが相次ぐ怖い世の中になってきました。ご用心ご用心。

パソコンのマウスにあんたの年やでと

安藤寿美子

今年は干支の筆頭、ネズミ年。それでパソコンのマウスに檄をとばしておられる寿美子さん。いや、お若い感覚に恐れ入りました。

丘の上風車仲よく休んでる

森茂美

石油エネルギーの浪費による地球温暖化。これだけやかましく言われるようになって、ようやく太陽熱だの風力発電だのに本腰を入れ始めたところ。しかし技術的にはまだまだのようです。発電風車も風向きとかに対応できず休む日も多いとか。あまり仲よく休んでもらっては困るのですが。

野に悪を放つ規制の緩和策

三好専平

「規制緩和」誰やらのこの掛け声で始まった大店法（大規模小売店舗法）が改制されて、地方の商店街へ大企業が大攻勢をかけてきた。おかげであの街、この町にシャッター通りが続出。製造業界でも下請けや孫請けが徹底的に泣かされている。まさに弱肉強食。いまや日本は資本主義ではなくて「大資本主義」になってしまった。それに競って群がる消費者も悪い。おっちゃん、おばちゃんのお店がなつかしい。

シングルライフやがて墨絵になってゆく

吉田あずき

世の中なんでもかんでもフルカラー。ショッキングカラーとかがもてはやされて落ち着きがなくなってきた。しかし、あずきさんはひとり暮らしの楽しみを墨絵の世界に求めて老後の日々を。まことに羨ましいかぎり。

ドナーとの半分ずつの命持つ

岸本孝子

いのちに関わる病気でも臓器を提供して頂くと助かる場合があります。日本はまだその該当範囲に制限が多いそうですが、外国には許容される臓器が日本より多種にわたる。

これこそ国際的に協力すれば。外国で手術をうけるために街頭で資金カンパの姿を見なくてもいい時代が早くくれば、と痛感します。

欲しいのはやさしい言葉の福袋

神夏磯典子

激動で殺伐。まったく潤いのなくなってきた世相にひと時の安堵を共有する正月三が日。しかしその正月さえも百貨店などはカネ儲けにひた走る。競争意識まる出しで福袋の中身までちらつかせて年末から宣伝に憂き身をやつす。そしてブランドに目のない女性たち。しかし典子さんはやさしい言葉こそ福袋の中身にと訴えられている。

生きるため食べた野草が今グルメ

安芸田泰子

戦中戦後の食糧難の時代、芋のつるなどまだ上等、いろいろな野草をあやふやな知識で食べ分けていた。それが飽食の今、健康とダイエットのためもてはやされてグルメとか。これをしも歴史は繰り返す、というのでしょうか。

年金という財産を持っている

黒田能子

なんのかんのと言っても私たちは今、年金のお蔭で生活している。額はともかく、とにかく年金はありがたい。ただ財産というにはあまりにも心もとないが、しかし、ありがたい。

ユートピア都会にあると信じてた

北野哲男

帰農する人が最近増えているらしい。青雲の志を燃やして勇躍都会へ出たものの、ユートピアはそこにはなかった……。

反対に私ども都会育ちの者にとっては自然の山野にこそユートピアを感じますが。最近、都会から限界村へ引っ越して素人の田畑作りに話題になった若者がいましたね。

月面に映る地球はガラス玉

森田明子

わたしもこの映像をみた瞬間、そう思いました。青い球体に白い雲、美しいには違いないが、なにか夢のない、奥行きのない、まさに巨大なガラス玉。言い得て妙、と思います。

言行不一致トップも政治家も

小川てるみ

一番最後の最後までできてこの句に当たった。今の世の中、まったくこの句のとおり。口先だけで人の先を行こうとしているものが世界を牛耳ろうとしている。危ない、危ない。人を見る眼がほしい。

ほかのジャンルから

残り火が揺れる私はまだ女

園山多賀子

寒い日はときどき開ける玉手箱

大内朝子

間延びした話で和む差し向かい

中井萠

最期までお付き合い有難うございました。

秀句鑑賞

―水煙抄

―1月号から

水野黒兎

水を買う暮らしを笑う里の母

岡田幸生

自然の水の豊かな地方から見れば、ペットボトル入りの「名水」とやらを買う都会の生活は、哀れとも滑稽とも思えるのでしょうね。

まず度胸要るなと思う英会話

木村忠義

日本人は文法を気にかけるあまり、なかなか会話の中に入り込めない。会話上達のためには先ず恥ずかしがらずに実践ですね。

少年の自転車風をひとりじめ

安田忠子

颯爽と風を切って自転車をこぐ少年に、少女時代の自分を重ねてみる。ああ青春。

元の歩に戻りたがっていると金

桑名孝雄

せっかく昇進したのに責任だけ増して、残業代もつかず、上下の板挟みになるし…。

路地裏にまだ残像がある昭和

三浦強一

騒がしい街も幹線道を一筋はずれると、懐かしい昭和の雰囲気の残る路地がある。平屋建て、無舗装道の土の匂い、釣り忍、群雀…。

帰り花昔風流いま不気味

萩原大朔

冬の季語として俳句によく取りあげられる帰り花であるが、こう頻繁にあちこちで見るとは、異常気象のせいではないかと不気味。

木枯しにおでんの屋台避けられぬ

早泉早人

男の寄り道の口実は無数である。タイガースが勝っても負けても、夏の酷暑も、にわか雨も。ましてや木枯しの寒い夜のおでんの香に勝てる男がいるものか。いい友がいて、いい酒がある。夕ご飯の支度をして待つ奥様。

おとなりもそのお隣もおとしより

岩崎實

日本の各地の町でお隣も、その隣も、そのまた隣も……ああ切りがない。

にんげんを解く公式を知りたいな

谷川勇治

とかく複雑な人間や人間社会を理解する公式はないものか。掛けて割って、微分積分して補助線を引いて。おやおやもっと不可解。

救急車すぐ近くまで来て止まる

寺井柳童

深夜のサイレンは遠くまでよく響く。わが家が呼んだ救急車ではないのに、なぜか胸騒ぎがする。キキッと近くで停車の気配。あの方に緊急事態発生でなければいいが……。

動じない石とゆっくり話し合う

田中すず

路傍の石は何十年と動じることなく、静かに世の転変を眺めている。その悠然たるさまは哲学者めいている。そうだ、あの石とゆっくり話し合ってみよう。そんな作者にエール。

宇宙論読み味噌汁を掻き回す

源田啓生

壮大な宇宙を考える一方で、営々として日常生活を続けている。味噌汁を掻き回すのもまた、宇宙の中の人間の深遠なる生の営み。

食品表示よりも自分の舌と鼻

長島亜希子

マータイさんも褒める賢い暮らしぶり。

年金で今度は赤い靴買おう

渡部好栄

年金生活を明るく前向きに生きる作者に拍手。さあ赤い靴をはいて旅に出ましょうか、それともホテルでフレンチでもいかが。また孫の玩具に化けてしまわぬうちに、ね。

エッセー

俳句と川柳の仲

仁部四郎

私は、唐津市立成和小学校の校区内に住んでいて、成和公民館が毎年十一月に開催する文化祭のプログラムにある〝川柳クイズ〟を担当して五年ほどになる。

昨年は趣向を少し変えて、「五・七・五で十二月」ということにして、『きょうの一句』(村上護・新潮文庫)と、『現代川柳必携』(田口麦彦・三省堂)をタネ本にしてクイズを作った。

先ず、一月と二月の句をあげてみる。

一月Ⓐ(1)かけ二十数名初詣

㋐社運 ㋑黒字 深見けん二

Ⓑお元日(2)るところへ座らされ

㋐座 ㋑決め 麻生路郎

二月Ⓐバレンタインの日か(3)は傷だらけ

㋐少年 ㋑中年 稲垣きしの

Ⓑ春遠く二月は(4)の死に易し

㋐人 ㋑歌 高橋まゆ子

私の狙いは、俳句と川柳との間に通い合う味への理解を促すことにあって、次にあげる八月の句などは、そのいい材料になると思い入れをしていた。

八月Ⓐ八月や駅ごとに(15)棄てられる

㋐民 ㋑兵 後藤紀一

Ⓑ八月十五日まっ白い(16)盛ってある

㋐砂 ㋑飯 田向秀史

文化祭に集ってくる人々のなかには、成和公民館での俳句会に参加している人も三人五人はいるが、県内での川柳会に参加している人は一人か二人である。昨年までの〝川柳クイズ〟は、江戸の川柳や現代の川柳が材料であり、なるべく平明なものを選んだから反応もハッキリしていた。川柳の味の或る部分はかなり判ってもらえたと思っている。

しかし、今年は難しかった。

割り当ての時間が30分足らずということはあるにしても説明不十分に終始した。例えば(3)は、「中年」が正解でそれだからこそ、私としては、俳句よりも川柳として頂戴したい句だということの解説が、力不足で生煮えになってしまう。

十一月の句は左記の二つだが、これはお話がしやすい。正解への挙手も多い。

十一月Ⓐ(21)に迷路をつくる文化祭

㋐校庭 ㋑教室 落合水尾

Ⓑ菊薫る(22)は忙しい

㋐十一月㋑今年の秋 谷口秋之助

十二月の句はどうだろう。

十二月Ⓐ十二月八日(23)酌みかはす

㋐同窓 ㋑同年 森田峠

Ⓑ泰然自若踏切警手(24)

㋐年の暮れ㋑大晦日 椙元紋太

(24)が㋑であることは、〝漢字づくめ〟という見当がつけやすい。〝漢字づくめ〟の句は作りにくいモノだがオモシロイという解説も通りやすい。だが、「同窓」と「同年」の意味のへだたりを「同年兵」を使って説明することになるといささか時間がかかる。

五月の句も、私としては「頂戴したい句の好例」のつもりであった。

五月Ⓐ遠足の列(9)の中とおる

㋐大丸 ㋑ドーム 田川飛旅子

Ⓑ五月かなものみな(10)をこころざす

㋐空 ㋑天 前田雀郎

「…、なんとデパートの大丸の中だった、というのがおかしい。」(村上護)というその「おかしさ」が川柳のものでもあることを伝えたかった私ではあるが、難しかった。

蛇足ながら正解をあげておきます。

(1)は㋐ (2)は㋐ (4)は㋐

(15)は㋑ (16)は㋑ (21)は㋑

(22)は㋐ (23)は㋑ (10)は㋑

■各地句会だより

川柳茶ばしら

早川遡行

平成六年七月、当時経営していた和菓子店のお茶室に於て「納涼お茶室句会」を開いたのが始まりで、以後毎月二十名ほどのメンバーが集まって抹茶を戴きながら句会を行っていました。

柳歴十年以上のベテランばかりで和気藹藹とした中にも充実した句会でした。

川柳塔へは当時の主幹であった西尾栞氏とのご縁に依るもので、この年の九月に犬山市の「サンパーク犬山」で行なわれた「市制四十周年ならびにわかしゃち国体記念・第四回お城川柳まつり」に、東野大八氏、西尾栞氏ご夫妻、橘高薫風理事長もお見えになりお世話したのが最初です。

一時お茶室句会は中断しますが、薫風氏が主幹になられてから毎年来県されご縁が深まっていき、平成九年東野大八氏橘高薫風氏の推薦を得て川柳塔同人になった時、いつか愛知にも川柳塔支部のようなものが出来ないものかと腐心したことがありますが、この時はまだ周囲の環境が整わず断念した経緯があります。

数年後所属する柳社が解散となり、主力だった数人と「川柳茶ばしら」を再発足させました。そして川柳塔社へ活動の場を移し現在に至っています。

河内天笑主幹の理解のもと数人を同人にして戴き、各地柳壇へも少人数ながら参加させて戴いて塔の一員として認められるようになってまいりました。

現在は和菓子店の経営からは退き、自宅を句会場に開放して毎月七、八名の少人数ではありますが句会を続けております。

活動は川柳に限らずお手前や柳画、時には旅行、あるいは近郊の山歩きなど少人数ならではの幅広い活動を心がけています。

ぜんざいの湯気が待ってる寒げいこ　関本かつ子

バラの字が古希を過ぎてもまだ書けぬ　片岡　文男

定年の恩師を囲む山の宿　鶴留　百合

インタビュー今日は主役の赤いバラ　飯田　秀水

歓声へ汗スッキリとご来光　吉田　幸子

美しいバラが男をもてあそび　金子美千代

いつの間に子が指図する家のこと　板山まみ子

SLが一息ついた山の駅　早川　遡行

今年度の活動で特筆すべきは、浅井長政とお市の方で知られる小谷城址での野点句会。長野県は車山高原へニッコウキスゲを訪ねてのハイキングなどがあります。

また「川柳塔まつり」では多くの同人の歓待を受け楽しい一夜をすごさせて戴きました。

翌日は奈良公園を訪ねて初秋の古都のたたずまいを心ゆくまで堪能し、来年の「川柳塔まつり」を約して帰路につきました。

川柳塔の一員としてこれからも頑張っていく所存ですのでよろしくお願いいたします。

神原　文さんを偲ぶ

平成19年12月16日没　享年86歳

浅野房子

門谷たず子さんを見送り、まだ涙も乾かぬうちに、柳友神原文さんの訃報を聞く羽目となった。昨年12月16日、文さんは帰らぬ人となられた。

私達は、女学校のクラスメートであり、川柳の仲間である。文さんは、ご主人の仕事の関係上、シドニーで10年余り過ごされていたので少し私達より遅れて川柳を始められたが、すぐ追いつかれる上達振りであった。

神戸や京都（都大路）、本社句会、西宮北口句会など句会めぐりを一緒に楽しんだ。

一昨年のある日突然文さんからの電話で「私、王さんと同じ病気になってしまったのよ」と言われた。その頃、ちょうど王監督の胃がんのニュースが報じられていた。「うそや」私は信じられなかった。

私が食べ過ぎて、胃もたれするというと、胃もたれってどんなことと聞かれる始末である。

人一倍健啖家、胃の丈夫な方とうらやましく思っていた。こんなこともあった。句会の帰り、一緒に天丼を食べた。おなか一杯になったのに、彼女に「茶碗蒸し追加しない？」と言われてびっくり。「もう入らない」というと「少食やね」と言われ、「あんたが大食いや」と返して二人で大笑いした思い出がある。

お互いに、好きなこと、思ったことがそのまま言える、かけがえのない友達であった。

その年の7月、手術をされ、経過は良好と聞いたので、それでもおそるおそる電話をした。

「元気になったよ。大丈夫」と元気そうな声、遠慮しながらも長電話になってしまった。

昨年の3月に、二人にとっても親友であり、川柳界へ導いて下さった門谷たず子さんが亡くなったことを知らせた折、「貴方は病後だから無理をしないで」と言ったのに、お通夜にも葬儀にも参列をされた。

そして5月には女学校のクラス会があり、リーガロイヤルホテルで会食、コーヒーを飲んでお別れしたのが最後になってしまった。

こんなに早くお別れするとは夢にも思わなかった。

今思い返せば、学校時代からの友であり、川柳の仲間であった友達は皆、天に召されてしまった。一人取り残された寂しさはたとえようもない。

丸山よし津さん、川見絹子さん、門谷たず子さん、神原文さん、そして番傘の坂野初子さんのご冥福を共にお祈りしています。

（合　掌）

遺　句　抄

人許し人を愛して今を生き
人生のプレイボールはハワイから
わが道を一途に草を引きながら
主なき庭の梅にも東風が吹き（亡き夫を偲ぶ）
七回忌あの夜と同じ風が吹く（　〃　）
おっとりがいつも正論吐いている
愛着が屋根まで詰まる古い家
澄んだ目で今を感謝の猪口と猪口（西宮北口句会、軸吟）
冬銀河　異国にありて身に沁みる
仮の世を芝居上手に生きている
若くても昔ばなしはするだろう
年かさに合った貫禄まだ持てぬ
利子の無い国で長生きせよと言う
不安湧くやたらと物を買う春日
あの失言心の襞にこびりつき

本社一月句会

一月七日（月）午後一時
アウィーナ大阪

悪天候にめげず集まった109名の参加の下、平成二十年初句会開催。

まず、同人神原文さんの訃報へ黙祷を捧げ在りし日を偲ぶ。

昨年から実施された三宅保州「初歩教室年間賞」の発表。藤本直（西宮市）・吉村幸（紀の川市）・小林わこ（枚方市）の三氏が授賞の栄に輝く。

次いで昨年度月間賞保持者の堺市の柿花和夫氏の表彰が行われた。

次に年間皆勤者33名の名前が読み上げられた。

初句会は河内天笑主幹のお話。

テーマは他柳社と川柳塔社の句の違い。一言で言えるものでないが、敢えて言えば、川柳塔の句は所謂名詞止めが少ない、動詞止めにすると句に広がりが出るという内容。

最後に天笑という雅号の由縁を披露して和やかな雰囲気で初句会のお話は終った。

初出席は七名。吉村幸、北山絹子、片山忠、田中滋郎、藤岡りこ、藤本直、小林わこ。

月間賞は大阪市の津守なぎささんに輝く。

（司会―美籠・昭）（脇取り―月子・扶美代）
（受付―義子・順子）（清記―直樹）

席題「風邪」　都倉　求芽選

郵便局風邪だが外す大マスク　正和
スペインとロシアが攻めてくる睦月　和夫
物価高と一緒に風邪が押し寄せる　日の出
アメリカに一度は風邪を引かせたい　勝弘
原油高株も通貨も風邪を引き　公誠
風邪ですと病名決めてくる患者　保州
風邪ひいたクスリが薬箱にある　美代子
母さんの風邪で皆が病んでいる　シマ子
留守電に咳き込む母の声残る　富子
鼻風邪に富山の薬あなどれず　好
風邪の神四季の挨拶してくれる　直
風邪ばかりひき悪人になり切れぬ　希久子
古典落語じっくりと聴く風邪の床　楓楽
風邪を引く前はぎっくり腰でした　義
風邪三日夫が炊いてくれた粥　寿美
風邪一つ袈裟掛けにして風に佇つ　柳弘
うつされた風邪がだんだん重くなる　房子
やっと風邪ぬけて夫婦の絵に戻る　美義
難問を突破してから風邪を引く　絹子
貴方から貰った風邪だ治すまい　みつ子
犬が風邪ひていますと書く日記　耕冶
風邪熱へ母のやさしいリンゴ汁　集一
風邪気味でちょっぴり理性まで揺れる　萬的
風邪引いていないかだけの母の文　一歩
風邪以来夫婦別室許される　(志)千代
風邪なんか土日にひけと言う社長　幸雀
幸せのひとつ今年は風邪ひかぬ　耕治
風邪の時急に優しい妻がいる　直
妻の風邪男世帯の縦結び　寿美
一輪のばらが風邪ひきなぐさめる　いわゑ
佳
お粥さん作ってあげる人がいる　美花
わたしかて一人前に風邪を引く　朝子
風邪の床寝ておれと夫何もせず　俶子
芯のない奴だと風邪も逃げていく　寿子
風邪引いたくらいで騒ぐうちの鬼　冨美子
人
母の風邪父はカレーの腕を上げ　正雄
地
口実は風邪で男を一人斬る　朱夏
天
風邪に寝て暮しの音がよく聞こえ　好
軸
髪といて髭剃り風邪を忘れよう

兼題「そして」　安土　理恵選

日の丸の旗を掲揚そして春　螢
偽装品そしてたっぷり甘い汁　庸佑
ミスマッチ気が付きそして別の道　珠子
そして初春我が家のお節盛る至福　幸
そして春うれしい便りどっと着き　月子

そしてまた同じ文句の年賀状　　とし子
続編がハートマークになりました　　ますみ
そしてまた筋書きの無い年が明け　　いさお
そしてそして死ぬまで続く物語　　三喜夫
祖父と父そしてわたしも恐妻家　　則彦
燃え尽きてそして他人になるふたり　　富子
世話をしてそして私も世話になる　　蕉子
みな逃げてそして彼だけ残ったの　　耕治
叩いた方も一緒に泣いているドラマ　　紀乃
そしてまたやもめ暮しになりました　　勝弘
じっくりと子供のそして閉いてやる　　洋
そして春去年の棘がまだ抜けぬ　　朱夏
被害者でそして加害者温暖化　　冨美子
原油高そして湯たんぽ見直され　　柳弘
ガソリン高そして爺さん柴刈りに　　たもつ
おままごとそして今まだ夫婦です　　義子
最初はグーそして喧嘩にけりがつき　　正
そしてまだ鬼は仏になり切れず　　瑠美子
にこにことそしてリストラ告げられる　　准一
砂漠に水そして私に欲しい愛　　洋
孫の数増えてばあちゃん忙しい　　月子
待ち惚けそして太郎の嫁になる　　(志)千代
風呂敷をひろげて悩みはじまった　　天笑
合コンは終ったそして僕ひとり　　時雄
そしてまた懲りずに脆い誓い立て　　正雄
大笑いそしてゆっくり毒が抜け　　篤子
やさしさと強さとそして善と悪　　求芽
　佳
飲みなはれそして保険も掛けなはれ　　美花
そしてまた女の髪が伸びてくる　　絹子
そしてまた五年連記の日記帳　　正和
そして今越えねばならぬ山がある　　絹子
ウェディングベル甘いドラマとなり そして　　みつ子
　人
接続語そしての多い綴方　　東吉
　地
人はエゴそして私もその一人　　好
　天
そして今改めて打つ句読点　　修
　軸
諦めてそしてあなたの妻でいる

兼題「男」　北野哲男選

意気地無しそんな男に惚れてます　　珠子
捨ててある男拾ったのが不運　　公誠
最後には男が折れてけりがつく　　好
男らしい男少なくなりました　　舞夢
時代かな男の面子軽くなる　　東吉
重宝な口で男を踊らせる　　富子
定年後どこにも港ない亭主　　美義
絵に描いた男とひとときを遊ぶ　　紀乃
男勝り彼の前では借りた猫　　りこ
男運悪いと妻の二言目　　洋
世間体捨てた男の底力　　いさお
一度だけ男の腕にすがりたい　　朝子
凛として不屈に生きた鶴彬　　正
そんなこと口にせぬから男です　　弘風
正念場男を試す風が吹く　　絹子
二千円札のように出番の無い男　　朱夏
男です賞味期限は切れてるが　　正和
ロボットも男もやがてゴミになる　　富子
八起き目の男大地に根をおろす　　朝子
祭りの日父が男に戻る汗　　郁夫
僕よりもイケメンなればみんな敵　　天笑
強いのは男優しいのも男　　賢子
奥さんが死んで元気になる男　　ルイ子
男衆ふるさと守る笛太鼓　　正雄
プライドは男の美学だと思う　　集一
無添加の男はすぐに攫われる　　義
阪神の話題へ男他愛なし　　楓楽
履かぬまま立てかけてある男下駄　　啓子
時代おくれの男にロマン匂い立つ　　葉子
チョッコリと男子のしるし孫誕生　　哲子
二〇〇八年男の握手信じよう　　とし子
　佳
丸洗いしたい男が増えてます　　義子
男には男の涙の彩がある　　千里
細かいこと言わぬ男に惚れたはず　　蕉子
風紋にうっかり男置いてきた　　義子
泣いている男が空を向いている　　ダン吉
　人
男の美学黙って消えて行くとする　　理恵
　地
どうせ泣くなら勝って泣きたい男の子　　一風
　天
澄んだ目の男のオーラ受けている　　ますみ

いい汗をかいて男の顔になる　　軸

兼題「愉快」　津守　柳伸選

二次会は酒を出すから来いという　　螢
愉快犯煽ってるよなマスメディア　　珠子
割勘は愉快だ思いきり飲める　　集一
のど自慢みんな元気だから愉快　　保州
養命酒飲んでほどける口の紐　　朱夏
サザエさん凡人だからこそ愉快　　千恵子
悪友は愉快な魔法かけに来る　　俶子
もてたもてた恋のめそめそ吹っ飛んだ　　修
国訛り友と酒とで盛り上がる　　孝一
勘定が愉快な酒を苦くする　　弘風
懐が温いと元気出るやまい　　哲男
退屈に愉快を運ぶ電話口　　郁夫
愉快なり吹雪にいどむラッセル車　　雅文
チャップリン愉快の底にある悲哀　　朝子
阪神が勝つと愉快になる我が家　　千里
幸せは愉快な妻と子が二人　　集一
思い出すたびに笑いが込みあげる　　恵子
同じなら愉快な自分で終りたい　　いわゑ
きみが居るだけで愉快になる空気　　准一
鈍行に乗って五官を癒やす旅　　千恵子
ぜんまいも電池も無しで笑う日日　　日の出
一合で愉快にされた単細胞　　朋月
福の神愉快な方に味方する　　美籠
三世代同居愉快も不愉快も　　希久子
誉められた日はソプラノで返事する　　美代子
言い勝った方が愉快と限らない　　楓楽
すぐ米寿愉快な日々で粘り得　　章久
不愉快なことがあったかドアの音　　好
リベンジがやっと叶ってほくそ笑む　　光久
温暖化バイキン達は愉快だろ　　忠
どうとでもなるさ愉快にくらそうよ　　ルイ子
甘酒で酔った素振りをしてあげる　　ますみ
大阪城彬の句碑がやっと建つ　　佳
事故続く愉快なはずの遊園地　　ダン吉
お布団で今日の愉快に礼をいう　　啓子
ゆかい愉快妻がごめんと謝った　　耕治
鈍感力身につけてから愉快な日　　弘風
一年を笑ってくらすことにした　　天笑
くよくよも愉快に生きるのも一期　　月子
新しい年は愉快に行きましょう　　地
コソ泥で済んで愉快になる尾鰭　　洋
理由あってダブルネームを名乗ってる　　天
いまはもうダブルベッドにひとり寝る　　人
貧しさ寒さダブルパンチの寝正月　　螢
おめでとうの声もハモッている双子　　珠子
両天秤かけて暫く読む空気　　希久子
ダブルチャンス幸せすぎて怖くなる　　美代子
買ってから同じ服だと気がついた　　正雄
ダブラすと二十年後の母になる　　千里
ダブッても邪魔にはならぬ諭吉さん　　加お里
一軒でよいのにいつもダブルする　　月子
妻と娘に叱られている午前さま　　俶子
俺と妻の欠点継いでいる息子　　一歩
成人式ダブルボタンがぎこちない　　一風
冬木立ダブルの影が動かない　　保州
ダブルチャンスそこが大きな落し穴　　美籠
両の手を重ねて温い握手する　　義
ダブルボケ聞き忘れやら言い忘れ　　好
弱りめにたたり八起きめも続く　　章久
ダブってる亡母と姉との笑い声　　求芽
渇いた胸にダブルベースがよく沁みる　　美花
ダブルクリックしてやり過ごす冬の章　　楓楽
ダブルスを組んではじけた春の恋　　朱夏
パチンコで大負け風邪も貰て来る　　寿子
失策の言い訳をしてダブルミス　　一歩
ダブルパンチにはっと謙虚さ気付かされ　　冨美子
ダブルスコアーやっと初心にかえってる　　幸
お歳暮も不足言いたいダブル品　　ダン吉
ウイスキーダブルにしても溶けぬ悔い　　(奥)五月
甘い声にゆれてる二杯目のダブル　　正雄
煌めく星ふたりを繋ぐコンチエルト　　寿美
ダブルキッチン肉ジャガ対ハンバーグ　　孝一
若葉マーク紅葉マークで怖れられ　　和子
　　保州

佳

堪忍袋の底は二重に縫うておく　和子
ダブってもよいとお歳暮酒にする　耕治
弱音吐く口を二重に縫っておく　富子
狛犬の影が重なる短日よ　美代子
面影を母に重ねて席譲る　幸雀

人

肝臓にボーナス酒の二連休　直樹
地
ダブルグラスの底に沈めている炎　いわゑ
天
懐の広さ母さんダブル幅　光久
軸
懐かしい顔ダブらせる年賀状

兼題「始発」　西出楓楽選

逃避行手を取り合った始発駅　喜子
団塊に定年と言う始発駅　集一
始発から終電車まで蟻になる　希久子
顔の無い女が乗った始発駅　朱夏
朝市の気負いも詰めている始発　美籠
万能細胞不老不死への始発駅　直樹
始発駅ワーキングプア混ざりおり　義子
眠りこけて始発駅から引き返す　りこ
始発駅悲喜こもごもの詩がある　絹子
常連が揃う始発の釣りマニア　たつお
今日の為始発でねむる戦士達　美智子

赴任地へ始発で帰る月曜日　(矢)五月
始発駅あの頃僕は燃えていた　ダン吉
手鍋提げ乗りこみました始発駅　葉子
朝食も化粧も始発電車内　玄也
始発駅働く顔の白い息　太郎
始発駅いつもの席に同じ人　時雄
必勝と信じて征った始発駅　久峰
もうちょっと読書始発の音がする　柳伸
始発駅林美美子の影がある　(志)千代
移植した苗を始発に夢は森　俶子
駅前に住んで始発が目覚ましに　保州
始発から青春切符元気よい　正和
雲抜けて初日を拝む一番機　尚士
始発から働きづめでヒラのまま　蛙城
常連が声かけてゆく始発駅　一歩
始発駅ジェームスボンド待っている　義
子の寝顔そっと覗いて始発駅　耕治
ピチピチの魚と一緒に乗る始発　和子
にぎやかなベンチ寅さんのる始発　なぎさ
七草粥とんとんここが始発駅　和子
やり直す駅で始発を待っている　理恵

佳

戦いに行く顔で乗る始発駅　集一
母の涙見ぬふりをして始発乗る　修
林住期自分大事に今始発　みつ子
始発までポリボックスで待たされる　蕉子
巣立つ子と肩を並べて始発駅　一風

人

羊水の中で始発の策を練る　希久子
地
始発から終着までの家出なり　いわゑ
天

少年に不可能はない始発駅　津守なぎさ

軸
母よ母よと始発へ急ぐ手に喪服

寒中御見舞申上げます

年賀状失礼してしまいましたので
これに替えさせていただきます

板尾岳人

川柳塔のぞみ2月句会

日時　2月26日（火）13時～
場所　銀座区民館（地下鉄東銀座③出口）
宿題　「針」「がんがん」「銀色」
　各題2句「自由吟」1句
欠席投句　2月23日必着　播本充子宛
〒193-0832 八王子市散田町2―31―3

毎月24日締切・30句以内厳守　編集部

むらくも川柳会　毛利　幸報

大掃除今年の垢を掃き捨てる　幸
換気扇またねまたねと年を越す　信夫
身構えて今年はみんなで大掃除　定子
世の偽装一掃したいな大掃除　彰
大掃除亭主どこかへ雲隠れ　宣雄
よく動く手足に感謝大掃除　美恵子
ボツの句も色紙に書けば顔を変え　美保
迷うことあって人生泣き笑い　恵美子
一日が暮れると家族の和がもどる　ます美
友達の電話に夢の数がふえ　秀子
久し振り毛筆便りに刻忘れ　蘭水
モナリザの微笑み若い男たち　瑞枝
バーゲンに一役買った虫めがね　俊夫
山一つ動けば海が見えてくる　秀夫
雲動く風もそよいでくれる秋　嘉寿子
夫寝息何はなくとも明日がある　愛子
ふところの深さを秘めて山無口　義良
夢を追い輝く老を生き抜こう　喜美

和歌山三幸川柳会　玉置　当代報

何度襟ただせば弥陀に会えますか　登美代
何くわぬ顔で汚れていた暖簾　町子
解読をすれば何でもない答　美枝子
何か一つ掴んだらしい子の目覚め　純子
そうだねと言えば何でもない話　准一
何色も白には勝るものはない　桂香
お喋りが何なに何と寄ってくる　信子
ピーポーの音に飛び出す隣組　孝子
落ち込んだ時は寅さん呼んでみる　当代
アナログの男酔わせた邦画館　和子
観客は妻とふたりの映画館　武
立ち見席で痴漢と共に見た映画　みね
映画よりドラマチックな恋ウフフ　起世子
原節子吉永小百合以下余白　保州
背中半分写っただけのエキストラ　章子
映画から生きざまを知る知恵もらう　一歩
立ち見した映画炬燵でロードショー　かずみ
図書館で勇気を貰う一頁　イセ
微熱して図書館に棲む本の虫　碧
図書館で脳の隙間を埋めておく　宏夫
図書館に本がいっぱいある平和　次根
図書館の隅で鉢巻締めている　絹子
図書館で意欲一緒に借りてくる　瑛子
移動図書館過疎の広場で触れ太鼓　昇
図書館は妙にぎくしゃくして寒い　孝義
図書館で読んだ料理が作れない　義雄
野ざらしの案山子に汗が沁みている　幹子
家系図にプロレタリアという誇り　朱夏
明日もまた働き蜂になる鮒　菜摘
これ以上欲は言うまい鎌洗う　幸

川柳塔まつえ吟社　三島　淞丘報

ITと握手はしないハガキ書く　紫晃
くせのあるハガキの文字に誘われる　薫
さりげない絵ハガキにある愛もあり　たけし
追憶の微熱のハガキ息をする　日出子
友の顔ハガキにしみる筆のあと　幸子
老いらくの恋はハガキで間に合わす　茂美
粗大ゴミ蟹歩きして路地を出る　礼子
不器用な癖に蟹食う手の速さ　長吉
蟹一匹無言の行で箸はこぶ　政子
年金のくらしで蟹がよりつかぬ　繭
泡を吹くほどストレスがたまる蟹　博子
岩穴で泡吹く蟹のひとりごと　房子
三猿の知恵だと喋らないおとこ　螢
お喋りの雀を待っているわたし　きみえ
お喋りをリュックに詰めて里帰り　スズコ
喋るだけ喋って虫の憂さ晴らし　治代
伝言板いっぱい喋る駅の中　よう子
お喋りが楽しく弾むうさぎ小屋　ちえこ
立ち話夕餉の仕度こころ急く　和歌子
急いだら転ぶと靴が小言いう　多喜

急ぐほど遠くへ行ってしまう君　柳歩
急ぎ足わたしの時間四捨五入　畔
お地蔵さんへ急いで縫ったよだれかけ　喜美子
急いでる世の中乾き出している　知恵子
跡目継ぐ覚悟をくれた過疎の風　静恵
生きた跡確かめ今を生きている　幸
振り向けば母を泣かした跡がある　桂子
傷跡もあって人間味が出る　淞丘
元気いい足跡つけて年送る　町紅
足跡を辿れば長い松並木　注湖

城北川柳会　伊達　郁夫報

車庫入れの格好良さに惚れました　麗
ハンドルもブレーキも無い若い恋　倫子
遊びが大きいハンドルままならず　ただよし
痴話げんか茶番劇だと気付く朝　郁夫
激辛の鍋がだるさを吹き飛ばす　東吉
気だるさは怠け者には判らない　正
歳暮市だるい財布に鞭をうつ　とし子
親と子のだるい絆を締め直す　章久
人生に疲れたらしいあだるい　ルイ子
だるそうに自転続けている地球　和夫
六法で裁き切れないこのだるさ　一歩
とんとんで見切りをつける処世術　萬的
またノックきっと闇魔が立っている　修
後戻りばかりしたがる古い貨車　典子
救われた掌の大きさに身をゆだね　求芽
焦るまいくよくよするな季は巡る　千歩
赤福に吉兆までも揃い踏み　昭子
接骨院骨の滅まで止められず　容子
雑念を忘れる得な好奇心　福世
俎の上で通した黙秘権　昭
苦も楽も四捨五入して生きている　ひさ乃
絞ったらまだ情熱がほとばしる　明子
人間の欲これでもかこれでもか　朝子
万能の人の細胞夢かなう　桂作
とんとんと事が運ばぬ民主主義　満洲夫
夕焼けもトンボも知らず塾カバン　たもつ
しっかりと家族を守るちらしずし　重人
ひとり芝居いつか喜劇になっている　順三
しゃんとした頃のあなたが懐しい　集一
ハンドルを握ると河内弁になる　志華子

長柳会　村上　直樹報

服はM腹はLL財布ミニ　直樹
サビキ釣りつかむ子の目が漁師なみ　たかし
幸せな暮しは神の贈りもの　靖子
美味しいね家族で食べる五目ずし　たけし
半被着てだんじりにのる優男　もこ
姉の服着せられ育ち今モデル　マサ
仮面など着けてませんと妻は言う　靖博
防衛省疑惑追求もっとやれ　光弘
着せ替えで遊んだ孫も母となり　よしお
あれこれと試着重ねて義理に買う　明信

佳句地十選（1月号から）

木村　冨美子

安産と聞けば気になる目鼻立ち　町子
切り捨ての端数の中にある誤算　碧
墨痕の滲む余白にある威厳　直樹
少年が亡母に抱かれにくる岬　静風
一日の仮面をとまり木で洗う　はじ芽
苦労した日を知っているりんご箱　三郎
引き金を引かぬ力を子に教え　美義
曼珠沙華紫苑も亡母の道に咲く　ふみ
人間が人間らしく居る痛み　孝男
秋はストンとノートは白いまま　千歩

老いてなお着物に糸目つけぬ主義　輝子
老いてなお色香に迷う友がいる　正博
普段着でそっと別れた故郷の駅　敬二
巻寿司に母の思い出たんとあり　正一
寿司折りで機嫌伺う午前様　和代
お悔みの挨拶語尾が消えてゆき　英美
初サラを寿司やに総て召捕られ　武男
すし詰めを懐しがっているスーツ　史
外国の顔したネタが回る寿司　淳司
時価の寿司食わぬ約束して入り　明子
美辞麗句心に触れぬご挨拶　冨美子
ふだん着の言葉になって仲直り　芳野
一張羅着ても出かける用がない　正子

過疎に住み挨拶のない日が暮れる　けい子
流行を追うマネキンの無表情　和子
口惜しいがまだ食べてない時価の寿司　幸雄
ただいまの声だけでみな分かる母　正美
錦着た防衛省の黒い影　三和子

うぶみ川柳会　小谷美ッ千報

不信心の顔もゾロゾロ遍路道　天人
横道を通ると花が声かける　京子
サービスエリアゾロゾロトイレへと続く　玲子
昼まではぐずぐず午後はシャンとする　よしえ
社保庁を掘れば猫ばばゾロゾロと　龍枝
暑い日は午後のビアノも涸れてくる　和子
日本語がゾロゾロ仮名の文字に消え　美知江
横顔を載せて選挙に旗上げる　かつみ
翌檜の横で精気を浴びている　ひろこ
やれやっと箍を緩めて午後三時　あづま
スポーツでまだまだ生きる鍛えてる　和雄
車間距離空けたら尾灯美しい　人
ゾロゾロと歩いて行くが何だろう　幸恵
ゾロゾロと駅は他人の顔ばかり　美ッ千
サーフィンが潮の流れを甘く見る　芳江
ゾロゾロと史実を隠す陰動く　孔美子
週一度午後はカラオケ靴磨く　和枝
ゾロゾロと後楽園の月見会　重忠
冗談が過ぎて横目でにらまれる　睦子
浄土までゾロゾロ歩く大仕事　きみ子

こんなにも居たか親類縁者達　芳光
疑いを晴らし午後から晴れにする　螢
まんじゅしゃげ黒い血を吐く日暮れどき　石花菜

はびきの市民川柳会　徳山みつこ報

安楽のはずの年金揺らぎだし　章司
楽らくと妻抱きあげた頃もある　恵勇
年末だ楽しい事がたんとある　真一
極楽へ行くぞせっせとボランティア　いさお
楽隠居隙をうかがう認知症　久仁子
縁側の日なたで猫になっている　みつこ
新雪をさくさくと踏む心地よさ　正子
晩秋の土さくさくと春を植え　ヨシ枝
さくさくと踏めば落葉が喋り出す　アヤ子
リハビリで弱者への愛芽生えだす　かつみ
明日のため痛いリハビリ何のその　フジ
リハビリの成果弾みを付けた試歩　庸佑
リハビリへ辛抱強さ試される　一壺
リハビリの成果を見せる試歩の朝　敏
歩行訓練かねてコーヒー飲みに行く　六点
リハビリを支える汗が美しい　重人
もち肌の母は何にもつけていず　獏沓
もうそろそろ素肌のままで生きてみる　喜久子
人肌の燗恋しくて赤ちょうちん　耕策
戦争を肌で感じた人が減る　ちづる
暖かい妻の手編みの肌触り　一知
餅肌の尻に敷かれる果報者　志洋

シルクより私の肌に合う木綿　泰子
母さんの温もり肌が憶えてる　光男

川柳茶ばしら　板山まみ子報

二十年会わずに続く年賀状　遡行
百点の妻にはならぬ妻でよく　秀水
買物をケータイでくる散歩中　文男
充電をしてご機嫌なスニーカー　幸子
茹で過ぎのほうれん草を隠すごま　かつ子
窓越しの笑顔へじらす発車ベル　美千代
おいしさは虫も知ってる無農薬　百合
無い袖を振る元気など疾うにない　まみ子

富柳会　池森子報

扇子より丸い団扇が性に合い　七朗
さよならのうしろ姿に納豆糸　ひろし
こだわってラストチャンスをとり逃がす　アキ
かごめかごめ夕日に伸びる子らの影　武人
まるい種いのちはぐくむ旅に出る　奏子
欲望の強いおんなの水溜り　登子
バッサリと絶てぬ未練が糸を引く　恵子
コンセントはずすと恋が遠くなり　よしみ
難題をさっと解かれて口惜しさ　和子
善人と早合点した丸い顔　一慧
妻の背のまるさに気付く台所　鐘造
屋根裏でいつも広げるデカい夢　深雪
まるい子に育ってくれと神だのみ　伸雄

空間が埋らぬ溝の嫁姑　糺
絶世の美女と言われし時もあり　壽峰
消しゴムで丸くなるまで過去を消す　高鷲
団塊を抜けて青天わがものぞ　巳代一
絶え間なく喋り食べてる妻の口　寿之
豊かさに予備の酸素も不足する　紅紫朗
泥水を愛して蓮は凛と咲く　未知
明け透けに物言う人に秋の風　彦次
一万匹が鳴くやわらかいいのち　千華
欲のない形で秋の彩を溶く　鬼焼
傘寿なお魔性へ紡ぐ糸車　信子
雑草の勢い止まる虫の声　佳子
火の彩に染めて下さい曼珠沙華　澄子
たましいをふたつ重ねるよいとまけ　欣之
時間ならたんとあるから各停で　淳司
花散って諸行無常の風の中　浩子
耳元で秋の吐息を受けとめる　森子

川柳大阪　長井善純報

防衛省給油の油漏れ過ぎる　川童
話題本味わうほどでない中味　東吉
特産を聞いて味わう舌鼓み　照月
揚げたてのコロッケぬくい母の味　和
味わえば血になり肉になる法話　重人
よく噛むとするめの味がよくわかる　笑風
じんわりと味わう話芸脱ぐ羽織　章久
味わった苦労も笑える歳となり　青道
味わいの心が染みるみつをの書　柳弘
ぼろぼろの姿も淋し古い辞書　洛酔
街行けば姿勢気になり腰伸びる　喜楽
桜鯛色と姿で自己主張　かよこ
子の姿反省します我が姿　花笑
美しい姿は嘘も美しい　一風
故郷に絆のモンペははが居る　孝一
朝焼けの地球の姿美しい　芳香
習慣も大事にします国際婚　彦太
散歩する習慣つけて足達者　鉄心
ゴミ出しはボクの役目となっている　一歩
料理下手嫁の味にも慣れてもた　珠生
ウォーキング習慣づいて雨の日も　功
休肝日なかなかできることでない　勝弘
習慣に陸海空が行くゴルフ　司
言わずともすぐに出て来る酒さかな　五月
仏壇にお茶を供えて動く朝　朝子
一日一善口先だけで終わる日々　善純

南大阪川柳会　吉川寿美報

道頓堀今日も走っているグリコ　昌紀
仮初めの恋はネオンの海で咲く　集一
淋しくて愛を探しているネオン　あや子
美しい別れへネオン目にささる　洋
担任がゆるいと父兄とっちめる　憲太郎
結び目を少しゆるめにした夫婦　ルイ子
結び目を少しゆるめて輪の中に　更紗
ゆるいけど亡母の説教身に滲みた　章久
欲得を捨てると坂がゆるくなる　楓楽
落葉踏み足の足音聞く散歩　弘風
足音のでかい男について行く　たもつ
足音を立てて大地と会話する　祥昭
足音が今日の成果を連れてくる　郁夫
欲溢れ偽装の老舗のれん泣く　弘子
溢れてる若さまぶしい女子駅伝　滋郎
情報が溢れ過ぎてる不幸な世　(榴)修
デパ地下のおせち売り場のにぎやかさ　直子
煮こごれを嫌うカニ鍋の無口　柳弘
大入りがめったに出ない大相撲　栄子
声優の素敵へ夢をふくらます　なぎさ
浜村淳のトークの中にある魅力　太郎
シンクロのなんと素敵な足の先　雅文
ボージョレヌーボ素敵な秋の夜を酔う　弘泰
自然体素直な貴方素敵です　忠昭
素っぴんが一番いいよ素敵だよ　(吉)修
旅立ちへ素敵な空をありがとう　志華子
きっぱりした男結びの頼り甲斐　ばっは
身内にはゆるい処罰ですます国　東吉
着もしない衣服溢れる妻の部屋　勝弘
賞味期限許し続けたゆるい舌　和雄

川柳塔きゃらぼく　大塚恵子報

我が家も大地の延長線上に　日枝子
後回しの苦手に今日も攻められる　なみ

老いて尚今も肌には赤を着る　蘭
今が花と思い日々を過している　玲子
名物が賞味期限で消えて行く　章江
もう八十まだ八十と千の風　ゆき
乗りやすい風で噂が止まらない　那珂子
永平寺煩悩洗うように澄む　瑞枝
亡き母が教えてくれた礼儀作法　清子
大山の自然満喫家路へと　晴子
若い風に揉まれてたたら踏んでいる　春枝
秋の夜長ペンの音にも弾みつく　亜弥
噂など右から左へ聞き流す　初枝
飛鳥Ⅱ千代荒介の句に出会う　寿々子
雪の峯もみじ最後の恋をする　千代
千の風になって亡夫よ亡父よ会いに来て　紫泉
スポーツも紅葉もまっか燃えている　恵子
決め球を時の流れに改める　ふみ
レシピにはないおふくろの匙加減　晶子
道づれになる山脈に初の雪　やえ
歳をとり言える火の事水の事　てい子
ゆっくりとサンデー楽しむモーニング　雪江
夏負けときめつけていていいのかな　天雀
干し柿の暖簾をくぐれば冬景色　すみえ
平和だから大根めしでも作ろうか　田鶴

ほたる川柳同好会　水野　黒兎報

寒い日は猫とうたた寝置炬燵　長一
六十でやっとぶつかる親の壁　美智代
寒いねは鍋催促の呪文です　黒兎
政治家に極度に目立つ認知症　柳童
寒々と風吹き抜ける過疎の村　禮子
寒いねと言いあうこともないふたり　見清
凡人で壁の答が聞えない　宇乃子
ケンチン汁中味に亡母の顔があり　雪子
お隣りの柚子が浮んでいる冬至　桂子
賞与前寒い懐家で粥　信男
嫁はんに湯タンポ取られ風邪を引く　幹治
気づかずにただ読んだけどあの手紙　久子
ふんどしの中味気にする十二歳　勇治
寒いからササッとすます大掃除　春代
寒い夜やる事したか振り返る　契子
外面はにこやか肚はわからない　肋骨
寒がりに痛い追打ち灯油高　勝

川柳塔なら　坊農　柳弘報

分けるほど遺さぬ父に和を貰う　成子
ぐい呑みの底に恨みが残ってる　満作
大地から貰う味には偽装なく　隆子
雨の奈良昔拾って歩く靴　積子
カーナビに教えて貰う迷い道　章久
媚びもせず器のでかい君が好き　ふりこ
注ぐ人の機嫌が泡に出るビール　弘風
腹の虫楽器のように打っている　茂雄
それぞれに合った器の中で生き　孝子
赤福の器を恥じるお伊勢さん　俊彦
フグ刺しを引き立てている青磁皿　太一
単純ね松茸だけで上機嫌　修
白無垢で貰たに僕に染まらない　千梢
貰うより奪うと言って欲しい人　卓
生きがいを歌に貰った半世紀　洋子
小春日の女に欠伸移される　完次
師の喝にやる気貰った日の成果　和夫
苦言聞く僕の器が試される　ダン吉
変わりたくて君の器に正座する　真理子
鼻唄でルンルン孫はデートらし　寿美
機嫌よい顔しか見せぬ苦労人　博一
僕の器量試す礫が飛んでくる　富子
底辺を這うた器にある度量　朝子
ご機嫌の財布だんだん軽くなる　一風
チューハイの底でご機嫌拗ねている　國治
立ち直る勇気仁王の眼に貰う　道子
円空のロマンと歩く小塔寺　秋雄
秋の絵が奈良まち辺り通過中　隆盛
五体みな親に貰った宝物　良一
一杯の機嫌権力に立ち向かう　比呂志

わかあゆ川柳会　松本はるみ報

甘い酒飲んだオロチの四面楚歌　好栄
同窓会減ってきました酒の量　かつ子
所望したからには枯らさぬ鉢の花　ちよえ
やっと子とはずむ心で屠蘇を汲む　伸子
今日の客言葉さがして呑むお酒　聖子

酒を汲む遠き神代のむかしから　はるみ
水と油けれどふたりは夫婦です　恵美子
酒好きに無情な医者の句読点　博利
一杯の酒にうごめく下心　清泉

西宮北口川柳会　黒田　能子報

自問自答へ冬のきびしさ身にしみる　萬的
富士山のゴミは見せない冬化粧　正和
燃えつきて悔いを残さぬ冬木立　光久
何となく棘もやさしい冬のバラ　歳子
暇ですと赤提灯が揺れている　昭三
AED命救った赤い文字　奮水
赤裸裸に夫婦喧嘩をなぞる孫　忠
色褪せもあり金婚の赤い糸　折杭
残菊を焚くも近所にはばかられ　耕治
その先はふわふわふわと煙に巻く　紀乃
小遣をやっても孫は煙たがり　松煙
煙突は無くてもネットで来るサンタ　キヨミ
丁重に煙たい姑を送り出す　てる
注意なぞ聞いてやるかと煙にまく　江美
ひとすじの煙にさらばさらばです　富喜子
夕暮れて鐘の鳴る丘土手景色　弘子
空耳か耳鳴りなのか風の声　宏一
まだ燃える火種を抱いて除夜を寝る　晴美
三百六十五日連休なので忙しい　哲男
マフラーを着けると亡母と居るみたい　美籠
今更に磨き損ねた石を研ぐ　曙蝶
開けたいなパンドラの箱皆のため　二英
目刺噛む乾いた朝の音がする　直
薬茸の軒にすだれのつるし柿　五月
這い回るマウス時々跳びはねる　いたる
苦労した手だから十指みな広げ　千代
母さんと呼んでみたくて呼んでみた　多喜子
ケイタイに家の電話が欠伸する　りこ
自転車のベル不遠慮に背中から　わこ
疑問符が消えぬ記憶の裏側で　哲子

川柳花の輪　妻谷　重風報

クリスマスそろそろ孫からリクエスト　一幸
呑めぬのでそろそろ嘗めてさあ二次会　ミヨノ
つま先がそろそろこたつ恋しがる　善栄
三階建そろそろ飽くぞ階段に　重風
夫婦げんかそろそろ詫びるタイミング　音成
そろそろと老化か足がもつれだす　やすの
プレゼント約束したら忘れるな　隆盛
約束の時間知ってる花時計　薫
禁煙も禁酒も壁に空約束　泰子
登下校すれすれに行く自動車　隆子

川柳ささやま　遠山　可住報

不景気で匠の腕が泣いて居る　精一
田が売られ次第に街になる故郷　純子
がやがや言う平家源氏のまだ住む世　美緒子
好き嫌いばかり言うてる平和な世　二英
まだ鍬が持てる両腕なぜてやる　文子
価値観が違うふたりの自己主張　美紗子
引算をしながら売場見て歩く　靖子
ばあちゃんも孫も総出の豆出荷　多美子
味付けにうるさい嫁が身を守る　開子
腕時計親の形見が温かい　照代
食べ物は何でも売れる味まつり　かほる
ポケットに笑いを詰めて来た友で　つや子
うるさいへ感謝して解く躾糸　冨美
好きなもの医者と妻とが皆止める　哲男
味噌汁があったら何もいらぬ朝　可住

川柳ふうもん吟社　夏目　一粋報

こっそりと愚痴を煮込んでいる鍋よ　洋々
無位無冠母は立派な主婦のプロ　無限
プロでしょう右往左往をしなさんな　一瑶
なしたこったほんとの涙眼から出ぬ　孝男
頭下げおわび出来れば社長です　稔
満月が二人の情事のぞき込む　雅女
願い事神が次々没にする　秀四
なしたこった疑惑の波が収まらぬ　金祥
彼の世には近くて遠い壺で行く　益子
笑うこと消えて夫婦にすき間風　美雪
宝くじこっそり神に頼んでる　善夫
母親のプロにはまだまだなれません　一京
賞味切れないかとプロの目が光る　圭一郎
ふんどしがはずれりゃ力士失格だ　蟹郎

父親失格酒も煙草もよう止めん　妻子
コンビニの常連主婦は失格だ　あしび
少年を夢中にさせるプロの夢　志げ緒
身の程を弁え合った暮らしする　(山)節子
束の間の秋に気急りの雪が舞う　かをる
失格の夫いるだけで良しとする　茂登子
癌消えたなしたこったい夢だろう　春名
徴兵検査失格今に生きのびる　昌鼓
呆けるなと国語辞典が背中おす　菊香
神様の死角こっそり浮気する　毅
こっそりと行方不明の諭吉さま　夢路
こっそりと仕まった金は十万円　菖子
プロの美味作れる妻が自慢です　由美子
プロならばやはりメジャーの夢を見る　虎尾
こっそりとするからうまいつまみ食い　喜子
間引かれてまた間引かれてプロとなる　一粋

川柳クラブわたの花　西川　義明報

鈍行の良さわかり出す定年後　はじむ
秋はなく北日本では雪化粧　たえこ
胸に手を当てて恥じ入るあれやこれ　美代子
愛も憎もファジーで保つ夫婦仲　耀一
公衆で本気で叱る母の愛　知佐子
ポケットの中の不満を捨てに行く　民
犬散歩おとなにマナー叩きこむ　君江
つわぶきのにおうが如く黄の癒し　博子
患いの気丈な友に励まされ　愛子
夫の好きな肉じゃが姑に習う　ミツ子
紙切りの手先で生きるカプトムシ　宏至
終章を本気で染めることもなし　幸江
家の中泣きたい場所が見つからず　荘司
折り返すあたりの草を刈っている　美はる
清い目で信頼された赤子抱く　克美
期限切れパパに食べさせ見る様子　いつふみ
魂の詩が聞こえるルミナリエ　義明
釣れぬ竿トンボ気安く一休み　宏
大臣も一夜で変わる言い訳が　正春
看板をゆっくり見てる車椅子　欣子
野分騒ぎ暑さまとめて吹き払う　妙子
縁と言う鎖で暮らす老いふたり　俊子
長命家系百歳で書く遺言書　晴美
遺言状余白の追記嵐呼ぶ　浩三
落日の真っ赤に黄うエネルギー　朝子
やさしさも相手によると嫁姑　孝子
看板の重みにあえぐおぼっちゃま　和子
神様の看板になる絵馬の数　ますみ
吾亦紅過去のあなたが住んでいる　ふりこ
真ごころを看板にしてようはやり　一風

川柳塔唐津　仁部　四郎報

帰れとも言えぬ故郷さびれゆく　實
世論A妻で夫はBである　四郎
O型のおとこ優しい養子むき　高明
老夫が疲れた抱けと老い見上げ　蜂朗
日溜りに来しかた偲ぶ傘寿喜寿　晴翠
ステーキは要らぬが鰯高すぎる　勝視
新社員どこが上座かよく知らず　輝夫

高知川柳社　川竹　松風報

日本の主婦へ柔道金メダル　哲史
主婦業へ礼を言われた事がない　てるみ
振り向けば山坂あった主婦日記　和江
千代様に見習い小金貯めている　美々
年金分割主婦も密かに策を練る　暖
鍋奉行する羽目となる主婦の性　幸子
主婦が居るただそれだけで和む家　典雄
皮下脂肪今日も貯めてる主婦のウツ　まき子
家計簿の赤字へ主婦の束ね髪　功
主婦と言う武器を使ってスリリング　京子
心まで写す鏡を拭き磨く　栄美子
へそ曲りすんなり入る内視鏡　勢子
鏡から腰を伸ばせとご注進　みどり
試着室鏡と相談して決める　千鶴
反省をじっと見つめている鏡　初江
鏡には嘘はつけないお見通し　和恵
手鏡に映る襟足まだ若い　進

八尾市民川柳会　宮西　弥生報

最愛の契りは神の真正面　欣之
沈黙の罪はこころにある歪み　アキラ
レパートリー増やすお節の十二月　柳伸

車中泊それでも旅行した気分　美代子
酸欠の街へ降る星息も絶えだえ　定男
わが家には賞味期限はありません　浩三
逆さから見ればしっかりしてる妻　加央里
達観の笑顔は過去を語らない　朝子
影法師ブレーキばかりかけにくる　一風
急く人も急がぬ人も年は暮れ　耀一
それからをいっ気に走るボールペン　秋雄
うっとりと見惚れて飽きぬ十三夜　寿鶴
仏壇の亡母は一年中笑顔　いさお
人間不信花と契りを深くする　扶美代
夕紅葉狂女になって契りたし　あかり
九条と契る戦はしない国　ダン吉
原油高しっかり給油自国にも　紀雄
幼い命楽しい明日があったはず　賢子
天国と契る知恵ならウソはない　弥生

竹原川柳会　時広　一路報

打ち上げ花火ドーンと還暦になった　蘭幸
おおい雲弱音吐いてもいいんだよ　民恵
音もなく石段の角まるくなり　静風
川の流れに添うてつまずく水の音　慶子
ドドンドン天突く太鼓の神降し　弘子
音もなく秋を素通りして冬に　栄恵
青い青い海なら散骨もいいね　力
青い空お詫びする記事多すぎる　房子
泣けるだけ泣いていいよと空の青　規代

青少し足して自画像の瞳　笑子
青信号ばかり通って来た不覚　淑子
青空よ天の高さよ脳を突く　汎美
信念を持てと言ってる空の青　比呂子
心の底まっ赤に燃やす気をおくり　太虚
ワンワンと犬も寝言を言うのです　千枝
泣き顔も笑顔も愛し我が子です　史子
学問の目次が並ぶ電子辞書　節夫
大輪の菊から学ぶ平和論　節生
五体不満足学びの筆を離さない　幸子
遊びたいだろうに塾へ少年よ　敬子
空に森にせせらぎに学ぶことばかり　貞子
転ぶ度学んで深くなって行く　輝恵
四コマに学ぶクスッとした笑い　一路
学びより遊びの方の優等生　六口

松露川柳会　小西　雄々報

寝たければ寝る損得のない余生　雅子
偽装して儲けたはずが大損に　美枝子
わが家計損得もなく年が暮れ　興
損得の天秤揺れる人の情　ちえ
同情へ過大に損を告げる波　鈴枝
損得も平行線に並んでる　公美枝
長生きで年金もらい損じゃない　信雄
うっかりとチャンス逃して損をした　智恵子
人柄にほだされ高い判をつく　久子
損をして得をとること教えられ　弘子
損得は考えません趣味の道　静江
一言が調和損ねて四面楚歌　豊枝
見栄を張り損を承知の仁義買い　和代
健康に自信持ちすぎ墓穴掘る　雄々

鹿野みか月　福西　茶子報

掘り出した資源で空を狂わせる　孔美子
切れぎれの想い出紡ぐ古手帳　くに子
ペコペコとあなたのために命乞い　宣子
帳尻のあわぬ資金をどう埋める　睦子
怒ること忘れ笑ってばかりいる　蛍
使い方解らぬ電子手帳もち　公子
炊事して本妻という資格持ち　久枝
ぺこぺこと猫が挨拶して通る　和枝
防衛省にいた大物のどぶ鼠　重忠
私の汗すった畑も草はやし　幸枝
嬉しいな杖にも馴れて遠出する　節子
女傭姑になった長い旅　弘子
大臣の資産公開濃霧です　忠良
広いなあ水平線と俺の距離　蟹郎
手帳に記す木枯らしのこと雨のこと　完司
万札をねずみがかじり猫と寝る　菊乃
ぺこぺこと鬼でも蛇にもなれる人　実満
昔にはぺこぺこ缶の蚕とり粉　はるお
花柄の手帳ドラマが伏せてある　きみ子
資産ゼロあるのは医者の領収書　和子
身の丈の資産があって欲を追う　みどり

黒革の手帳で洩れたスキャンダル　みさ子
ぺこぺこと社長にゴマを摺っている　かつみ
ぺこぺこと頭を下げてきた平和　永子
投資してみても小さな家だなあ　汲香
資しの密かなちから秋野菜　諷人
ガソリン値上げ資源もてあそぶ　かおる
学校のいじめペコペコ隠れてる　小生
恐妻の死角に置いてある手帳　茶子

川柳塔おっぱこ吟社　木村あきら報

肝心な時に携帯水を差す　八重子
跳び箱の向うに子等の千の夢　賢
スト等は絶対しない蟻の列　あきら
勝算があってハンドル右左　はつ恵
信じても時どきからむ迷い糸　ひかり
本心を見透かすようなお月さん　よしみ
共白髪よくぞ世紀を越えてまで　弘
孫が来て好きなテレビも遠慮がち　放任
流れない小さな石と睨めっこ　いさむ
母偲ぶ名もなき花に立ち止まる　寿々女
要らぬ物再利用され活き返る　貞月

ローズ川柳会　山崎　君子報

生き方に自信出たらし目の光　てる
柿はたわわに待つ人は帰り来ず　みつ子
人生のみのりの秋に友有りて　藍
秋思とや心の窓に風やさし　哲子

秋晴れに気力をもらう運動会　トミヱ
窓に石投げる心の悲鳴聞く　貴代子
木枯しが来るなら窓は磨いとく　孝一
器用ではないが素直に生きている　美籠
少年よ窓開いてます話そうよ　義子
終電車土産待ってる窓明り　君子

高槻川柳サークル卯の花　釜野　公子報

枯葉色したカマキリの背に夕陽炎え　篤子
温かい友を見つけて冬間近　郁夫
渋味のある顔にザクロの実がはじけ　郁郎
しんみりと白雪姫を読んでいる　恵美子
しんみりとしたいときにはいらぬ妻　かずお
万歩計ゆったり朝日抱きしめる　活恵
花いちもんめワタシがいつも残される　公子
渋いねえどう採ればいい風の向き　孝作
味噌漬けの出来で評価をされる嫁　渓舟
煙にも四季それぞれの色がある　宏章
味噌汁の匂いで朝が走り出す　幸雀
呆けたふりしてセールスを煙にまく　こみち
炊煙もまばらになって続く過疎　砂輝守
叩かれてもめげず出る杭ですワタシ　佐代子
足音を鳴らしてみたい松葉杖　昭二
許す気になってもしばし渋い顔　節子
お賽銭は五円しんみり願いごと　つね湖
渋皮と一緒に剥げた化けの皮　直人
青春は煙と消えた戦中派　のり子

味噌汁の味も嫁から母になる　勲弘
結婚していますしんみり断られ　晴美
神様が渋い顔した五円玉　尚士
和尚叩けば仏の声を出す木魚　比ろ志
発掘へ古代の塵も掻き混ぜる　守
マンネリもよし味噌を溶く日の豊か　昌乃
目立ちたい杭から順に叩かれる　美籠
味噌汁で手なずけ続く妻の位置　美義
キャンプ場の煙カレーの匂いする　八斗醸
たばこ燻らし絵になる男消えました　葉子
喪が明けるまでは渋めに参ります　昭

川柳塔のぞみ　播本　充子報

一番が妻で二番がお前達　由一
先生が好き一番前で講義聞く　賀世子
骨抜きにされてしまった一番手　公誠
泣き虫が出世頭の同期会　敏
ミステリー飲まず食わずで読み進む　康子
長編を読み切る根気失せている　勝
赤裸裸な愛文壇へ着地する　桃葉
音量を絞って欲しい選挙カー　宣子
化けの皮今脱いでますお静かに　朝子
コロンブスが卵立てますお静かに　つよし
大声を出したら負けになる喧嘩　あやめ
お静かに離婚調停すすんでる　喜子
雑念がぼろり警策さっと打つ　遊花
故郷の芋が名菓に化けて出る　奮水

秋晴れを賛美歌にする芋煮会　雅城
お静かに地球が何かいっている　美津子
病院の廊下馳けてはいけません　寿美
焼き芋のマイク師走の風にのり　権悟
焼芋の匂いゴクリと喉がなる　哲代
秋夜長犯人わかり燗とする　清乃りこ
そのしゃべりマナーモードにせんかいな　充子
そっとしておいて下さい紛れです　方子
快復期一番だしの母の粥　螢
水車くるくる芋の子を洗う
でかい芋掘ったほったとはしゃぐ孫　順風

和歌山三幸川柳会　玉置　当代報

気楽です生命保険掛けてます　かずみ
ワンテンポおいて気楽に向かい合う　美枝子
お隣が駆込寺で日々のどか　昇
兎から亀に変身気楽です　起世子
百歳になれば全うする気楽　幸
ドンマイの呪文気楽にしてくれる　登美代
気楽そうに見えても辛い車椅子　桂香
子無しですか気楽ですなと他人さま　町子
遺すもの無くて気楽に病んでいる　章子
妻任せ貯金あるのか無いのかも　みね
マニュアルに添って気楽に生きている　朱夏
カードなど持たぬ私は豊かです　信子
カード嫌い受付様に世話をかけ　一歩
命綱ＡＴＭに差すカード　次根
年金の海で窺いでいるカード　イセ
いざの時キャッシュカードの力瘤　孝義
プリペイドカードが急にしゃしゃり出る　絹子
飴玉とカード忘れず持ち歩く　当代
熟年の離婚のカード切る勇気　瑛子
煮詰った頃にそろりと出すカード　准一
散華散華期限の切れたカード撒く　和子
嘆息が検査結果で弾けとぶ　義雄
生きている喜びを吸う秋の天　純子
ふるさとへ詰まった息を抜きにゆく　武
溜息の深さに明日を意識する　宏夫
極限の吐息は母の森で吐く　幹子
許されぬ人を許してアメリカン　碧
喜んで御一緒します紅差して　孝子
終章は歓喜の歌で綴りたい　菜摘
何よりの喜び今日も生きている　保州

尼崎いくしま川柳会　田原　宏一報

木枯らしが秋の終るを告げに来る　幸子
幾度も苦難を越えて共白髪　純
老い見つめ今年も越える年の暮　千恵
笑ってるそのうち怒るお天気屋　ゆき子
今在るを一歩踏み越え詩のみち　道子
自治会も敬老会もなじみ顔　野薫
親馬鹿がまだ終らない世話の二字　宏一
恙無くあと一枚のカレンダー　守弘
明日の夢信じシナリオ書き添える　寛之
百歳を越える秘訣を学び度い　東園

川柳ねやがわ　森　茜報

慰めてあげます膝があいてます　とし子
抱きしめてそうかそうかと聞いてくれ　麗
慰謝料をがっぽりもろてさあ自由　あさ子
慰める言葉も無いと舌を出す　勇太朗
忠告のバラの刺からサスペンス　かすみ
忠告の性善説を眠らせる　じゅんこ
滅入らないアドバイスならしてください　亜成
うきうきの娘の顔で恋を知る　日出子
輪の中で浮いてしまったまま終る　ルイ子
隅っこで小さくなってタバコ吸う　博泉
浮かぬ顔してると運も逃げまっせ　一風
ひと恋うる歌に時雨れているマイク　恵子
伝統を歌とおどりで守る村　寅甲
もみじ葉の幻想夕焼を掬う　柳弘
暑かった夏を嘆いている紅葉　弘風
見る人もなく廃校の紅葉散る　庸佑
祇王寺の紅葉が知っている悲恋　朝子
紅葉散る一枚ずつにあるドラマ　集一
近くてもテーマパークへまだ行かず　さち子
人間が試されている温暖化　鈍甲
テーマソング聞くと手の出る阿波踊り　薫
難題を背負い座禅のヒキガエル　洋
二幕目はどんでん返しというテーマ　頂留子
テーマは一つリセットしたい核時計　ただよし
ひとりひとりテーマ持ってる蟻の列　たもつ
火葬場の煙がひとつテーマ消す　弘一

テーマパークもう回らない観覧車　仁清
デイサービス幼なにかえる童歌　高栄
鉄の舟なぜに浮くかと子に聞かれ　桂作
血の通う忠告全身に響く　賢子

尼崎尾浜川柳会　田原　宏一報

ひと言の効き目こだわり溶けていく　紀乃
一度きり命いちどは光りたい　宏一
宥めてもまだ治らないはしご酒　里江
治るのか効能多し露天風呂　野薫
これからも追い求めます夢風船　孝一
豪雨で地は固まらず山崩れ　五月
治るより悪くなるなと医者通い　勝巳
治ったかうるさい患者来なくなり　耕治
広重の雨は斜めに叩きつけ　靖鬼
みんな留守それ羽のばそ思うだけ　よし子
よい友に持っては死ねぬと励まされ　昭三
脇役では惜しい毛布の質と柄　亀与子
夫婦して余白に少しピンク塗る　美義
飽食に残りを捨てる弁当屋　朋月
治療した耳に小言がよく響く　政江
コスモスのもつれを治す緩い風　イサミ
我が命賞味期限も切れそうだ　江美
毛布被って冬の足音聞いている　比ろ志
女癖が治り男の意地が消え　晴美
毛布から首が出せない朝寝坊　求芽
一抹の寂しさよそに娘は嫁ぎ　正治
やわらかい嘘にほぐれていく痛み　美籠

川柳塔打吹　野口　節子報

もう少しふえる年金待っている　勝誉
年金で世界の空を飛んで来た　勝憲
子に負担掛けずに暮す年金で　隆一
社保庁も不眠不休で年金さがし　久芽代
年賀状を満杯にしてポスト立つ　みち子
立ち通し脛の小僧がだだこねる　美知江
いら立って八つ当りする捜し物　富恵
四面楚歌努力根性で立ち直り　佳女
孫巣立ち匂いが残る開かずの間　紀美恵
雑踏にもまれ思わず立ち泳ぎ　美代子
立て歩め骨すかすかにならぬよう　玲坊
妥協した後でじわじわっと腹が立つ　孝恵
貧しさが鍛えてくれた足で立つ　完司
許す許さぬ言っているまに出来ちゃった　やえ
簡単に許してしまうお爺さん　螢
三日目のおでんまあまあ許される　としえ
許そうと決めたら胸の海は凪ぐ　和枝
お互いに負を飲み込んで許し合う　龍枝
許されて人間だけが化粧する　滋
この町も車の渦が押し寄せた　和子
渦潮に巻かれて私左巻き　禎元
渦巻きになって考えまとまらぬ　芙美子
バスに酔う鳴門の渦のど真中　善江
原油高マネーゲームの渦の闇　重忠
左巻右巻もあり十指なり　三津子
溺れてもいいなと思う温い渦　芳光
素うどんは鳴門巻きまでうすっぺら　玲子
グチャグチャに思考回路が渦を巻く　公恵
こたつからみている日本丸の渦　石花菜
どんぐりが寄って笑いの渦が出来　節子

岸和田川柳会　土橋　房枝報

ひと抓みの塩で秋刀魚は火に踊る　柳弘
勝負しろサンマ抜身の面構え　ダン吉
ぷりぷりの秋刀魚脊に酒進む　珠子
晩酌に秋刀魚のあてが生甲斐で　ふみよ
銀杏と秋刀魚が運ぶ秋の味　泰弘
新秋刀魚半分こして老い二人　清
授かった帯にうれしい安定期　和美
安定し妊婦両手で慈しむ　幸子
泰山の如くどっかり父の膝　仁緑
苛立ちはやっぱり歳のせいかしら　楢代
潮騒に苛立ちしずめ旅の宿　ゆい
おちつけと窓を横切るかたつむり　昭
祝膳を前に主賓の長話　俊昭
苛立ちの文字が踊っている手紙　浅子
苛立ちに気づかないのか無神経　香代
複雑で苛立ちつのるデジタル化　淳風
葬儀屋の遺族に代る涙声　義泰
ボロいことないかうろつく老いた蟻　蛙城
うろうろと花屋で遊ぶ小半日　弘子
うろうろと秋を貰いに北の旅　笑司
うろうろとストレス捨てにショッピング　房枝
うろうろと何考える檻の熊　東吉

うろうろの老婆にそっと少女の手　岩　夫
クレジット物見遊山の夢のあと　洋
クレジット金の成る木のような顔　守
金くれるクレジットなら入りたい　寿　海

岩美川柳会　石谷美恵子報

港町猫の姿が見当らぬ　蟹　郎
町がいま動く合併しない町　螢
私より別嬪さんの居ない町　はるお
町中の噂になった恋女房　公　子
難しい人もいるけど僕の町　完　司
私の家出町内ひとまわり　一　瑤
わが町を自慢するのも楽じゃない　きみ子
この町に生れ育って死んでゆく　幸　安
橋ひとつ越えて賑わう町がある　和　子
この町は倖せさがし途中下車　りん子
そろそろと運命線の橋渡る　忠　良
星影のワルツそろそろ宴果てる　公　乃
そろそろじゃ記録されない万歩計　節　子
そろそろと歩いています古希の秋　稔
研究の成果そろそろ博士号　幸　枝
悪知恵が余り返っていて元気　石花菜
定年後両手に余る役をもつ　圭一郎
骨のある男と褒めて持て余す　睦　子
余生とは無礼講寿は現役だ　茶　子
余るほどないが暮らしに足る貯金　孝　男
余るほど老人パワー湧いてくる　重　忠
余るほど金はないけど暇はある　一　京
そろそろと風穴明けてよい職場　一　粋
こだわりを脱いで余生が軽くなる　清　帆
余る米パン食べながら嘆いてる　たぬ
余り物食べて足腰まだ元気　菖　子
割り切れず余った金がややこしい　雅　女
余るほど盛って熟女のバイキング　美恵子

岬川柳会　八十田洞庵報

人間として恥ずかしい偽の一字　和　香
片ちびの恥かしい靴感謝状　令　子
ゆれ動く心静めて深呼吸　年　子
謎ひとつ解けてロマンが消えて行き　俶　子
淡い恋添えて伝える糸電話　蛙　城
一寸した気遣い部下がやる気出す　東　吉
奇抜な服の友が車内で寄ってくる　とみ
逆風もヨットに習い斜に進む　茂　平
夫婦して貧しくとも胸はって　洋　子
アルバムで胸のときめき蘇る　富美子
針箱に母のないしょが秘めてある　和　美
年寄りはヘソ出しルックに目をそらし　圭　子
薬害にみんなの笑顔いつの事　桜　琴
お手頃は人に話せぬことばかり　広　作
恋と学叶えと絵馬に欲ばりぬ　洞　庵

川柳塔おおとり　福田　登美報

濾過すれば話がひょっと変りそう　雄　々
ひょっとして月へ行けるか小銭貯め　以和万津
ひょっとして現実になるめぐり逢い　艶　子
ひょっとして地球は海に沈むのか　道　子
温暖化地球前兆まとまらず　小　生
解散の前兆という稲光り　螢
だだこねる子の前兆はおく深い　ヒロ子
度忘れの数ふえたなと苦笑い　清　子
ていねいに地球を洗う時がきた　真　一
果てしない空を仰いで目を洗う　風　花
いつまでの命か今朝も顔洗う　登　美

川柳塔みちのく　小寺　花峯報

オブラートみんなゆがめてみんな飲む　京
子供から歪む日本に誰がした　良　彦
遠隔の子のメール抱く今を抱く　青　夏
マドンナに出会えぬ僕の紙芝居　霜　石
元旦の空へ飛び交う初メール　きよし
パック中ですくっつかないで下さい　和香子
自分史を煮込みうどんに入れてみる　柳　子
ゆがむ背をシャッキリ正す試着室　洋　子
真っ直ぐ見ようゆがむ心も直せそう　ヒサ子
仲直り決めかねている桃の種　あすなろ
寅さんに似てると好きな人が言う　成　柳
ぐずぐずと少女の中の蜃気楼　一　呑
将棋囲碁ぐずぐずすると負けますよ　隼　人
ペコちゃんを歪めるお前鬼かいな　順　風
義理捨ててしまうとゆがむ縄電車　銀　波
温かい言葉詰まったメール着く　ふさゑ
オーイお茶時代に負けた粗大ゴミ　花　匠
ぐずぐずすると思春期が逃げて行く　雅　城

ぐずぐずして恋を逃がした木偶の坊　愁女
氷山がくずれ歪んで行く地球　井蛙
虹を見て僕だけが持つ孤独感　黙人
飾らない言葉で通じ合うメール　岳水
僕の歩んできた道は蜃気楼　花峯
九条を叫ぶムンクの顔をして　慕情
雨マークぐずぐず海の喪が続く　劦
泣けばすむはずの涙が出てこない　五楽庵

豊中もくせい川柳会　江見　見清報

かわいい花咲かせて草の自己主張　庸佑
夢ひとつしっかり米を研いでいる　重人
昭和史の一部消したい暗い過去　啓生
まっとうに生きよう蛙の子は蛙　タミ
拉致家族の期待はまたも遠くなり　石舟
人生にまさかまさかの長丁場　知香子
赤い服着て老残の匂い消す　比ろ志
一族の期待が重い御曹司　(久)千代
グループの文殊の知恵に花が咲く　慶子
トンビの輪見てたら消えていった鬱　萬的
自分史に飢えと渇きのしみがある　早人
古稀の冬まさかの雪が降り積もる　希久子
年の瀬は親も夫も下男下女　千津子
贅沢は敵だと今も思う日々　尚士
皆知ってるらしいが白を切り通す　肋骨
優柔不断すぐに消しゴム使う癖　幸雀
瓜の蔓メロンの出来る夢を見る　宇乃子
生きているもっと生きたい青い地球　都代子
お化粧が女の年を謎にする　巴子
キャンドルの吹き消し孫の息も借り　見清
悪口を聞いた柩が揺れている　美義
大掃除結局なにも捨てなんだ　求芽
カレンダー期待しながら掛けかえる　玲子
ふらつきを覚え初めたはボクの独楽　満寿己
身の丈に合わせて暮らす知恵袋　美智代
親も子も心が晴れるちひろの絵　則彦
期限改ざん鈍感力でやり過ごす　佳恵
ライバルとゆっくり飲んだ定年日　寅次郎
埋み火のような生き方がいいね　寿美子
娘が嫁ぎ消えてしまった赤い靴　勇治
ハンカチの予備一枚にある情け　志津子

翠洋会　谷口　義報

莫山の書が踊ってる酒バック　桃花
エンピツを耳にはさんで競りの市　春々
しとやかな女の意外な男文字　茶一
乱暴な文字を元気と褒められる　集也
短篇に収め切れない自分の史　捷歩
諸行無常やがてわたしも忘れられ　千叡子
老夫婦忘れた事をなすりあい　志華子
青い空悲しい事は忘れよう　すみ子
忘れてた初心とり出し磨いてる　久峰
もろもろの悪夢を寄席で忘れ去る　理恵
忘れたと言えば呆けたんかと言われ　れんげ
適当に忘れて次を詰め込もう　満作
人間の驕り初心を忘れてる　笑わしてくれとピエロに頼まれる　蕉子
ほほ紅をつけてもピエロには負ける　千梢
素っぴんのピエロの涙見てしまう　昭
家族団欒ピエロ演じる三歳児　正雄
諦めをバネに人生やり直す　水昇
クリスマスツリー木魚の音を聞いている　照子
お愛想の笑顔もちゃんと返しとく　さと美
喪のハガキ増えて我が身を引きしめる　舞夢
返杯が怖くてお酌できぬ下戸　げんえい
万能細胞もっと長生きしたくなり　富子
毎日をゴマ料理食べ胃の掃除　日の出
添書きの癖字が温い年賀状　恭昌
昔なら腕まくりしたお正月　義
善人の嘘がいかにも嘘っぽい　楓楽

川柳さんだ　北野　哲男報

手拍子に浮かれて踊る猿芝居　順子
一円の領収書には拍手する　歳子
大成功陰に皆んなの汗涙　キヨミ
カラオケの拍手で上司誉め殺す　正和
重箱のおせち嬉しく揃う春　美紗子
下駄箱に下駄は全然入れてない　朋月
湯タンポが人気沸騰原油高　雅司
ふと気づく親のおかげと言う言葉　婦美子
母さんが居ると集る大家族　二英
温暖化止めて未来へプレゼント　茂山
政治家は筋金入りの嘘をつく　好文
お願いに二ツ返事の有難さ　和代

もらうのは大好き文句言いません　章子
下心聞いてみたさの縄のれん　一泉
根っからの善人だから気を遣う　忠
三行の辞令拍手で送られる　哲男
嘘いくつ足して笑顔の母看取る　哲夫
夕陽する街友情のオルゴール　千津子

いずも川柳会　佐藤　治代報

なんてこった魔女にハートを盗まれた　芳山
心配が蜂の巣ほどに膨らんだ　圭詩朗
チチンプイプイ心の傷はとばないか　ちえ
潤滑油点して心ときめかせ　たえこ
ご用心あまい仕掛けがあるワイン　しげる
少しだけ他人に口をはさむ石　祐次
はさんだらこの倖せは離さない　かずえ
押し車押して野菜を見て帰る　キミエ
この路を行けばふくらむ夢がある　治代
生活に彩を加えているワイン　佳子
わたしの隣で老母が安心して眠る　寿美
路地裏を花一輪が明かくする　まこと
おおらかなワインはいつも聞き上手　歌子
三面鏡女心がぐらぐらと　敬子
抱きしめたワイン日ごとに甘くなる　美江子
かくれんぼ心は残す花影に　すみこ
喜びを伝える足が浮く家路　喜子
肝心なところで口をはさまれた　多喜
ささくれた心にしみるありがとう　玲子
押されても動かぬ芯をもっている　房子
心配をかけてすまんと朝青龍　房緒
はさみ打ちされてるわたし今ピンチ　きみえ
ワイン通の友には嘘がようつけぬ　芙佐子
毒舌の力になった赤ワイン　左余
卒寿今路傍の石に噛われる　多賀子
心から愛していると言ったはず　茂美
かさこそ落葉私の心踏むように　文子
白ワイン赤いツメでは駄目ですか　蘭水
潮の引く大きな路で父に会う　章峰
銀に沸く今石見路が眼を覚ます　ちかし

すみよし川柳会　岩崎　公誠報

吉報をただひたすらにひたすらに　明江
家人待つあったかおでん炊きながら　崩
翔んでいる戻らぬ妻を待っている　篤子
間違えた場所で互いに待ちぼうけ　かりん
サンタさん待ちくたびれて夢の子ら　定子
泣かないで待っていたのに忘れられ　半銭
待ち疲れランク落して今の妻　りつえ
長旅を鬼が優しく待っていた　日の出
来るはずのない人を待つ応接間　伸子
待ちぼうけ何かいいことありそうな　幸子
前夜から並んでいます開店日　舞夢
待ってると男勝手に思い込み　桃花
心配で待った返事が吉と出た　裕之
ケイタイを睨みつけてる待ちぼうけ　遠野
午前二時角を生やした妻が待つ　昌紀
待った分待たしたるわと妻の乱　蕉子
待てるかと声を荒げて椅子を蹴り　正太郎
辛抱のできぬいらちで待つ気ゼロ　公誠

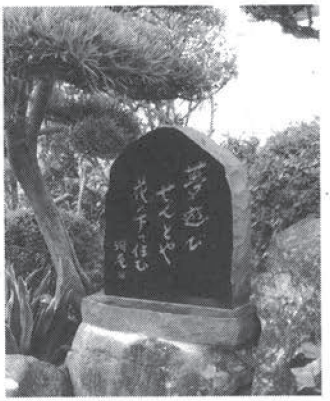
京都塔の会　都倉　求芽報

京の街たしかな和服また出会う　輝美
ひっそりともみじの赤も車折　萬的
奉納の名も平成に若返る　求芽
芸の神様えこひいきなどないですか　葉子
嵐電の一両車両なつかしさ　義
タレントの涙が落ちていた鳥居　扶美代
観覧車満員アベック引返す　篤子
あいにくと賞味期限のきた夫　則彦
遅刻した彼女雨まで連れて来た　孝一
古切手お役に立ちますユニセフで　春
救いようのないニュースが多すぎる　能子
惨敗感救ってくれる児の寝顔　肇
コンビニのおつり一円募金箱　麗
ためらいへ背中をポンと亡母の風　昌乃
風邪の時温いうどんは神仏　満子
悩みごと寝つきのよさに救われる　宏子
ええやんか気にせんときに救われる　啓子
白状をして救いがほしい胸のバラ　わこ
パフ置いてその手で貼ったサロンパス　とし子
妻にバラ捧げて何も変らない　尚士
改革の効果まだまだほど遠い　五月
よく効くと青汁飲ます妻の喝　静枝
今になり過去の失敗生きました　義子
期待せず続けた水泳二十年　益子

てのひらでさすると効果でる癒し　哲子
こころもち長いお経になるお布施　富喜子
効果なく積み上げられた健康具　すみ子
育毛剤かえたり叩いてもみたり　美籠
婆さんが薬石効あり生き返る　寿美子

句碑建立

夢遊びせんとや花の下に住む　洞庵



岬川柳会会長八十田洞庵氏（理事・大阪府）は19年11月、卒寿記念並びに「岬川柳会十五周年」記念として、自宅敷地内に句碑を建立した。

信濃毎日新聞飯田支局 新館ビル完成記念川柳誌上大会

課　題（各題新作2句ずつ4句一組）
「ニュース及び報告」
（長野）興津　幸代　選
（奈良）安土　理恵　選
（大阪）髙田美代子　選
（福島）山田　寛二　選
中澤　恵生　選
「自由吟」
（愛知）山野小百合　選
（徳島）尾形マツ子　選
（静岡）平野ふじ子　選
（福島）黒田　正吉　選
中澤　恵生　選
用　紙　便箋（連記）投句料一組千円
締　切　3月5日　発表6月初旬
賞　合点25位まで　天位一賞句入り楯
投句先　〒382　須坂郵便局私書箱18号　長野川柳協会宛

◇各地川柳会代表者会◇

2月16日（土）13時～16時
於アウィーナ大阪
案件＝①誌友拡大対策の経過と今後
②後継者の育成
③その他

あかつき川柳会

とき　3月14日（金）14時から
会場　住まい情報センター（地下鉄天神橋六丁目駅3番出口）
兼題　光・破片・束・時事吟
投句先　〒559-0022 大阪南市箱作1586-14-102　森村　美花

なにわ柳壇今年の10秒

―19年12月22日朝日新聞発表―（太字は本社同人）

川柳塔社理事長　**西出　楓楽　選**

最優秀句

戦争を語らぬ父は棄権せず　棚原　修

秀　句

ときめきの種にも水を忘れない　**徳山みつこ**
どきどきして地球を見てるお月さん　松田　篤
危うさをじっと見守る時も要る　**森田　明子**
青空にピンチ小さくなってくる　富原　さよ
メイク落として今日は私の休演日　吉川　茉莉
わが妻は時に謎めく深海魚　**福岡　末吉**
そろばんの塾だけだったよき時代　**奥　時雄**
物忘れ神にいただく終の才　**村上　直樹**
深読みをし過ぎた傘がひらかない　山岡冨美子

番傘川柳本社幹事長　**田中　新一選**

最優秀句

生き様を脱がされまいと老いの日日　河村初太郎

秀　句

愛犬が夫婦の亀裂嘗めまわす　佐々木四郎
鳥の声今日も生きてる生きている　喜田　啓之
喝采はなくても僕の好きな道　**佐甲　昭二**
どん底を這って念仏増えて来る　柚田　重代
腹いっぱいの豚にしあわせ感がない　源田　啓生
たくましく生きる力を持つ雑種　**村上　玄也**
騙されぬように暮らせば孤独なり　佐藤　隆治
故里が恋しくなった柿の色　吉道あかね
伝統の味を守っている重石　石田　隆彦

第8回　春はくろぼこ川柳大会

日　時　**4月6日**（日）　10時開場
会　場　新日本海新聞社中部本社ホール
（℡0858－26－8300）
JR山陰線「倉吉駅」徒歩15分
宿　題（欠席投句拝辞）各題2句　締切11時30分
「　右　」　天根　夢草　選(茨　木)
「なびく」　河内　月子　選(　堺　)
「うつろ」　村上　玄也　選(　堺　)
「ホテル」　奥田　勝子　選(益　田)
「ずるい」　中村　金祥　選(鳥　取)
「からむ」　西谷　悦子　選(八　頭)
「　棚　」　和田　三郎　選(湯梨浜)
表　彰　新日本海新聞社賞(最優秀作品・優秀作品)
川柳塔社　主幹　河内　天笑　選
なりすな記念賞(総合上位3人)秀句賞(各題3句)
会　費　2,000円(粗品特集号呈)昼食弁当券500円
懇親会　2,500円（当日受付16時30分終了）
お問い合わせ　鈴木公弘℡0857-84-2886
〒689-0343 鳥取市気高町飯里84-4
宿泊日・性別人数をお知らせください(2/10日締切)
主　催　くろぼこ川柳会　(共催)川柳サークル21
後　援　新日本海新聞社　青谷福祉会
鳥取県川柳作家連盟　他

川柳文学コロキュウム
5周年記念川柳大会

と　き　**2008年3月2日**(日)開場11時(出句締13時)
ところ　グランキューブ大阪(大阪国際会議場)
大阪市北区中之島5丁目3番51号
(リーガロイヤルH西隣)
TEL　06(4803)5555(代表)
事前投句「自由吟」赤松ますみ謝選(葉書
2句、2月5日締切)
宿　題(各題2句)
「至る」板野 美子選　「狭い」井上 一筒選
「覗く」大西 泰世選　「 場 」小山 紀乃選
「宇宙」佐藤 岳俊選　「 店 」新家 完司選
「 鳥 」徳永 政二選　※各題 秀句に呈賞
席題・印象吟(選者は当日出席者に依頼、入選句は後日)
会　費　2千円(発表誌呈)懇親宴(希望者)6千円
欠席投句　(千円。原稿用紙で2月25日必着、
欠席投句賞あり)
投句先　〒576-0033　交野市私市2-6-8
嶋澤喜八郎　方
川柳文学コロキュウム
5周年記念川柳大会事務局 宛て
(TEL.FAX 072-892-1387)
主　催　川柳文学コロキュウム

第32回 全日本川柳2008年福岡大会 川柳作品募集要項

～きんしゃい まつりと人情の街 ふくおかへ～

日時 平成二十年六月八日（日）午前九時半開場

会場 アクロス福岡イベントホール（B2）
〒八一〇―〇〇〇一 福岡市中央区天神一―一―一
TEL〇九二（七二五）九一一三

交通機関 JR博多駅から地下鉄で7分 福岡空港から地下鉄で11分
（以上いずれも地下鉄天神から徒歩5分）

宿題 **第一部 四月十五日締切（当日消印有効）**
（事前投句 高校生・一般の部）
「旗」小島 蘭幸 選 「棒」津田 暹 選
「祭り」石田 一郎 選 「隠す」土田 欣之 選
（事前投句、小・中学生の部）
「まつり」てじま晩秋 選 「人 形」松永 千秋 選
「自由吟」安藤富久男 選

専用用紙のない方は、2×16㎝の句箋一枚に一句宛記入・各題二句・無記名、封筒の裏面に住所・氏名明記。

投句料 一、〇〇〇円（定額小為替・現金書留）を同封して左記宛郵送のこと。

投句先 **小中高生は投句料無料**
〒五三〇―〇〇四一 大阪市北区天神橋二丁目北一―一一 ステップイン南森町九〇五
㈳全日本川柳協会 宛
TEL〇六（六三五二）二二一〇 FAX〇六（六三五二）二四三三
郵便振替口座 〇〇九七〇―九―三五七五

宿題 **第二部（当日投句、十一時十分締切）**
「人 形」敷田 無煙 選 「屋 台」三宅 保州 選
「方 言」近江あきら 選
各題二句当日配布の句箋に記入

第二次選者 塩見 草映・大木 俊秀・河内 天笑
新家 完司・田中寿々夢

会費 四、〇〇〇円（昼食、記念品含む）

表彰 (1)文部科学大臣賞 (2)参議院議長賞 (3)川柳大賞
(4)大会賞 ジュニア部門は賞状とメダルを予定

＊

㈳全日本川柳協会大会委員長 磯野いさむ
全日本川柳福岡大会実行委員長 大場 可公

∧表彰式典・前夜祭ご案内∨

◎表彰式典 平成二十年六月七日（土）午後五時半～
（功労者・大会十年連続出席者・川柳文学賞）

◎前夜祭 表彰式典後、同一会場で

会 場 ソラリア西鉄ホテル 8Fホール
〒八一〇―八五八七 福岡市中央区大名二丁目六（西鉄天神駅西）
TEL〇九二（七八一）〇二一一

参加費 八、〇〇〇円（会食・アトラクション）

大会・前夜祭のお問い合わせ先
〒八一一―三六二 福岡市南区長住一―五―一八 日川協福岡大会事務局 宛
大場可公 方
TEL・FAX〇九二（五五一）六一三六

大会・前夜祭参加費の送金先 **四月十五日締切**
郵便振替口座番号 〇一七八〇―九―一三四九〇〇
日川協福岡大会事務局

∧宿泊・観光ご案内∨

宿 泊 ソラリア西鉄ホテル・アークホテル博多 他
宿泊料金・一泊朝食付・税込み 一五、〇〇〇円～七、〇〇〇円
航空・宿泊パックもあります。
一名一室希望の方はその旨記入して下さい。

観 光 ▽初夏の筑紫路を巡る（特別史跡大宰府政庁跡他）
六月七日（土）正午～十七時 四、五〇〇円
JR博多駅新幹線口 十一時半集合
最少催行人員 四十五名様

▽博多湾ディナークルーズ
六月八日（日） 十九時 五、〇〇〇円

宿泊、観光の申し込みは、別途（ハガキ）申込書に記入し、ご送付下さい。
四月十五日必着です。

宿泊・観光申し込み・問い合わせ先
トップツアー㈱ 福岡支店 担当者・千代島 誠
TEL〇九二（七三九）〇〇一〇 FAX〇九二（七三九）七七七三

柳界展望

○第19回ふれあいの祭典川柳祭、事前投句の部（投句数1623句）に同人の次の句が特選に選ばれた。

三度目のジャンプだ風よ見ておくれ　山本　玉恵

胸のホールで小さな蛍飼うている　大石あすなろ

母さんを畳の上で見送った　志田　千代

○堺まつり協賛秋の誌上川柳大会は、堺川柳会19年11月号で発表された。

〈天位〉

ひと言の無駄がとっても温かい　山本希久子

一徹の職人無駄を厭わない　井伊　東吉

目が覚めてまた暗闇に戻される　高瀬　霜石

シャガールの蒼モネの青鳥還る　木本　朱夏

○平成19年度愛媛県民総合文化祭川柳大会は11月18日県女性総合センターで開催された。参加者220名。同人の受賞句。

愛媛県知事賞

水の無い川ストレスを溜めている　黒田　茂代

○第26回鳥取県没句川柳供養大会は12月9日(日)開催、会場＝鳥取全労済ビル。参加157名、同人の総合成績。

1位―鈴木公弘、2位―倉益一瑶、4位―野口節子、7位―山岡富美子、8位―土橋はるお、10位―夏目一粋。また読売新聞とっとり文芸川柳年度賞に夏目一粋氏、佳吟賞に盛田夢路氏が入賞。

○南大阪川柳会19年度年間賞受賞者　西出　楓楽

○いずも川柳会、19年度いずも賞は次の通り。

〈いずも大賞〉

エッセイの中でわたしを泳がせる　城　多喜

○京都塔の会年間最優秀賞受賞　山田葉子。多得点賞①（同点2名）山田葉子・都倉求芽　②桝本宏子　③高島啓子　④三宅満子　⑤藤井則彦　⑥山本昌乃

▽出　版△

新家完司氏（理事・鳥取県）は、1月7日付で川柳句集（五）『平成二十年』を発刊（B6版137頁）（鑑賞は次号）

▼訃　報▲

神原文さん（同人・堺市）12月16日逝去。18日ベルコシティホールおおとりに於て葬儀が行われ、天笑主幹楓楽理事長他多数の同人が参列した。追悼文95頁

▽同人動向△

○12月9日、鳥取県没句川柳供養大会出席の為、西出楓楽理事長他5名鳥取市行。

▽訂正とお詫び△

○12月号96頁下段23行目、渡辺好栄→渡部好栄。

○1月号85頁6行目、銀砂利を→銀舎利を。15行目、被災地のテント村→被災地のテント風呂。90頁上段西出風楽→西出楓楽。103頁中段22行目、吊る絵馬→吊るす絵馬。82頁13行目園田獏杳→薗田獏杳

▽新誌友紹介△

堺　市　**近藤　治子**
紹介者　矢倉　五月

大阪市　**石丸正太郎**
紹介者　榎本日の出

豊中市　**藤沢　長一**
紹介者　水野　黒兎

▽常任理事会△

1月7日(月)出席17名、①各地川柳会代表者会の内容について②常任理事登用資格③主幹・理事長の選挙権の範囲④会計部提案事項の継続審議⑤定例確認事項⑥各部報告事項⑦その他⑧次月審議事項。

次回2月7日(木)午前10時

―○―○―

反戦反核詩歌句集第21集

『明日へ吹く風』普及販売にご協力下さい。

一冊1000円　送料290円、二冊以上送料500円

申し込み先　〒536―0024
大阪市城東区中浜1―1―27
川端　一歩
TEL FAX 06―6965―0817

新同人紹介

伏見　雅明（ふしみ　まさあき）

推薦者―天笑・月子・玄也

句会名	日時と題	会場と投句先
川柳 藤井寺	17日(日)午後2時締切 あいさつ・脇	藤井寺市立生涯学習センター・シュラホール3F 近鉄南大阪線藤井寺駅下車南徒歩10分 〒583-0023 藤井寺市さくら町2-2-201 髙田美代子
川柳 ねやがわ	17日(日)午後1時半締切 医者・落書・ストレス・自由吟	寝屋川市立総合センター4F 京阪寝屋川市駅からバス総合センター前 〒572-0063 寝屋川市春日町9—9 高田博泉
岬川柳会	17日(日)午後1時半締切 闇・投げる・うまい	**(淡輪17区集会所)** 〒599-0301 大阪府泉南郡岬町淡輪3592 八十田洞庵
もくせい 川柳会	18日(月)午後1時50分締切 困る・魅力・チェック・自由吟	豊中市中央公民館 阪急曽根駅南東徒歩5分 〒561-0801 豊中市曽根西町2—8—4 江見見清
川柳 さんだ	19日(火)午後1時より 鍋・夜食・ぼんやり・「自由吟」	三田市中央公民館 〒669-1515 三田市大原1553—12 北野哲男
川柳クラブ わたの花	22日(金)午前9時半から 目標・空気・不況・自由吟	八尾市生涯学習センター 〒581-0866 八尾市東山本新町9-3-16 吉村一風
東大阪市 川柳 同好会	23日(土)午後7時締切 看板・サイン・破る・耳	東大阪市立社会教育センター3階 近鉄布施駅北長堂小学校隣 〒578-0925 東大阪市稲葉3—3—21 片岡湖風
和歌山 三幸 川柳会	23日(土)午後1時から 持つ・油・屋根	県民文化会館 5階 大会議室 〒640-8111 和歌山市新通7—17 古久保和子
はびきの 市民 川柳会	24日(日)午後2時締切 待つ・ちょろちょろ ウインク・財布	羽曳野市立陵南の森公民館 近鉄高鷲駅北東徒歩10分 〒583-0882 羽曳野市高鷲8—31—11 塩満 敏
川柳 ふうもん 吟社	24日(日)午後1時より メリハリ・ののしる・副作用	JR鳥取駅構内 シャミネホール 〒680-0824 鳥取市行徳2—632 田中かをる
南大阪 川柳会	25日(月)午後1時から 下敷・了解・あいまい ストレス	住まい情報センター(大阪くらしの今昔館・5F) 地下鉄谷町線・堺筋線天神橋筋6丁目駅③号出口 〒540-0004 大阪市中央区玉造1-16-13-304 前たもつ
京都 塔の会	25日(月)午後2時締切 やすやす・噛む・行儀	ハートピア京都 〒600-8428 京都市下京区諏訪町通松原下ル 弁財天町328—202 都倉求芽
松露 川柳会	25日(月)午後7時半から 梅・寒い・雑詠	溝口五区集会所 〒689-4201 鳥取県西伯郡伯耆町溝口757-3 小西雄々
尼崎 尾浜 川柳会	26日(火)午後2時締切 梅・聞く・自由吟	尼崎市立立花公民館 尾浜分館 事務局 〒661-0953 尼崎市東園田町2-45-8 山田耕治

★日時・会場などが変更になる場合は、本社事務所(06-6779-3490)へご連絡ください。

2 月 各 地 句 会 案 内

（開催日順）

句会名	日時と題	会場と投句先
尼崎 いくしま	1日(金)午後2時締切り やがて・充実・雑詠(A・B)	サンシビック尼崎３F　阪神尼崎駅南西徒歩５分 〒661-0035 尼崎市武庫之荘５-25-17　春城年代
富柳会	2日(土)午後2時締切り 紅・和む・自由吟	富田林中央公民館 （近鉄南大阪線富田林駅下車南へ200m） 〒584-0043 富田林市南大伴町4-1-10　池　森子
城北 川柳会	2日(土)午後1時開場 火種・喋る・カーテン・自由吟	旭区老人福祉センター３F 地下鉄千林大宮駅３番出口左隣 〒535-0002 大阪市旭区大宮4-10-18 神夏磯典子
倉吉 川柳会	2日(土)午後2時締切 名画・どたばた・流れる	倉吉市　明倫公民館 〒689-2221 鳥取県東伯郡北栄町由良宿2072-17 谷口次男
川柳塔 唐津	4日(月)午後1時半から 始める・腕・ゴルフ	唐津市　栄町公民館 〒847-0824 唐津市神田1517―13　宗　水笑
川柳塔 な　ら	8日(金)午後1時から 潤う・霜・役目	奈良市立中部公民館4F（近鉄奈良駅④出口歩5分） 〒639-0251 香芝市逢坂２―720―20 大内朝子
川柳塔 みちのく	9日(土)午後5時半締切 腕・算盤・短気	弘前市桶屋町4-7 居酒屋とんぼ1階「川柳道場」 〒036-0161 平川市杉館宮元53―１　小寺花峯
堺川柳会	9日(土)午後2時締切 朝・産む・「ひたち(折句)」	堺市総合福祉会館 〒593-8305 堺市西区堀上緑町2-16-3 河内天笑
川柳塔 まつえ	9日(土)午後2時締切 福・滑る・叶う・ぞくぞく	松江市雑賀町　雑賀公民館 〒690-0015 松江市上乃木９―23―22 三島淞丘
川柳塔 打吹	9日(土)午後2時締切 土・音・布・そわそわ	倉吉市上灘町９　上灘公民館 〒682-0034 倉吉市大原637―３　牧野芳光
八尾市民 川柳会	10日(日)午後2時締切 関白・開く・ぼうぼう・雑詠	山本コミュニティーセンター３F　学習室 （近鉄山本駅） 〒581-0086 八尾市陽光園1-3-12-305 宮西弥生
川柳塔 わかやま 吟社	10日(日)午後2時締切 補う・足跡・ベルト・「食器」	近鉄カルチャーセンター２F　JR和歌山駅前 〒641-0012 和歌山市紀三井寺111―2 牛尾緑良
西宮北口 川柳会	11日(月)午後1時から 逃げる・積む・シール・自由吟	西宮市立中央公民館 阪急西宮北口駅南出口徒歩3分 プレラにしのみや 〒662-0841 西宮市両度町２―19―515　山本義子
ほたる 川柳 同好会	12日(火)午後1時半締切 予感・計画・いっぱい	豊中市立蛍池公民館 阪急・モノレール　蛍池駅駅前ビル５F 〒561-0813 豊中市小曽根2―4―1　水野黒兎
岸和田 川柳会	16日(土)午後2時締切 影響・終える・快適・ギャグ	岸和田市立福祉センター 南海線岸和田駅東歩３分 〒596-0807 岸和田市東ヶ丘町808-586 井伊東吉

編集後記

☆川柳塔社では「ごま」をテーマに川柳を募集しています。1月31日締切（当日消印有効）で受付けていますが、投句まだの方はお急ぎ下さい。募集要領は1月号表紙裏に掲載しています。

☆大正13年に創刊された『川柳雑誌』は、『川柳塔』に比べ、かなり大きいB5版の大学ノート大、創刊号は33ページです。最初に同人20名の名簿が記載されています。数ヵ月後には30名となり、名簿は記載されなくなりましたが、発表句から同人がどんどんふえていくのがわかります。編集兼発行印刷人麻生幸二郎とあり、巻頭言、同人吟選、編集後記まで自身で書いておられたようです。

大正13年10月の編集後記にはこう書かれています。

―作句のシーズンになりました。種々変った面白い句会が催されています。句会のたびに新しい方々が出席、熱心に作句されることを嬉しく思います。先輩諸氏の努力の効が漸く現れてきたわけです。川柳全盛の時期も遠くはありますまい―この『川柳雑誌』は昭和40年9月号（460号）まで続き路郎の死と共に廃刊となり、同年10月号から『川柳塔』として生まれ変わりました。

☆川柳塔の基本理念は路郎精神にあります。「一句を遺せ」「いのちある句を創ろう」「川柳は人間陶冶の詩である」等路郎の言葉を忘れてはならないと思います。時代は変っても、底を流れているものは変らぬはず、川柳塔の目指す道を迷わず進みたいものです。

（希）

ひとこと

本社の句会場が全面禁煙に

出句を終えてロビーに出ると、いつもは喫煙者に占拠されているソファーで女性グループがわいわい話している風景に会いました。

柳友のひとりが「ダン吉さん、灰皿が無くなったんよ。嬉しいわ」。

ホテル・アウィーナ大阪は「健康増進法」施行（02・5）以後も私の「喫煙室を作り灰皿は撤去してほしい」の要望に「喫煙のお客さんの理解が…」と。

今回の全館禁煙の措置にフロントは「長くご迷惑をかけました。いえ、特に苦情はなく皆さん玄関の外で協力していただいています」。句の詠めない私の悩みは続きます。

（岩佐ダン吉）

◇大阪の日の出と、我が家からみえる生駒の山からの日の出では二十分くらい遅い。毎朝この日の出を楽しみにカーテンを開く。

◇柿本人麻呂が「ひむがしの野にかぎろいの・・・」と歌った、あのかぎろいを期待しての朝である。が、この「かぎろい」めったにお目にかかれないのである。

◇早朝猟に出かけた人麻呂が振り向いたひむがしの空の余りの美しいさまを詠んだという。その情景を毎朝期待しながら起きるのだが、たいていは白々と明けてくるのである。しらじらしいとはホントこの事である。

◇この「かぎろい」を見る会が、各地で行われているようだ。大宇陀では陰暦の十一月十七日におこなわれている。くわしくは大宇陀観光課に。

◇朝日に向かう気持ちだったか、洗濯物は、前側を東に向けて干すようにと亡母に言われたものだ。この言葉がなんとなく朝から、黄泉の国に向かっているようで、忌み嫌っていたのではと思う。そんなことで反対には絶対干さないようにしている。そんなこだわりは、夫にも言ってある。始めは面倒ぐさがっていたのだが、近頃「洗濯物は、前を東に向ける」とのたまう。私も結構俗信者かも。（恵）

川柳塔（同人）・水煙抄（誌友）投句用紙

種目「　　　　」発表（4月号）

地名　都道府県市

姓雅号

きりとりせん

◎8句を楷書で正確に書き、15日までに到着するようお送りください。

同人・誌友　マルで囲んでください。

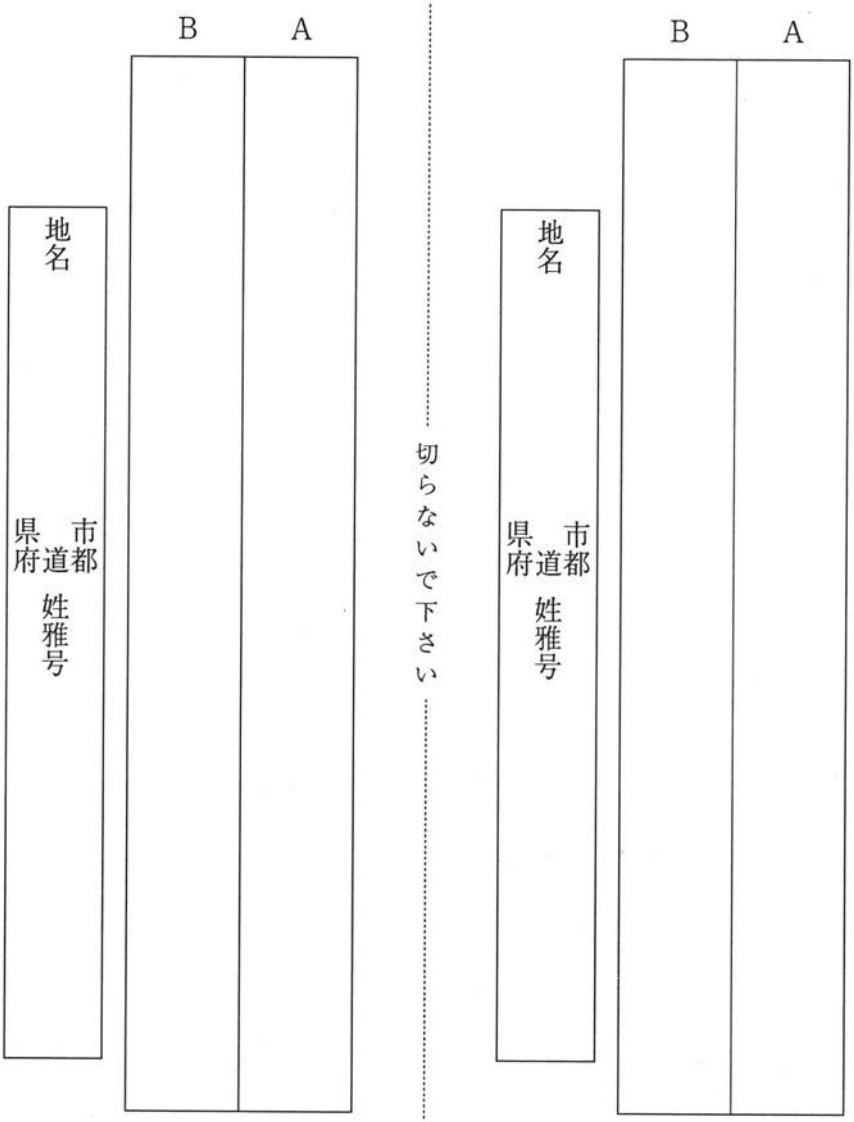
投句先　〒543-0052 大阪市天王寺区大道1丁目14番17号 花野ビル201

檸檬抄投句用紙

「横文字」　（２月15日締切）

４月号発表

西口いわゑ　選　――共選――　鈴木　公弘　選



左右に同じ句を書いて下さい

本社２月句会

とき　２月７日㈭ 午後１時開場・２時締切り
―開催時間、締切り時間にご注意下さい。

ところ　アウィーナ大阪　４階　金剛
天王寺区石ケ辻町19―12　電06・6772・1441

おはなし　鈴木百合子

席題「　」　川端一歩選

兼題「だらだら」　森村美花選
「情」　吉岡修選
「迷う」　居谷真理子選
「クイズ」　宮西弥生選
「留守」　河内天笑選
（各題２句以内）

会費　１０００円　投句料　５００円（切手可）

本社３月句会

７日（金）午後１時から

兼題「気まずい」「封」「誘う」
「ビデオ」「羽化」

作品募集

４月号発表（２月15日締切）

川柳塔（８句）　河内天笑選
水煙抄（８句）　西出楓楽選
愛染帖（３句）　新家完司選
檸檬抄「横文字」（２句）　鈴木公弘　西口いわゑ　共選
一路集（３句）
「始める」　大石あすなろ選
「腕」　森山盛桜選
「ゴルフ」　村上玄也選
初歩教室「それから」（３句）　三宅保州担当

５月号
檸檬抄「沖」
一路集「織る」「種」「こっそり」
初歩教室「化粧」

第26年度　夜市川柳募集

第９回「巣」　赤井花城選
ハガキに３句　２月末日締切

投句先　〒593-8305 堺市西区堀上緑町2-16-3
河内天笑方　堺川柳会

「川柳塔」への投句について

(1) 川柳塔欄への投句は同人、水煙抄欄へは誌友（誌代半年分以上前納の定期購読者）に限り、本誌綴込みの投句用紙を使用してください。
(2) 愛染帖・檸檬抄・一路集への投句は、同人・誌友に限ります。初歩教室は誌友のみとします。愛染帖・一路集は川柳塔柳箋（本社事務所取り扱い）、檸檬抄は本紙綴込みの投句用紙を使用してください。
(3) 各欄への投句は、必ず氏名と住所（県・市名）を明記してください。
(4) 各欄への投句数および投句締切期日の厳守をお願いします。

川柳塔本社事務所へのご連絡は、土・日曜、祝日を除く平日の10時から16時までにお願いいたします。

定価　八百円（送料76円）
半年分　五千円（送料共）
一年分　九千八百円（同）
二〇〇八年（平成二十年）二月一日発行
発行人　河内權治
編集人　山本希久子
印刷所　美研アート
〒543-0052
大阪市天王寺区大道一―一四―一七
花野ビル２０１号室
発行所　川柳塔社
電話（〇六）六七七九―三四九〇番
振替　〇〇九八〇―四―二九八四七九番

ホームページアドレス　http://www.senryutou.join-us.jp/

昭和四十一年一月九日　第三種郵便物認可
平成二十年二月一日発行（毎月一日発行）
創刊大正十三年　通巻九六九号　川柳塔　二月号
定価　八百円（送料　七十六円）

医療法人社団
湯川胃腸病院
・日本医療機能評価機構・ISO9001-2000認証取得
健康保健取扱　看護２A・緩和ケア病棟
・消化器科・内科・外科
・放射線科・ホスピス
・デイサービスセンター
診療時間
月～金　8:30～16:00
土　8:30～11:00
JR桃谷駅徒歩3分
http://www.yukawa.or.jp
電話 大阪(06) 6771-4861(代)

雑誌 05703－2